

国会図書館蔵明治期都々逸本(二)

明治十五年(明治十七年)

菊池真一

国会図書館所蔵の明治期都々逸本のうち、刊行年の明らかなものを、「近代デジタルライブラリー」によりつつ、年代順に翻刻紹介する。

国会図書館蔵書は、著作権の切れたものについては、翻刻許可を願い出なくても、自由に翻刻してよいとのことである。

「一」内は角書。振り仮名は特別なものを除いて省略した。

三十一 『開化花揃都々逸』

明治十五年四月廿四日御届。尾崎民太郎編。請求番号：特 44167。

開化花揃都々逸

外題 年恒筆(表紙)

私しやいけ花根なしの身ゆへみづをさゝれていろをます

ぬしのざしきときくつれしさにあはてゝきものをつらげへし(一才)

とけて結んだねまきのひもがいまは糸にしのはた帯

はら立まぎれについ引ひいたふみのゆく糸が気にかゝる(一ウ)

ぬしの心とみやまのさくら霞がくれて木がしれぬ

お前のうはきをしゃしんにうつしよそのおんなに見せてやる(二才)

なにしおふみの八景さへもぜざがあるから人がすく

来たかどでゝみりやオヤ憎らしいうそを月夜の影ぼうし(二ウ)

ぢれて叶へばたれしもぢれるぢれずに時せつをまつがよい

親のいけんできら瀬田とても粟津はおもひがますはいナ(三才)

つらみのかずかずかけではいへど逢ばうれしく口へです

意地のはり合これ見よがしに登るやみじのこひのさか(三ウ)

アレサお待よいまでる蒸気のちにや見られぬぬしの顔

花にたはむれおもしろさうに遊ぶ胡蝶の菜のはたけ(四才)

まねく尾花にフトふりむけばかあいらしさよおみなへし

かぜにみだれし夜はしらぎくのつゆとかり寝の月の顔(四ウ)

ゆうべのつかれにツイとると夢にまでみるぬしのかほ

首尾が不首尾か不首尾が首尾かかへさぬ女にまつ女房(五才)

つらいわかれをこらへてかへしやあとはくらうのたねとなる

松のさかへをかげからいのるどうぞ見すてゝ下さるナ(五ウ)

ころぶざしきを往来などゝ云から巡査がふんでくる

月にてらされ雪にはふられせめて言葉の花なりと(六才)

なみだながらにひざすりよせてかはりやせまいとねんをおす

わたしの心は沢辺のほたるみづに焦れて居るはいナ(六ウ)

辛抱しやんせアレアノウめも辛苦しのいではながさく

口でけなして心でほめてめではおもひを通はせる」(七才)

いつそ言ふかいや言ふまいかむねにたゝんだした羽織

文をかくしてさとられまいとおもやそぶりが顔へ出る」(七ウ)

かたいよふでも時せつが来ればいつかとけゆく春の雪

待て寝られぬその夜はかねの来んとするさへ気にかゝる」(八才)

わたしや貧しいうら家のたゞみおもてはきれてもかはりやせぬ

思ひとゞいてこふなるからはやせた世帯もともかせぎ」(八ウ)

秋のつきかたまつ夜はつらい勢田の長文堅だより

せたいまとめてやしうれしやおもやおまへのまたうはき」(九才)

花はさくらとたれしもいへど私しやはらはぬ松がよい

まよふもつき世さともつき世ほどよく迷ふてよくさとれ

明治十五年四月廿四日御届

編輯兼出版人 神田区江川丁十二番地

尾崎民太郎(九ウ)

本書は、国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官裁定のもと、公開されている。

三十二 『浄瑠璃文句入』 撰どゝ逸

初編 五編

明治十五年五月二十九日御届。木村文三郎編。請求番号・特42-793。

「浄瑠璃文句入」撰どゝ逸 初編

芳春筆

東京日本橋区馬喰町二丁目一番地 木村文三郎版(表紙)

(広告)(見返し)

「浄瑠璃文句入」撰どゝ逸初編

編輯人 木村文三郎

過去も未来も先の世迄も(義太夫太功記尼が崎)夫の討ち死遊ばすを妻が知いで何とせふ。二世も三世も女夫じやと思ふてゐるに情

ない。盃せぬが仕合せとは余り聞へぬ光義様(下略) 女夫約そくしたものを(一一才)

尋ねあぐみしお前の居所(義太夫朝顔日記宿屋)こがるゝ夫の有

ぞ共知ぬ目くらの探り手に恋ゆへ心尽し琴。誰かは憂を斗為(一

二ウ)吟の糸より細き指先に。さす爪さへも八ツ橋のやつれ果たる

身をかこち。涙に曇る爪しらべ(下略)実に燈台元くらし(三才)

思ひ積りし心のたけも(義太夫奥州安達原雪降)こゝはお庭先の

柴折門。戸を叩くにもたゝかれぬ。不孝の(三ウ)報ひ。此垣一

重が鉄の門より高ふ心から泣声さへもはゞかりて。簀戸に食ひつき

泣るたる(下略)通じ兼たる瓦羅斯窓(四才)

女夫づれにて空とぶ雁よ(義太夫伽羅先代萩御殿)小鳥を羨む心

根を。お道理じやと云たさを紛らす声ももふるはれて私が(四ウ)

息子の千松が千松が。エ、コレ千松殿様の御機嫌をエ、何を泣顔す

る事がある。ちはそふても侍じや。コレ七ツ八ツから金山へ金山へ

一年待共まだ見へぬまだ見へぬ(下略)わたしや苦界でかこの鳥

(五才)

姿見に写るお前の笑顔に見とれ(義太夫関取千両幟稲川内)おし

ては云ぬもつれ髪びんのほつれを撫付る櫛のむねより夫の胸。(五

ウ)写せば写る顔と顔江戸長崎や国々へ行しやんすりや其跡の留守

は猶更女気の一人くよくよ物案じ(下略)人もさうかと案じすぎ

(六才)

二世とかはしたわたしへ気がね(義太夫おしゆん伝兵衛堀川)そ

りや聞へませぬ伝兵へさん。お詞無理とは思はねど。そも逢かゝる

はじめより末の末(六ウ)までいひかはしたがいに胸をあかし合

何の遠慮が入るものか(七才)

お前の写真を朝ばん見ては(義太夫本朝廿四孝回向場)思案に塞

がる一間には館の娘八重垣姫。云号ある勝頼の切腹(七ウ)有し

其日より。一間所に引籠り。床に絵姿掛まくも。御経読誦のりんの

音。こなたも同じ松虫の泣音に袖も濡衣が今日命日を甲ひの位牌に

向ひ(下略)一人くよくよものおもひ(八九才)

筆はとつても書く墨よりは(義太夫加々見山尾上自害場)跡に尾

上は胸せまり忍び涙の淵も瀬もあすは亡名を白紙に(八九ウ)硯

の海のこととはかとなき長文も跡や先書置筆の命毛も。露と消行はかなさを絶入ばかり忍び泣(下略) おちる涙にしめる紙(十才)
親の目がほを忍んでそして(義太夫伊賀越沼津) 灯火の消しよりアノ妙薬をどうがなと。思ひ付しが身の因果どうぞ御慈悲に是申今宵の事はこの(十ウ) 場切お年寄れしお前に迄苦勞をかけし不孝の罪(下略) 工面するのめぬしの為(十一才)
撰み撰みて野咲の梅を(義太夫義経千本桜すし屋) 過つる春の傾色珍らしい草中へ絵にある様な殿御のお出。維盛様とは露(十一ウ) 知ず女子の浅い心から可愛らしいとらしいと思ひ初たが恋の元。父も聞へず母様も夢にも知して下さつたら縦こがれて死れば迎(下略) 折れば主ある人の花(十二才)
人目憚り素気なくしても(義太夫菅原伝授寺子屋) 包みし祝義はアノ子が香奠。四十九日の蒸物迄持て寺入さすと云悲しい事が有か。育ちも生れも賤しくは(十二ウ) 殺す心も有まいに死る子はみめよしと美しう生れたが。可愛や其身の不仕合せ何の因果に抱瘡まで仕舞た事じやとせき上て前後不覚に泣叫ぶ。膝へ泪の一トしずく(十二才)
義理と情けにつひ絆されて(義太夫兜軍記琴責) さつても厳しい殿さん四相を悟る御方とは常々噂に聞たれど何の子細(十三ウ) らしい四相の五相の小袖に留る伽羅じや迄とあだ口に云流せしがけふの仰せにがと折た勤めの身の心を涙で忝いおつしやり様(下略) 眞実明せしわしが胸(十四才)
こがれこがれし私しがこゝろ(義太夫鎌倉三代記三浦別れ) 親に背いてこがれた殿御夫婦の固めない内はどうやらつんと心がすまぬ短い夏の一夜さに忠義のかくる事も有まい(十四ウ) 是程迄に附慕ふ私が心思ひやつて呉もせて心強やと緋威しにうら紫の色深き下略) 少しは不便と思はんせ(十五才)
いろはせず京と習ひし娘(義太夫お染久松質店) ソリヤ曲がない胸欲な高いも低いも姫ごぜの肌ふれるのは只一人親(十五ウ) 兄弟もふり捨て殿御に付が世の教へ。それにまだまだ悲しきは。夕部の風呂の上りばで。此腹帯をかゝさんが見付さんして(下略) 今はアイウエヲとサシスセソ(十六才)

操たてるはむかしの事よ(義太夫忠臣蔵九段目) 貞女両夫にま見へず譬へ夫に別れても(十六ウ) 又の夫を設けなよ主ある女の不義同前かならずかならず寝ざめにも殿御大事を忘るゝな(下略) 今じゃ権妻夫がさね(十七才)
かみへねがひし心が届き(義太夫おこま才三白木屋) そりや聞へませぬ才三様。お前と私が其中はきのふや今日の事かいな屋敷に勤た(十七ウ) 其中にふつと見初てはづかしい。恋のいるはを袂からそつとわたしが心では。天神様へ願懸て梅を一生断たぞへ其おかげやら嬉しい返事。書留ゆうびん早便り(十八才)
月夜がらす。ア、憎らしい(義太夫梅川忠兵衛新口村) 大坂を立退ても。私すがたが目立ば。かりかごに日を送る。なら(十八ウ) はたごや三輪の茶や。五日三日夜を明し。二十日余りに四十両。つかひ果して二歩残る(下略) 人目をつゝむほふかむり(十九才)
他人向にて逢ては居れど(義太夫阿波の鳴門) コレ今一度顔を引寄せて。見れば見るほど胸せまり。離れがたなき憂き思ひ(十九ウ) 夫と知ねど誠の血筋名残惜気に振返り。どこをどぶして尋ねたら。とゝ様やかゝ様に。逢れる事ぞ合してたべ(下略) 何所やら素振で悟られる(廿一才)
ぬしと二人で合り車(清元梅の春) 春げしき浮いてかもめのひいふうみいよういつか吾妻へつくばねのかのも此もを(廿一ウ) 都鳥いざ事問ん恵方さへ万吉原三谷ぼり。宝船こぐ初買によい初夢を三ツ布団(下略) 人にやしら髭枕ばし(廿二才)
積るいけんも身にしみじみと(清元明烏) そなたも共にと云たいがいとしいそなたを手に懸てどぶなる物ぞながらへて我なき跡で一ぺんの回向を頼むさらば(廿二ウ) やと云捨立を取付けて余りむごい情なや。今宵離れてこなさんの。まめで居さんす其身なら。又逢ことの有ふかと楽むことも有べきが。一人ざしきで夢うつゝ(廿三才)
誰も目につくアノ八重ざくら(清元権八) 栄へ行人一盛り花一時。あすは白井が身の果も(廿三ウ) 思案の外の罪科に引かれくるわへ通ひ路の。はでな姿に引かへてけふはあはれに散かゝる(下略)

あすの嵐が案じられ」(廿四才)

おもふお方と合ひ合ひ傘で(常磐津老松)大雨頻りにふりしかば帝雨をしのがんと小松の陰にふり給ふ此松忍ち大木と(廿四才)なり枝をたれ葉を重ねこのますきまを塞ぎて其雨をもらさざりしかば。帝太夫と云しやくをおくり下し給ひてより松を太夫と申とかや(下略)それから互ひに濡そめる(廿五才)

色香あらそふあの梅さへも(常磐津雲井曲毬)春はとそ酒。家ごととに礼者も廻る千鳥足。ヤアトセヤアトセ踊り見とれてお花(廿五才)見をついで一けん菖蒲面狐獵人庄屋の日待にお江戸芸者がひく三味に廻る日の春に近いとて老木の若やぎてそろしほらしやしほらしや(下略)やがて葉を染実を結ぶ(廿六才)

ぬしを待夜は夏でもながい(トキハツ将門)ほのほのと雀さへづる奥ざしき燈火しめす男共屏風ひとへのそなたにはまだ睦ごとの聞ゆれど我は(廿六才)見たらぬ夢を先早衣々と引きしめる帯かくさるゝたはむれも悪うはあかぬ移り香に(下略)逢ば一時に明るのか(廿七才)

思案なかばへ鳥かげさして(トキハツ俄七福)珍らしうかはいとないた初鳥常聞くとりも憎うなう主の便りか春風が(廿七才)そよとれんじへ音信は糸の柳の洗ひ髪夫でもようにた移り香のこちら振向きや床の梅あれ笑ふてゐるはいな人ぢらしではないかいな(鼠泣すりやぬしの声)(廿八才)

忍びあひしは昔しの事よ(長唄道成寺)鐘に恨みは数々ござる初夜の鐘をつく時は初行無常と響くなり五夜の鐘をつく時は是生滅法と響く也(廿八才)こんぜづの響きは生滅滅已入相は寂滅為楽と響く也聞て驚く人もなし我も後生の雲晴て真如の月を詠め明さん云ず語らぬ我心(今ははれての女夫な)(廿九才)

瓦斯(がらす)障子と人目の関は(長うた勸進帳)これや此行も帰るも分れては知るもしらぬも逢坂の山(廿九才)隠す霞ぞ春は床しける波路遥に行船の海津の浦に着にけるいぎ通らんと旅衣関のこなたに立かゝる(下略)通じかねたる胸のうち(三十才)

故郷はなれて山里すまゐ(長安宅松)旅の衣はすゞかけのすゞかけの露けき袖や絞るらん都の外の旅の空日もはるばると越路の末思

ひやるこそ遥なれ(下略)すめば都とはよふいふた

〔浄瑠璃文句入〕撰どゝ初編終(三十才)

(広告)

明治十五年五月廿九日御届

編輯兼出版人

東京日本橋区馬喰町二丁目一番地

木村文三郎(奥付)

初編廿七ウから奥付までは、菊池蔵本により補つ。

〔浄瑠璃文句入〕撰どゝ逸二編

編輯 木村文三郎

つもる恋路にやもひを重ね(義太夫足立雪ふり)折らか頻に降雪に身は濡鷺の芦垣や中を隔る白妙も天道様のお悪しみ受し此身は厭ねどやうす聞ねば何ほでも(下略)ふさぐは胸と雪の道(一一才)ちよつと一声アノ時鳥(義太夫廿四孝回向は)こんな殿御と添伏の身は姫御ぜの果報ぞと月にも花にも楽みは(一二才)絵像の側で十種香の煙りも香華となつたるかや回向せふとてお姿を絵にはかゝせぬものを魂返す返魂香名画の力も有ならば可愛とたつた一言のお声が聞たい聞たいと絵像の側へ身を打ふし(下略)まどを覗けば月ばかり(三才)

なみだ隠して人目をしのび(義太夫先代はぎ御てん)跡には一人政岡が奥口伺ひ伺ひて。我子の死がいいだき上こたへこたへし悲しさを一度にわつと溜涕せき入せき上歎きしが。コレ千松よふ死でくれた出かしたな出かしたなそなたが命(三ウ)捨てた故邪智深い栄御前取かへ子と思ひちがへ儂が工を打明しは親子の者が忠臣を神や仏も哀みて(下略)あへば一度にこの涙(四才)

月はさへても逢ないうちは(義太夫尼ヶ崎十だん目)爰に苅取真柴垣夕顔柵のこなたより頭はれ出たる武智光秀必定久吉(四ウ)此内に忍びあるこそ究竟一只一討と気は張弓心はやたけ藪垣の見越の竹をひつそぎ鐘小田の蛙の啼音をばとめて敵に悟られじと差足ぬき足うかゞひ寄(下略)くもりがちなるわが心(五才)かたい約束なしたるからは(義太夫朝顔)こがれこがれた其人に

逢てもしらぬ盲目の此目はいか成悪業ぞや夫の跡を恋したひ石になつたる松浦がたひれふる山の悲しみも身にくらべ」(五ウ)ては数ならず三千世界を尋ねてもこんな因果が又と世に有べきかはとどき立拳をにぎり身をふるはし泣涕こがれ歎しは余所の見る目も哀也」石に成ても添とげる」(六オ)

むりな事とは知りつゝ若と」(義太夫曰吉丸三の切) 過しあふ夜のむつごとを身にしみみと片時も思ひ忘るゝひまもなふ」(六ウ)年月へだつ其内につつり安きはとのこの心もしや見捨はなされぬかとほんにあらゆる神さんや仏様までむりいふて」(下略) 自分勝手の神だのみ」(七オ)

仇なあらしや夜風の為に」(義太夫おはん桂川) ちいさい時からお前をまわし祇園参りや北の山物見けんぶつ」(七ウ) 跡おふて手を引かれたりおはれたりはだか人形むり云て買ふてもらふた簪のすかしたらしてあまやかしかはいがられた親たちより」(下略) 咲たばかりでちらす花」(八オ)

西もひがしも知らない私に」(義太夫お染野ざき) 余り逢たさなつかしさ勿体ないことながら観音様をかこ」(八ウ) つけて逢に北やら南やらしらぬ在所もいとひはせぬ一人一所に添ふならまゝもたこふし織つむぎ」(下略) 教へられたる恋の道」(九オ)

(絵) (九ウ) (十オ)
骨身にこたへる御異見なれど」(義太夫あこや琴せめ) 重忠様の計ひとて榛沢様の今日の詮議縄も懸ず責もなく六波羅の松陰にて物ひそやかに義理づくめ様々と」(十ウ) いたはりてサア景清が約束はと問はれし時の其苦しき水責火責は答ふが情と義理とにひしがれて此骨々も砕くる思ひ」(下略) あかし兼たる胸のうち」(十一オ)

室でぞだちし桜でさへも」(義太夫一の谷ぢん屋) あいとばかり女房はあへなき首を手に取上見るも涙にふさがりて」(十一ウ) かはる我子の死顔にむねはせきあげ身もふるはれもつたる首のゆるくのをつなづくやうに思はれて」一時の雨にかはる色」(十二オ)

仏念じて逢ふその時は」(義太夫盛衰記さかろ) ア、有がたい忝じけないと悦ぶ私が心が何所へいかふつち松」(十二ウ) 様の未来の為には仏千体寺千軒千部万部のきやうだうに千僧万僧の供養なされ

たより」万部にましたるけふの首尾」(十三オ)

すねて見せるかアノ磯の松」(義太夫忠臣かう釈内すみか) 様子しら髪のをくんで涙かた手に夫の傍」(十三ウ) 水の出端へ茶のはなこそつとさし出すついでしやうも身をねぢ向てじう面顔」(下略) ねぢけた枝が憎らしい」(十四オ)

川といふ字で寝るのがねがひ」(義太夫さくら宗吾) いかにお国の為じやとて我身を捨て殿様へ恐しい直訴訟名主と云るゝ身の因果思へば思へば我々は宿世いか成たねを」(十四ウ) まき夫婦親子と生れ来てかゝるうき目を見ることがやと狂気のごとく取付けば子供も共にすがり付一度にわつと声立て」(下略) 今じや州の字くにの為」(十五オ)

愷気するのじやわしやなければども」(義太夫関取二代かゞみ) 何もかも表から立聞して居たはいのふよふもよふもこちの男を」(十五ウ) 此様な性悪にして下さつた秋津嶋殿又、こなさんはこなさんはのふ四百両と云金の行はふしぎなことじやと思ふたが今と云今合点がいた傾城を」隠しだてすりやはらが立」(十六オ)

浮気ものだとおもつてゐたら」(義太夫大内かゞみ子わかれ) 妻は衣服を改めてしほしほと奥より出ふしたる童子をいだき上乳ぶさを含め抱めて」(十六ウ) 云どすれどせぐりくる涙は声に先立て暫くむせび入けるが恥しや浅間しや年月つゝみしかひもなくおのれと本性を顕はして」(下略) ぢがねの出たるぬしの口」(十七オ)

雁がね便りとむかしは云へど」(義太夫姫小松) このごろ三人一所に有つるに何連一人この嶋にあるべき身とは思は」(十七ウ) ねど道が命の悲しさにともづなに取付すがりせめて向ふの嶋迄乗てたべと引とゞむれどやせからだ船に引かれて磯ばたを」(下略) 今のはりがね便りする」(十八オ)

誰に見しよとてべにかね付ぞ」(義太夫伊賀こへ八ツ目) けふ一日に気がかわり染ちがふたるかね付を元の」(十八ウ) 白歯とすみ染に染直してもはがしても思ひ初たるほんのふの心がはげぬほたけ様」(下略) ぬしに見せたいこの白歯」(十九オ)

(絵) (十九ウ) (二十オ)
負はしないと意気地を立て」(常磐津いの歳) ほんに思へばうたか

たのあはざけすじやないけれどかあいがかあいが身の詰り今じや」(二十ウ) 浮世をみづ浅黄向ふ鉢巻向ふ見ず流れ渡りの気も軽くすみな水どの勇みはだ(下略) 引にや引かれぬ勤工場」(廿一才)

朝なゆふなに口説し写真」(常はづ将門) さがやお室の花盛り浮気な蝶も色かせく廓の者に連られて外珍らしき嵐山ツレ覚てか君様の袴も春の」(廿一ウ) 臙染おぼるげならぬ殿ぶりを見初てそめて恥しの森の下露思ひは胸に光国様といふ事はその折しつて明くれに(下略) 念が通じてこのおほせ」(廿二才)

蝶よはなよで育ちし身でも」(常八ツ関の戸) かゝる山路の関の戸にさしもたへなる爪音を聞くに付ても」(廿二ウ) 身の上を思ひ出せば錦の戸ばり玉のうてなになりひすめるのかんざしたをやかに(下略) 手鍋さげるもおまへゆへ」(廿三才)

やぶうぐひすの私じやとても」(常八ツおこま才三) そりや聞へませぬ才三さんお前と私が其中は昨日やけふの」(廿三ウ) 事かいな屋敷に勤た其内にふつと見初て恥しい恋のいろはを袂からそつと私がか心では天神様へ願懸て梅を一生たつたぞイ」なく音に替りはありやせまい」(廿四才)

ぬしに鸚鵡と気を百千どり」(清元よし原雀) 其手で深みへ浜千鳥通ひ馴たる土手八丁口八丁に乗られて沖の鷗の」(廿四ウ) 二丁立三丁立すけんぞめきはむく鳥のむれつゝ木つゝき格子さきたゝく水鶏の口豆鳥に孔雀ぞめきで目白おし」(下略) 鷺じやさほどにおもやせぬ」(廿五才)

待ば海路でおまへの名前」(清元山うば) 桃は気候に山吹も見染ぬ内に春過て早卯の花と花がつみそして」(廿五ウ) あやめせうぶや杜若ほつそりと時鳥アレタ立にぬれ忍ぶ涼風かへ雁が届けし玉づさは(下略) 返事とる手もこゝろせき」(廿六才)

草の葉の露に影置アノ月さへも」(清元夕だち) 夕立の雨も一ふり馬の背を分て涼しき川岸に柳の枝の寄そひていつしか」(廿六ウ) 色に鳴神の音さへ遠き筑波東風残る暑を川水へ流す上手の返り船草の葉に宿りし月も小夜風に悪やこぼれてはらはら露か雫か露か濡て色増す野べの色(下略) かぶりふられりや地に落る」(廿七才) 比翼れんりのこのぬり枕」(清元こん八) それもなく音の鷺も梅に

三浦の小紫すみなゆかり」(廿七ウ) と我ながらわがつま琴とかきならす思ひの竹の尺八も恋慕ながしはこん八が一夜ぎりとは気にかゝる(下略) 苦勞重なる床のうち」(廿八才)

二世も三世もかはした中を」(清元おさん茂兵へ) 罫を出てしよんぼりと世を秋雨の傘も人目忍てあゆぶ道夫も」(廿八ウ) 何ゆへのきさりを不義じやの何のかのへさる今日をあしたのきのへ子と知らでかはせし事はじめその姫はじめ引きかへて今は命も亡ぶ(下略) 反古にする気かこの誓紙」(廿九才)

ぬしは牡丹よわたしは蝶で」(長唄相生しゝ乱曲) 花に戯れ枝に伏しお獅子女獅子のあなたへひらりひらり」(廿九ウ) と舞遊ぶ八ひき九ひき奮迅の拍子夕暮に山々を見渡せば折しも松風に跡は涼しく吹き誘ふ(下略) 花にうかうか日をくらす」(三十才)

ふかくなる筈首だけはまり」(長唄浅妻) このねぬる浅妻船の浅からぬ契りの昔りさんきうそも鞆鼓の始りは先かく国より伝へ来て唐の明皇愛給ひ(下略) 舟じや越されぬ恋の淵」(三十ウ) (広告)

明治十五年五月廿九日御届
編輯兼出版人 東京日本橋区馬喰町二丁目一番地
木村文三郎」(裏見返し)

「浄瑠璃文句入」選どゝ逸 三編
芳春筆

東京日本橋区馬喰町二丁目 木村文三郎版」(表紙)

ところ定めぬ浮草なれど」(義太夫堀川) 恋といふ字に身を捨小船どこへ取付嶋連もなし。鳥辺の山はそなたぞと死に行身の後髪(下略) 翌口さく岸はぬし次第」(一・二才)

ちよつと時雨が取もつ恋も」(義太夫琴せめ) あつと答へてしらすの内なをす梯子を見るにさへ心はのぼる枕の横槌」(一・二ウ) 庭のかたへの井戸やかたふかくもきしる絞車の胸にひゞきて気をひやすあこやが心のにごり水今しも呑やとかくこの体(下略) いまは時雨にぬらす袖」(三才)

便りしないと恨んで居たが」(義太夫安達原三の切) あいとはいへ

ど袖萩が久しぶりの母のまへ琴の組(三ウ)とは引かへて露命を繋ぐ古糸に皮もやぶれし三味線の罰も慮外も願はずお願ひ申奉る(下略)逢ば恨みも口もる(四オ)

床のうちにて聞ほとぎす(義太夫朝がほ)是はマア御深切なお詞有がたふ存じますと杖探り取立ながら(四ウ)虫がしらすか何とやら耳に残りし情のことば名残り惜さになくなくも心は跡に探りゆく(下略)どこやら声が懐かしい(五オ)

おまへは罪だよ笑顔を見せて(義太夫廿四孝)ヤア我夫か勝頼様と飛立心をおし沈め正しうお果なされしもの(五ウ)似たと思ふは心のまよひ絵像の手前も恥かしと立戻つて手をあはせ御経誦読のりんの音(下略)ひるは幻し夜はうつゝ(六オ)

竹に情たて夜な夜な来ては(義太夫千代はぎ)モウ親鳥が来る時分そこへ直してお慰みアイアイと千松が返事は(六ウ)すれど立悩み歩む姿もたよたと置直したる小鳥籠忠と教る親鳥の軒端の竹に飛かはす子は孝行に面やせて(下略)ねぐら定めるアノ雀(十八オ)

つゆをほし気に咲たる桔梗(義太夫おはん)案じ過して何にもいはず六角堂へお百度もどふぞ夫にあかれぬ(十八ウ)様お半女郎と二人の名さか立ぬ様にと願立もはかない女の心根を不便と思ふていつ迄も見捨ず添て下さんせと夫の膝に打伏てくどき立るぞいぢらしき(下略)ぬれりやうつむきしほしほと(十九廿オ)

神を詣て御げんはすれど(常八ツつづば)時も一陽来復の当りを願ふ弓始め弓矢八幡大名のたのふた(十九廿ウ)人の代参にむかひ町から又ことしかへりまつしの願事の恋と云字が花朝背中にしよつた太郎冠者(下略)猿といふ字が気にかゝる(廿一オ)

せかい一めんこのしら雪を(常八ツ宗清)やがて小幡の山こへて馬はあれどもかちはだし君を思へば行そとよ(廿一ウ)あるくものには花紅葉花の手車手を引て歩みかゝれば雪風に笠を取れしつく杖の雪に涙も玉鏝の其道のせて行きなやむ(下略)なぜに私はこの苦勞(廿二オ)

雁やつばめも故郷をはなれ(常磐津角べゑ)えつちう越後の山坂こへて来てみりやほんに江戸の花いつも(廿二ウ)黄金のまつさ

かり花にうかれりやのどさへかか酒がなほしやさりとてはまだまだよいとなよいと獅子のほら入りほらがへり(下略)女夫連にて暮すぞへ(廿三オ)

ぬしを待乳の山ほどこがれ(常八ツおかめ)うはきやはでやありふれた世間並木をはなれ来てともに行(廿三ウ)身とつきつめし鐘は上野かあさはかな娘心の一すじも男ゆへならまがり角人に大河はしこさぬ仇なちぎりの花川戸(下略)はやくみめぐり枕ばし(廿四オ)

かむる菊でもませたる証拠(清元おそめ)わがたまくらに梅が香のまだとこなれぬうぐひすもこがひ(廿四ウ)のうちからごおんをうけだいたい事のおしやつさまもつたないがけらいの身おそめはじつと顔を見てあれ又あんなむりいふて(下略)情の露に色をます(廿五オ)

はつ音を待しアノほとぎす(清元とばゑ)かわいおかたのおこへはせいであがるおきやくのつらにくやわるじや(廿五ウ)れかねびらいきすぎたそばやあんまのこゑばかりその外おでんに正月やわか竹かなほつ火の用心(清元北州)あはせかゞみのすがた見につ開業したる写真を当に(廿六ウ)ませたるかむるぎくい

ゆうちかけのきくがさねきくの(廿六ウ)ませたるかむるぎくいつかひきこみつき出しのやくそくかたきかな月たがまことよりほんりうの山鳥のをのとり市(下略)栄耀せうとておすがたを(廿七オ)

むり酒吞で転寝すれば(長つたとも奴)見そめて見そめてめがさめたさめたゆふべのけんぎけについついつい(廿七ウ)さゝれたさかづきはりうちゑひはまでんすくはいと云てはらつたけんひきちりちりけはのめやいとつくつきりと(下略)胸に当りしぬしの夢(廿八オ)

小ごめざくらは愛らしけれど(長つた手習子)まだむすめぎのあとやさきあづまへもなきあど(廿八ウ)なさはすいなとりなりに立むすめむすめとたくさんそふに云ておくれな手習覚へこと

やさみせんおどりの稽古(下略)やがて茂りて葉を染る(廿九オ)いまの時計は寝よとのなぞか(タぐれかへ唄)宵の間に名のみ見

られしすぢな家更て巫山の夢の「(廿九ウ)うち寝ぼけた客にこまるぞへソレ戸をたゞ靴の音手ばやく忍ぶがよいわいな」一時になつても寝はしない「(三十才)

おもひかさねし心のたけを「(同)オ、それとかくし認む文だより尽ぬ思ひを巻こむる離れしのも気にかゝりアレ人が来る足の音気がねと苦勞をするはいな」筆にまかせて封じこみ

明治十五年五月廿五日出版御届

日本橋区馬喰町二丁目一番地

編輯兼出版人 木村文三郎「(三十ウ)

(広告)

明治十五年五月廿九日御届

編集兼出版人 東京日本橋区馬喰町二丁目一番地

木村文三郎「(裏見返し)

「浄瑠璃文句入」撰都々逸四編
文江堂古文編「(表紙)

「浄瑠璃文句入」撰ど々逸四編

編輯木村文三郎

こがれこがれて逢ふたるものを「(朝がほ)語らふ間さへ夏の夜の短い契りのほい別れ所尋る便りさへ思ふに任せぬ国の迎ひ「(下略)こがれずめたい舟とふね」(一才)

妻や夫といはるゝ中で「(廿四孝)恋しと思ふ勝頼様そも見紛ふてあられふか世にも人にも「(一ウ)忍ぶ成御身の上と云ながら連添わたしに何遠慮つかうかうとお身のうへ明して得心さしてたへ「(下略)隠すおまへの気が知れぬ」(二才)

一生便りにして居るおまへ「(尼ヶ崎十段目)いとしい夫が討死の首出の物の具付るのがどふ急がるゝ物」(二ウ)ぞいのと泣々取出す緋おどしの鎧の袖にふりかゝる雨か涙の母親は白木にかはらけ白髪のはゝ「(下略)一世まで添てくださんせ」(三才)

胸はむら雲こゝろはさへぬ「(城木屋)聞へませぬはとゞ様かゝ様わしが心にどの様な義理やくそくが」(三ウ)有ふやら問談合も有事が事を好みしなされかた斯云ことを露程もしらせたい聞かせたいど

ふせうぞいのどふせふと「(下略)目には涙の玉あられ」(四才)

吹や川風ア、涼しいと「(琴せめ)簾を上て引出す姿はだてのうちかけやいましめる縄引かへて縫の」(四ウ)もやうのいと結び小づま取手も俣なれど胸はほどけぬ思ひのいる形ははでに気はしほれ「(下略)見上りや月のかげ清し」(五才)

ぬしを案じりや察して雲が「(千両幟)角力取を男に持江戸長崎国々へ行しやんすりや其」(五ウ)跡の留主は猶さら女気のひとりくよくよもの案じ夫に怪我のないやうに祈る神様仏様「(下略)明るい月までくらうする」(十六才)

一心とゞいて首尾したけれど「(いがへ六ツ目の切)問れておふねは顔を上げながら聞て下さりませ様子有て云」(十六ウ)かはせし夫の名は申されぬがわたし故に騒動起り其場へへ立合手疵を負一ツ旦本復あつたれど「(下略)すゑの苦勞はわしが科」(十七才)

夫婦やく束とをにもしたい「(古手や八郎兵へ恨のさめざや)いたづら髪に留伽羅の浅き薫りや香具やの花となりしと聞よりも」(十七ウ)又、時も時とアノ哥わいのてうど我身に引当て世に謡はるゝもアノ通り「(下略)しちばち置ても苦にならぬ」(十八才)

苦界へ沈んでおまへを浮め「(忠臣蔵七段目)おかるは始終せき上せき上便りのないは身の代を役に立てのたび立か」(十八ウ)いとま乞にも見へそなものと恨んで計りました勿体ないがとゞ様は非業な死でもお年のうへ「(下略)末待甲斐もなくばかり」(十九才)鐘は廃せど別れの邪魔は「(大内かゞみ狐別れ)恥しやあさましや年月つゝみし甲斐もなくおのれと本性をあらはし」(十九ウ)て妻子の縁を是切に別れねばならぬ品になる父御にかくと云たいが互に顔を合せては身のうへかたるおもてぶせ「(下略)明の鳥と鶏の声」(二十才)

いとめをつけてのぼつた紙鳶が「(千本桜すしや)父も聞へず母様も夢にもしらして下さつたらたとへこがれて死ければ」(二十ウ)とて雲井にちかき御方へ鮎やの娘が惚られうか一生連そふ殿御じやとおもひひで居るものを「(下略)今更どふして切られふ」(廿一才)西洋手品じや私やなけれども「(寺子屋)かゝる所へ春藤玄蕃首見

る役は松王丸病苦を助る駕乗「(廿一ウ)物門口へかき居れば跡には大勢村の者付随ふて申上ます皆是におる者の子供が手習ひに参つてをります(下略)」首のすげかへしてほしい「(廿二オ)

大陽大陰地球をめぐる「(彦山毛谷村)サア女房じや女房じやとかきたくる程今迄も逢たふ思ふた重荷があり「(廿二ウ)三衣袋も茶袋に見たがりの水仕わざけさもたすけとかけ徳利酒も上ふし夕飯のこしらへせふと釜の下(下略)ぬしとわたしはとも稼ぎ「(廿三オ)ゆかしいお方に突然であひ「(いもせ山御殿)とはいふものゝ今一度どふぞおかほが拝たいたとへ此世はゑん「(廿三ウ)薄くと未来は添て給はれとはひ廻る手におだ巻の此主様にはあはれぬかどふぞたづねて求馬様(下略)吐息つくづく見るお顔「(廿四オ)

空に風船海には汽船「(こもち山姥)さらばお咄し申ませふ恥しながらわたしが昔はうき川竹の傾城萩「(廿四ウ)野屋の八重桐とて太夫仲間の立者と云れし程の全盛の末も遂ぬ仇恋に上り詰て此通り(下略)丘にや鉄道馬車人車「(廿五オ)

谷の鶯春気になれど「(廿四孝十種香)問れて猶もあからむ顔勤めする身はいざしらず姫ごぜのあられもない殿御にほれたと云ことが嘘偽りにいはれふか「ほの字のあととは口こもる

「浄瑠璃文句入」撰ど、逸四編終

明治十五年五月廿九日御届

日本橋区馬喰町二丁目一番地

編輯兼出版人 木村文三郎「(廿五ウ)

(広告)

大坂五行板元 編集兼出版人 東京馬喰町二丁目吉番地

木村文三郎「裏見返し」

「浄る璃文句入」撰ど、逸五編

木村房古?編

文江堂はん「(表紙)

「浄瑠璃文句入」撰ど、逸五編

編輯人 木村文三郎

泪かくしておくつて出れば「(太功記十段目)悦ぶほど猶弥増名残

こんな殿御をもちながらこれが別れのさかづきかと悲しさ隠すわらひ顔(下略)かわいかわいと明からず「(一オ)

うしろすがたで判然せねど「(阿波の鳴門しゅんれい)見れば見るほど稚顔見覚への有額麩ヤレ我子かなつかしやと「(一ウ)いはんとせしがイヤ待暫し夫婦は今もとらるゝ命元より覚悟の身なれども「たしかにお前の紋どころ「(二オ)

替るまいぞと心で起請「(廿四孝十種香)はつと計にどふと伏けふはいかなること過去給ひし我夫に「(二ウ)再び逢は優曇花と悦んで居たものをまたも別れになる事は何の因果ぞ情なや「誓紙かくのは二心「(三オ)

色よく咲たる朝がほさへも「(朝がほ)又も都を迷ひ出いつかは廻り逢坂の関路を跡に近江路や「(三ウ)美濃尾張さへ定めなく恋し恋しに目を泣潰しものゝあいるも水とりの陸にさまよふ悲しさは「(下略)「しほるゝ姿のいぢらしさ「(四オ)

花のかほりが心に留り「(おこま才三白木や)おまへと私が其中はきのふやけふのことかいな屋敷に勤た其内に「(四ウ)ふつと見初めて恥しい恋のいろはをたもたらそつとわたしは心では天神様へ願かけて梅を一生たつたぞへ「(下略)「粹なお方と見初たわたし「(五オ)

晴ぬ雲さへ折々退いて「(安達原)泣声も嵐と雪に埋れて聞へぬ父と恨み次第次第に降つもる寒「(五ウ)氣に肌も冷切は持病の積の差こんでかつぱと転べばお君はうるうるとささる背中も釘氷「(下略)「またもさし込む窓の月「(六オ)

捨る命もなに惜しからふ「(箱根いざり滝)ほんに武士ほど世の中にはかない者が有かいのふ蝶よ花「(六ウ)よとおもひ子の恋に病目がいぢらしさ添してやりたい計りにてゝ御は刃に身を捨て「(下略)「おまへ故なら情立る「(七オ)

ぬしはランブでわたしはホヤよ「(矢口渡四段目)ム、それ程迄に思ふて下さるお志しさらさら仇には思ひませぬと「(七ウ)じつとしめたる手の内は恋の錠まへなさけの要めたがひにいだき月草の「(下略)「とぼす夜毎にあつくなる「(八オ)

ぬしの顔見て嬉しいまぎれ「(千両のぼり相撲場)元より覚悟の猪

名川が既に危ふく見へたる所へしん上」(八ウ)金子貳百兩猪名川へひいきよりと聞よりぐつと猪名川がはじめの気色どこへやら(下略)「持た鉄瓶ほふり出す」(九オ)

建る屏風は牝馬に牡馬」(忠臣蔵九段目山しな)谷の戸明て鷲の梅見付たるほゝ笑顔まぶかに着たる帽子の内」(九ウ)アノ力弥様のおやしきはもふ愛かへ私や恥しいと取散す物片付て先お通りなされませと下女が伝へる口上に(下略)「ねがひは屹度かなふの画」(十オ)

聞かぬ昔しとあきらめ見ても」(白石ばなし吉原の段)問れてわつと声を上ア、コレコレコレ斯めぐり逢ふからは悲しい事を何にも」(十ウ)ない泣ては濟ぬサアどふぞと尋る姉の心もそゞろエ、遠国隔つた姉さアそれで何にも聞かないだゝアは五月田植の時分(下略)「はかない事だと身をかこつ」(十一オ)

口で言はれぬ心のたけを」(妹背山三段目)兼て認め奥山の鹿の巻筆封じ文恋し小石にくゝり」(十一ウ)添へ女の念の通ぜよと祈願を込めて打礫かゝりと川に落滝津浪にせかれてながれ行(下略)「つま乞ふ鹿の毛に云はせ」(十二オ)

寒い夜空を行かふ雁も」(いざりの饑別)付添ふ私しは女の身力に思ふ主の身は腰ひざ抜て足なへと」(十二ウ)なりやつれたる夫婦が流浪たくはへにまでつき果て舍り定めぬ旅の空はて白川の陸奥にさまよふ二人が身に余る(下略)「夫婦連なら厭やせぬ」(十三オ)

おや御の不首尾も厭はぬおまへ」(梅川忠兵衛新口村)それは嬉しうござんせふ去ながら私がとゝ様かゝ様は京の六条数珠」(十三ウ)屋町定めてこの問詮義にあふて居さんせふかゝ様は眩暈もちもしもの事は有まいかと(下略)「わが身の上より案じられ」(十四オ)

木地の俣なるわたしの心」(お染久松野崎村)切ても切ぬ恋衣や本の白地をなま中にお染はおもひ久松が」(十四ウ)跡をしたふて野崎村つゝみ伝ひにやうやうと梅を目あてに軒のつま(下略)「世辞や浮氣にや染りやせぬ」(十五オ)

氣随(まま)にならぬは浮世のならひ」(千代はぎ御殿)乳母まだ飯は出来ぬかやヲ、もふ出来ますよ二年までもまだ見へ」(十五ウ)ぬ見へぬかゝ様はまだかいのエ、せわしないそなた迄が同じ様

に行義のわるいエイエ私はたべたいことはなけれど御前様がおひもじからふと思ふて(下略)「飯にしたいとドンを待」(十六オ)

はれた女房と云はれてそして」(比翼塚長兵衛の段)ア、器量と云ひ心立アノやうな美しい優しいお人がある」(十六ウ)ものかと思ひ込だが此身の因果どふぞ問がな折がな云でさふと思ふたは日に幾度(下略)「どぞくもなくくらしたい」(十七オ)

四角ばつても愛敬ものよ」(梅の由兵衛聚楽町の段)としはいくつと指を折かぞへて待た此姉が連添ふ夫が殺すとは」(十七ウ)世界の因果がかたまつて夫婦と成兄弟ども生れて来たのかと身をもたへ泣くどくこそ道理なる(下略)「見れば莞爾紙幣の顔」(十八オ)

天造物じやと言はんすけれど」(おはん長右衛門帯やの段)信濃屋のお半はむねのうさつらさ余所目を包むふり袖の内を覗」(十八ウ)いてよい首尾とそつと這入て枕もと長右衛門様長右衛門様今朝下さんした文の返事ちよつと逢にさんじたとゆり起し(下略)「ぬしの細工で出来た子だ」(十九オ)

ぬしの顔見りやあまへてすねて」(夕ぎり伊左衛門あげ屋の段)太夫とおれが連弾で弾た時の面白さ弾其主はかはらねど替つたは」(十九ウ)おれが身の上あいつが心底あの様に有ふとは思はぬ人にせき留られて今は野沢の一ツ水(下略)「歸したあとで又ふさぐ」(二十オ)

おまへの情を秤にかけりや」(三かつ半七酒屋の段)お氣に入ぬとしりながら未練なわたしが輪廻故添臥はかなはず」(二十ウ)共おそばに居たいと辛抱して是まで居たいのがお身の仇今の思ひにくらぶれば(下略)「義理といふ字が重荷づる」(廿一オ)

嘘か実かうはべじや知れぬ」(廿四孝勤輔すみか)ア、子を捨る數は有ど親の詞はすてがたき裏の藪へと踏わける雪より」(廿一ウ)先へいとし子のうづもれ死なん不便やと見合す顔に降涙みぞれ争ふぬれ廻しほるゝ夫のつしる影(下略)「地金見せたいわがこゝろ」(廿二オ)

笑顔見せてと涙を隠し」(おつま八郎兵衛)年比日こゝろ信心する天神さまの御利生にも叶はぬことか情なや」(廿二ウ)ゆるして下され八郎兵へ殿堪忍してくれ我子と抱しめ抱しめ背なでさすり親と子

が涙のかぎり泣尽す(下略)「愚痴にしたのもわしが料」(廿三才) 去るものは日々に疎してお前は忘れ(御所ざくら)国を国を出て十七年水子をかゝへさまざまとさまよひ(廿三才)廻りしうきかんなん今に尋ねあはぬとも女の念力これこそは娘よ父よと名乗合するまでは(下略)「わたしや日にましわすられぬ」(廿四才)

宵の苦情にツイ夜を更し(太功記尼崎の段)ほんにおもへば此身ほどはかない者が世に有ふかとけて逢(廿四才)夜のきぬぎぬも永き名残の云号二世を結ぶの枕さへかはす間もなふ此様な悲しい別れをすることは(下略)「中直りすりや明がらす」(廿五才)

真実あかして逢ふのはよいが(かるかや山の段)さればとよ尋ねるは自が父上二ツのとし別れしゆへお顔もしらず元へつくし松浦党加藤左衛門繁氏といふ)末を案じる胸のうち

「浄瑠璃文句入」撰どゝ逸五編終

明治十五年五月二十九日御届

編輯兼出版人 日本橋馬喰町二丁目一番地

木村文三郎(廿五才)

(広告)

大坂五行板元 編集兼出版人 東京馬喰町二丁目番地

木村文三郎(裏見返し)

本書は、国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官裁定のもと、公開されている。

三十三 『四季の花園 第三』

明治十五年六月二日御届。 華本安次郎編。 活版本。 請求番号：特59-64。

小唄寄本四季の花園

はな本(扉)

「諸芸よせ本」四季の花園 第三(目録一才)

(七十八より)浄瑠璃さわり都々逸

知らぬ事とは。いひながらにも(菅原伝授手習鑑 たらこやの段)いろは書子をあへなくも。ちりぬる命せひもなや。あすの夜たれか添乳せん。らむ憂めみる親こゝろ。剣と死出の山けこえ。あさき夢見し心地して。跡は門火にゑひもせず。京は故郷と立別れ(下略)「真にせつ無。此仕だら

神や仏に。まで無理いはせ(新版歌祭文 野崎村の段)勿体ない事ながら。観音様をかこつけて。逢に來たやら南やら。知らぬ在所も厭はせぬ。二人一所に添をなら。(十八才)飯も焚うし織つむぎ。どんな貧しい世帯でも。私や嬉ひと思ふ者」今さら浮気なことばかり

それと知らずに逢嬉しさは(八陣守護城 本城の段)神の結ぶの縁ぞとは。思がけなき主計の助。のふなつかしやト舞衣が切戸おし明はしり寄。夢ではないかと嬉しさの「心一つにとつおめつ」

仕やふも。あろうにアレ憎らしい(一の谷嫩軍記 三段目)ア、おろかおろか此度の戦ひ。敵と目ざすは。安徳天皇。それにしたがふ平家の一門。敦盛は切置。誰彼としのぎ(十九才)をけづるに。用捨がなるふかイヤ藤の御局。戦場の義は是非なしと御諦め下さるべし)トこんな気やすめ聞つらな

見れば見る程。可愛やにくや(恋飛脚 二の口の段)そんなら顔を見ぬやふにと。傍に有合ふ手拭とり。泣なく後背に立廻り慮外ながらと面ない千鳥。よしやどんなにしられても

いひ出すからには何処迄なりと(鎌倉三代記 三浦別れ)何程おきらひなされても。わたしはお前の女房じや。所夫に代り母様の介抱に來たがなんの不思議(十九才)和主の心に入るやふに

今の心のはちさへすてゝ(安達が原 雪降の段)琴の組とは引かへて露命をつなぐ古糸に皮も破れし三味線の。撥も慮外もかへり見ず。いっそ打あけ此事を

こがれ涙にまたふさぎ出し(平かな盛衰記 三段目)妻こふ鹿のはてならで。難義硯の海山と。苦勞する墨うき事を。数かくお筆が身の行衛)末はどふなる事蛇やら

日頃おもひの恨みも今は(忠臣蔵 九段目)娘こゝへと叫いだ

せば。谷の戸明て「(二十才)鶯の梅見つけたるホ、笑顔」いふも
いはれぬ袖の内「(二十ウ)」

(百〇一)情歌(よしこの)(都々逸)

嬉し泪を悟られまいと人目かざしの袖扇

たむ小袖の。しわ引のばし火のし片手に当こすり

すぎし一言。まだ耳底にあつて夜毎の夢にまで「(二十三ウ)」

水に実直(すなほ)な心を見せて風に浮気な川柳

風を引たといふては居れど胸に覺の声替り

思ふまいぞへモウ思はぬと思へば思はず思ひ出す

言兼さんした心に惚て明くれ。意中(こころ)を砕く胸

追はれ払はれして飛蠅も放れかねたる主の傍

真実(まこと)つくせどまだ疑がひのかゝる此身のやるせなや

ちよいと嬉しく。さゝれた猪口を取れば隣へお取次

思ひすごしの口絶が。つりあとの命の延ちゞみ「(二十四才)」

押て言はれず我胸いたため心で諫める気の苦勞

青簾。掛た小船の中憎らしや仇な根じめの羽織妻

言ふてしまをか言はずに置か思案なかばの洗ひ髪

早う三筋の勤めを止めて思ふ一ト筋遂るやう

否や座敷の勤めが更りやばちであくびの蓋をする

軒に青々釣れて待も和主に逢たさ忍ぶ草

指た手まくら抜きならぬ実と不実の右ひだり

愚痴や恨の文引出してあてる枕の中直り「(二十四ウ)」

明治十五年六月二日出版御届

同 年七月一日再版御届

定価拾五銭

編輯兼出版人

大阪府平民

華本文次郎

東区北久宝寺町三丁目三十四番地

発売本舗

心齋橋通久太郎町 柳原喜兵衛

三休橋通久宝寺町 華本文昌堂

販売元

大坂平野町御霊筋

松本平兵衛

京都宮川町

宮川源水

筑前博多中島町

藤井五楽堂「(ハウ)」

本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
裁定のもと、公開されている。

三十四「さわり文句」浄瑠理どゝ逸

初編

明治十五年六月九日御届。木村文三郎編。請求番号 CEI-1371。

「さわり文句」浄瑠理どゝ逸 初編

芳春画図

東京馬喰町二丁目吉番地木村文三郎版「(表紙)」

(広告)

東京書肆 日本橋区馬喰町式丁目 文江堂敬白「(見返し)」

「さわり文句」浄瑠理どゝ逸

編輯人 木村文三郎

お医者さんより草津の湯より「(義太夫夕霧)夕霧涙諸共に恨みら
れたか詫のは色の習ひと云ながら。夫はうは気な水浅黄はでな浮名
が嬉しうて人の譏も世の義理も(下略)主に逢のが合ぐすり」(吉
二才)

未れんのこしてまよふて居たが「(義太夫三勝半七)今比は半七様
どこにどふしてござらぶぞ今更返らぬことながら。私と云者ないな
らば。半兵衛様もお通にめんじ」(吉二ウ)「子迄なしたる三勝どの
とくに呼入さしやんしたら。半七様の御身持も直り。」死ぬると心
が付なんだ「(三才)」

知らぬ事とて恨みはしたが「(義太夫忠臣蔵七段目)おかるは始終
せき上せき上。便のない身の代を役に立ての旅立が。暇乞にも」(三

ウ) 見へそな物と恨んで計をりました勿体ないがと、様へ非業の死でもお年の上。勘平殿は三十になるやならず死ぬるとは(下略)「きいて苦をます苦のせかい」(四才)

あつくなる筈お前とわたし(義太夫小はる治兵衛) 憎まじやんが嘘かいなおと、しの十月中の亥の子にこたつ明た(四ウ) 祝義とて。コレ爰で枕ならべ。此方は女房のふところには鬼が住か蛇が住か(下略)「もとは巨燧で出来た恋」(五才)

人目は、さかりうれしい中も(義太夫お半長右衛門おび屋) わたしも女のはしじやも、大事の男を人の花(五ウ) 腹も立つしりん気の仕様もまんざら知らぬでなければ、もかわい殿御に氣をままし(下略)「いまは浮名でこの苦勞」(六才)

田舎そだちと笑は、笑へ(義太夫白石ばなし吉原) 斯した事とは露しらず此妹はまめな知らぬと、様か、様おわづらひでも有ふならよもやしらして(六ウ) たもらふ物。便りのないを杖はしら首尾やう年を勤めたる。国へかへつてお二人に樂させましてどふして(下略)「人にすかるゝ彘ぞ錦」(七才)

年月ねがひし思ひも叶ひ(義太夫箱根いざり) ほんに武士ほど世の中にはかない者が有かいのふ蝶よ(七ウ) 花よと思ひ子の恋に病目(やむめ) がいぢらしさ添してやつたはばかりにて、御は刃に身を捨て(下略)「はれて真如の月の影」(九才)

つもる苦勞もいつしか解て(義太夫彦山毛谷村) 女房じや女房じやとうたぐる程今迄も逢たふ思ふた重荷があり三衣袋も茶袋にして見た(九ウ) がりの水仕わざけさもたすきとかけ徳利。酒もあげふし夕飯の拵へせふと釜の下薪のしめりもへ兼る火吹竹とは尺八を(下略)「是から主を力ぐさ」(十一才)

しげしげあへばお宿の首尾(義太夫阿漕平次すみ家) ふしぎの縁でこれまでは夫よ妻よと主従の道を忘れて妹背の(十一ウ) きたらひ。おもへば廬生が夢の楽しみ。覺て悔しき身の上と男泣にぞ泣ぬたる(下略)「云て逢ずにや居られない」(十二才)

子をおもふ親の心は夜の鶴(義太夫五右衛門釜入) 性根みだるゝ五右衛門が子を思ふ氣のやるてなく片手につかんで(十二ウ) 五郎市を自分も高くさし上暫しなり共苦みを。させじとこそは身を毛

がく。油は次第ににへ上り五体もあからむかしやくの責(下略)「わたしやお前と夜の鴛鴦」(十三才)

今宵の苦勞を察しもせず(義太夫妹背山杉さかや) 是迄おまへと私が中。逢ことさへもたまに。千年も万年も。かはらぬちぎりとおつしやつた。其約束はいつはりか(十三ウ) 浮世の訳も弁ぬ。在所そだちの私でも。云かはした事。忘れはせぬ。余りむごいと取つてなみだ先立恨み言(下略)「澄して三十日に丸い月」(十四才)

お前の愉快と仄に聞て(義太夫蝶花形) 聞ていそいそ姉葉末お馬の先の高名にも(十四ウ) まさつた手がらと誉そやす。余所のよるこび子心に。聞も無ねんさ松太郎(下略)「泪の雨にぬかす膝」(十五才)

猫が氣をもみや浮氣な蝶は(義太夫橋弁けい) 若君彼をなぶつて見んと右へよくれば右に立左りに行ば左りに行ちがひさまに長刀の柄をはつしと(十五ウ) 蹴上れば。ス八曲者よ物見せんと長刀柄長く追取のべ切てか、れば若君は薄衣取退うち寄る剣をあざむくからかさは六十間の橋の上。高みで見物するはいな(十六才)

うは氣なお前と田毎の月は(義太夫妹背山山の段) 尊いと卑いも姫ごぜの夫と云はたつた一人穢はしい玉の輿何の母も(十六ウ) 嬉しかる祝言こそせね心計は久我之助が宿の妻と思ふて死にや又、是程思ふ中一日半時添しもせず賣の河原へ遣るかいの(下略)「あまた影置水のうへ」(十七才)

桃とさくらと争ふ色は(義太夫道春館) たとへいづれのたね成ともわらはが為に大事の姉御おまへは殺さぬ自をイヤのふそもじはながらへていや自をイヤわらはと死を争そひし(十七ウ) 姉妹の心根不便と母親はいづれをそれとわけ兼て胸は涙の三つ瀬川身も浮ばかり歎きしが(下略)「どちらが先へ散そむる」(十八才)

絵にも書ない互ひの胸を(義太夫吃又平) いつまで浮世又平でふぢの花かたげたお山(十八ウ) 絵やなまづおさへたひやうたんのぶかぶか生て甲斐なしと身をもんだの無ねんがり。うつつして見たい写真鏡(十九才)

かた時わすれぬおまへの事を(義太夫合邦すみ家) 俊徳様の御事

は寐た間もわすれず恋こがれ。思ひ余つて打付に。云ても親子の道を立。つれ(十九ウ)ない返事かたい程なほいやまざる恋の淵いつそしづまばどこ迄もと跡を慕ふて歩(かち)はだしあのうかうか難波がた身をつくしたる心根を(下略)夜るは寐て又夢に見る(二十廿一才)

穂にあらはるゝ薄じやとても(清元傀儡師)蓬萊の嶋は目出度嶋での黄金升にて米はかる紗の紗の袴紗の袴よの竹田の昔はやしごと唯今しらん傀儡師(二十廿一ウ)阿波の鳴門を小唄とは晋子が吟の風流や古き合点で其俣に小倉の野辺の一本薄きいつか穂に出て尾花とならば露がねたまん恋草や恋ぞつもりて測となる(下略)空吹風にやなびきやせぬ(廿二才)

ぬしに深川首たけはまり(清元喜撰)我庵は芝居の辰巳ときは町。しかも浮世をはなれ里。世事で(廿一ウ)丸めてうは気でこねて小町桜の詠めにあかぬきやつにうつつかり眉毛をふまれ(下略)堅い石場でゐたものを(廿三才)

逢たその夜の口ぜつの跡は(清元神田祭)一年を今日ぞ祭りに当り年。けいごてこまへ花やかに。飾るさじきの毛氈も(廿三ウ)色に出にけり酒きげん神田ばやしもきをいよくきてもみよかし花の江戸祭については模様牡丹寒菊浦菊のゆかりも丁度花尽し(下略)きやりの声やばかばやし(廿四才)

恋しさつもりて姿をやつし(清元安名)姿もいつか乱れ髪誰がとり上げていふ事も菜種の畑に(廿四ウ)狂ふ蝶。翅(つばさ)かはして浦山し野辺の陽炎春草をすほふ袴に踏しだき狂ひ狂ひて来りける(下略)うけた情が仇となる(廿五才)

よろこび烏で気をとる直し(常磐津子宝三番)手に手を取てかさゝぎの逢瀬をわたす天の川笹に一夜の散しがき(廿五ウ)さらさらうつつは太鼓の拍子よくみな撫し子の手を揃へやさしき声のはり強く(した略)明のからずで又ふさぐ(廿六才)

未来は一所とよく云やつよ(常八ツ一の谷)宵のくわげんの笛の時後にとありしお詞が今生後生の筐かや(廿六ウ)此世の縁こそ薄と共来世では未長う添上げてたべ我夫と顔にあて身にそひて思ひの限り声限りなく音は須磨の浦千鳥涙にひたす袖の海引汐時と引息

のちしごと見へて息たへたり(下略)死んで花実がさくものか(廿七才)

主をまつ夜は屏風の絵まで(常八ツ三社祭)軒もる月にお姿をふつと見上げて賤の女は云寄るしほも(廿七ウ)なま中に叶はぬ恋を思ひそめこがれ寄るとも片糸の風の車やわくらばに一夜保たぬ仇枕(下略)すねて見せるか気障な松(廿八才)

うは氣うぐひす氣の多いせつと(五人ばやし)お先そるへて花やかにふつこめふつこむ鳥毛やり奴嶋田に引かへておぼこ娘のふり袖にうかれてあはとのり物をせおふ重荷も恋の道おれこみじや(廿八ウ)合点じや石こき酒の色上戸酔にやなるまい女子の身そゝ茶びんの役とはヲヤばからしいとりあはせ(下略)梅があきたか桃になく(廿九才)

沖の石とて汐干にや乾く(長唄汐くみ)見渡せばおもしるや馴ても須磨の夕まぐれすなだる船(廿九ウ)のやつしつし浪を蹴立て友呼かはすはんま千鳥のちりやちりちりやちりちりぱつと汐屋のけぶりさへ(下略)せめて日曜にや忘れたい(三十才)

操たゞしきみどりの色よ(長つた丹前)高砂や木の下陰の尉と姥松諸共にわれ見ても久しくなりぬ住吉の此浦船に打乗て月諸共に出汐や是は目出度代のためし(松にあやかり友しらが

「さわり文句入」浄瑠璃どと逸終(三十ウ)

明治十五年六月九日御届

編輯兼出版人 東京日本橋区馬喰町二丁目一番地

木村文三郎(裏見返し)

本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官裁定のもと、公開されている。

三十五『撰み文句 端唄どゝ逸』

明治十五年六月三十日御届。木村文三郎編。請求番号 CEI-1272。

端唄どゝ逸

芳春画「(表紙)

(広告)「(見返し)

「撰三文句」端唄どゝ逸

編輯人 木村文三郎

花に宿りて夜すがら濡て「草も若やく春風に梅が香かほる雨の音しつぱりとアレ最合傘ぬれて嬉しき中かいな」ないてわかるゝ朝の鳥「(一才)

これ程尽したわたしの心「うたぐるは恋のならひと云ながらはや明ちかき衣々は「(一ウ) 泪にしめる袖の露うそか誠かてくだか実か割て見せたいこのおもひ勤めする身ははかない物じや」分らないのがじれつたい「(二才)

ないて時を離れたけれど「明ぼのに可愛と泣た初鳥常きく鳥も憎うなふてぬしの便「(二ウ) りを春風かそよとれんじに通ふ神かほりにばつと振むけばエ、憎らしい床の梅笑ふて居るぢやないかいな」かあいと戻る夕鳥「(三才)

土手の雪風身にしみじみと「はや告る浅草寺のきぬぎぬに東雲つゝむほふ「(三ウ) かむりいつ逢りやふか忍ぶ身のモシはなしのこりがあるわいな」意見こたへる朝帰り「(四才)

寝ない証拠に蛩と虫は「月影や草もつゆけき秋の夜にまだ寝もやらで「(四ウ) くよくよと庭の松虫誰を待折戸にそつと音信て最う寝たかとは憎らしいどふ寝らりやうぞあかすとも」夜すがら泣たりこがれたり「(五才)

つまよ夫と添ふししたも「たづね来て見よ和泉なるしのだの森の古郷を「(五ウ) 障子に残せし筆の跡なみだで消る狐火やエ、うらみとは葛の葉よ童子は可愛か無いかいな」聞ばこわかれ狐とは「(六才)

どふだか知れない約束よりも「恋は曲者やるせなや迷ひとやらの心から今日が昨日に増思ひ「(六ウ) かはらぬ誓ひさきの世であふか逢ぬかしら露の蓮のうてなの新世帯ぐちになる程いとしうてエ、結ぶ出雲の人じらし」判然極たい縁むすび「(七才)

はじめなければをばりもないが「こひこひて稀にあふ夜は一人寝て

逢ぬ今宵のふたり寝につい女気の「(七ウ) 跡や先思ひのたけを解わくるうつゝぬかして更ゆくはとりがわらふてあけの鐘」始終かはらず二世までも「(八才)

こがれこがれてたゞよふ舟も「首尾も能く松に繋ぎし恋のつなふねで渡りの歌「(八ウ) ひめや川風さそふ緋縮めんアレ雪の肌ふじびたい乱れてつめたいそゝけ髪」つなぎ留たる縁のはし「(九才)

やつて見やつか吹矢のお菓子「簾おるした船の内顔は見へねど羽織の紋はたしか覚への三つ「(九ウ) 柏ふんで違はゞどふせうと跡と先に心がまよふエ、エ、エ、もじれつたいふねのうち」当り外れは運しだい「(十才)

おまへの心と氷室の雪は「月花の中にたつ名や時鳥ふけよ川風すだれごし「(十ウ) さえた音じめの調子さへあふて嬉しきもやひづな解ぬもゑんのはし問エ」いつか世に出てとけるだろ「(十一才)

おもひ思はれ積りしはては「こゝろで誉て居たならば斯うした苦勞はせぬ「(十一ウ) ものをおもはれ初て忘れねばいとしうてやつるゝすがたいとやせぬ」もとめた苦勞とあきらめる「(十二才)

暗をさいはひ忍んで見れば「月明りあふてしゆびして猶恋しさの届いて「(十二ウ) 嬉しい翌日の夜もはなしともない心の底はいつそ女房になる気になつて今はやるせがないわいな」瓦斯やらんぶで気がもめる「(十三才)

そはつく柳に比べて見れば「飛鳥川かはる淵瀬のなみまくら浮寝の夢は結べ「(十三ウ) ども寄るべ定めぬ水鳥のながれのまゝに任す身は実に苦界じやないかいな」操正しき松の色「(十四才)

筆がとりもつえにし文に「青柳の若むらさきの小夜衣しのぶの乱れ玉章に数々「(十四ウ) するす言の葉もふかき氣にしと業平や小町のむかししらずして恋しゆかしも恥しや」よしておくれよ半きれば「(十五才)

しつぱり濡るゝ嬉しい雨を「待乳しづんで梢に乗込今戸ばし土手の合傘かた身「(十五ウ) がはりの夕時雨君を思へば逢ぬ昔が増ぞかしどふして今日はごきんした左右いふはつ音を聞に來た」ふるといふのは分らない「(十六才)

丸い世界に四角な凧は「梅と松とや若竹の手に手引れて、飴りなら

ば又嘘じやないかや」(十六ウ) ほんだわら海老の腰とや千代迄も
友白髪よふいよふいの世の中よい所へ譲りはのテモマア明ましてお
目出たい春じや王」東風へなびくもかぜしだい」(十七ウ)

ふて、背中をあはして見たが「任したからはどふ成と機嫌直してこ
ちら向て寝やしやんせ」(十七ウ) アレ窓から明てくるわいなじれ
つてい路からからすがないて来る」ぬしにや叶はぬ根くらべ」(十
八ウ)

すんで聞へる待夜の鐘は「春の夜の更てしやうじの朧月かすみこめ
たる」(十八ウ) 遠山の鐘はいづくか明しらむ起て庭はく軒のはに
ふいと目につく蜘蛛の糸晩にくるとのしらせかへ」こんとなるのか憎
らしい」(十九ウ)

秋の七草見惚て月は「はぎ桔梗中に玉づさ忍ばせて月は野ずゑに」
(十九ウ) 草のつゆ君を松むし夜ごとにすだく更ゆく鐘に「のこゑ
恋はかうした物かいな」名残をしまて明のこる」(二十ウ)

つなをはなれてたゞよふ舟も「恋しきに尋ねきしあはれ深雪がなれ
のはて泪にくれる」(二十ウ) 夫しらべ露の乾ぬ間の朝顔に照す日
かげのつれなさに憐れ一トむら雨ぞかしばらばらはつと降ぞかし」
こがれた人に逢はよい」(廿一ウ)

風にはこびし磯辺の千鳥「今日はくるかと柳の糸に風の便りを待わ
びて門を」(廿一ウ) いく度ゆき戻りテモ長き日のつれづれと餌を
やる鳥に能ふ似たるア、まゝならぬ身や」なく音浮たりしづんだり」
(廿二ウ)

なかの愉快をしらずに私しや「梅にも春の色そへて若水くむか車井
のおともせわ」(廿二ウ) しき鳥追やあさ日にしげき人影をもしや
と思ふ恋のよく遠音かぐら数とりのまつ辻占や鼠なきあふて嬉しき
さゝきげん」ねづに待つたが口をしい」(廿三ウ)

忍びがへしを螢はこへて「夕立やさつと吹来るねやの火にピカコピ
カヲ、強かみなり」(廿三ウ) さんは強けれど私の為には出雲より
結んだ縁の蚊帳のうちにくや晴ゆく夏の空」かやの外にて身をこが
す」(廿四ウ)

忍びごまにておまへを呼で「秋の夜はいとゞ物憂き夜すがらやもし
やそれかと庭下」(廿四ウ) 駄の音も忍びて枝折戸をあければ冴る

月かげに又、も憎らしい桐一ト葉」胸は二上り三下り」(廿五ウ)
春の風にはうかれて凧も「雲にかけ橋霞に千鳥およびないとて惚ま
いものよ」(廿五ウ) ほれりや命もないわいないつそとんまになつ
たそふなア、ア、そうじやへ」だまをやかれりや上りつめ」(廿六
ウ)

ふるかふるかと気にした空も「雪をまちあられに凌ぎ逢ふ夜さに帰
さにや」(廿六ウ) ならぬ首尾となりまたひとり寝の閨房の内あた
りにのこる面影はたもと時計の音ばかり」ぬしが来たのはれた胸」
(廿七ウ)

うめに宿りし小鳥も今朝は「夏のゆふぐれ川風に夕立こぼす雨の音
しつぽりとアレ最合船濡てうれしき中かいな」なく音忍て口こもる
「撰み文句」端唄と逸」(廿七ウ)

明治十五年六月三十日御届
編輯兼出版人 東京日本橋区馬喰町二丁目一番地

大売捌人 東京通油町 水野慶次郎
同 横山町 辻岡文助
越後三条 浅間伝財門
同 長岡 松田周平
同 葛塚 弦卷七十郎
甲府三日町 松本米兵衛
箱館地蔵町 木下清次郎
信州松本 高美甚左衛門(裏見返し)

本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
裁定のもと、公開されている。

三十六『唱歌笑芸』粹の大福帳

一一へん

明治十五年十一月十五日出版御届 大森辨吉郎編 大阪・一成舎刊。

豊後

よしこの

同さわり

大津恵ふし

とつちりとん

いよぶし

〔唱歌笑芸〕粹の大福帳

大阪 一成舎（表紙）

よしこの

宵はうれしくきくのかねの音を今はつらさの明のかね

おもひだすほどわするゝひまがなくてしばしも苦がたへぬ

すぎし一トことまだ耳ぞこにあつて（十）夜ごとの夢にまで

おもひ切たといふひとごとにとどふかみれんの残りぐち

哥のもんくがふと気にあたりうたひながらもふさき出す

ゆすりおこされこちらをむけどいやな嵐にすねた萩

おまへのしんちつそりやすそなどゝいふたも心がさぐりたさ

心ならぬよあの家かたぶねぬしに似たふり似たる声

遠ざかるのも浮名をふせぐ一ツは身（十一）のためぬしのため

ひよんな所からくもりがでてぬれにやならぬよ夕だちに

おもひがけなく見あわすかほを烟にしてゆく汽車の窓

猫やきつねがうき世になけりやコンニヤン苦勞はせぬわいな

腹もたてまいたゝせもせまい四海兄弟自由の権

恋の議院を出雲へたてゝ色の会議がしてほしい

松といふ字はすかるゝはずよ公（きみ）と木（ぼく）（十二）と

のさしむかい

金の時計が目あてじやものを衿につくのは知れたこと

印紙はつたるわしがからだ二重抵当にやなりはせぬ

鼠あなより女猫の穴か蔵のたには不用心

ぬしは原告わたしは被告まわす屏風が書記官吏

丸くしたるはわたしのうまみぬけめないぞへ新銅質

もしやそれかと門の戸あけて見れば（十三）にげだす探訪者

猫は魔のおどつて舞ふてすへは高位の二等親

ならば検査のお医者に見せて胸のうちまで知らせたい

わたしのしんじつ此鑑札におまへとそふ名としづの年

海山こへてもかわらぬこゝろ切れちやいやだよ電信機

娼妓（じよろ）のまこともうそとはいへぬひらけりや三十日に月

がある

むねの蒸気のツイもへすぎでいつも（十四）航海するわいな

起請せいしへ印紙をはつてすへにまちかや訴訟する

束縛されうとかうなりやまゝよ男を掠奪した科に

アレサおまちよがらすですけるたゞさへ人目がおゝいのに

明けの鐘の音きゝたくないが権となるとはたのもしい

ふつとあうふたがわたしのつよみ（十五）賢女かゞみ八（三

千せかいをたづねても又とあるまひ殿御ぶり目にちらちらとかたと

きも忘るゝ間なき三つらさま（い）つせつなひむねのうち

すへのくろうもみな打わすれ（廿四孝二）御主さまとも御主人

ともわきまへしらぬつたなひ筆に心のたけを岩本の神のむすぶのお

なさけにうれしひ枕かわした時（こゝろはづかしこのすがた）（十

六）

人にやいわれずおも（ママ）のたけを（鳴戸）めうとのまこと

を天道もあわれみあつて国次のかたなのせんぎすむまではをつとの

いのちたすけてたべと「神やほとけにひらたのみ

日頃おも（ママ）のうらみもいまわ（忠九）むすめこゝへと呼

いだせば谷の戸あけてうぐいすの梅みつけたるほゝゑがほまぶかに

きたるぼうしの内アノ力弥さんのおやしきはもうこゝかへ（十七）

わしやはづかしいと「いふにあわれぬそでのうち

こがれなみだにまたふさぎかけ（ひらかの二）つまかふ鹿のは

てならでなんぎすゞりのうみ山と苦ろつするすみうきことをかづか

くお筆が身のゆくへいつまではてしなにはがた。すへはどふなる

ことじややら

まかすからには此たましひをぬしのうわきに入れかへて

命あつてのふたりが中にすてゝうわ」(十八)りやうはずがない
むりなねがひの縁さへとげてすてるいのちもおしくなる
ちゞまるほどにも苦をした主にそへば長生したくなる
偽いふたがまことゝなつてまこといふたがあだとなる
むりにいぬ気は外ではないがさきへこゝろが廻りみち
酒でわすれてまたたばこではおもひ出してはひとりごと
うわき男におなごのみちをとひて誠」(十九才)がきかしたい
親のいけんとおまへの実にも暮氣をもむことばかり」(二十)

一冊定価三銭

明治十五年十一月十五日出版御届

同 年同 月 日 発 兌

編輯人 大坂府平民 大森辨吉郎

府下東成郡西玉造村

岡山町三百七十九番地

出版人 大坂府平民 瀬戸亥三郎

府下新町南通一丁目

七番地

売捌所 大坂江ノ子島上町壱番地

瀬戸一成舎

各地書林絵草紙屋へ指出し有之候間御最寄にて御求め被下度候也」
(三十一)

本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
裁定のもと、公開されている。

三十七 『漢語どゞいつ』

明治十六年一月廿五日届。荒川藤兵衛編輯出版。錦耕堂山口屋。請
求番号：特 43-256。
編者・荒川藤兵衛の書物は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタ
ルライブラリー」で多数アップされている。したがって、本書につ

いても著作権は存在しないと判断できる。

(表紙タイトル判読できず)

竹葉筆」(表紙)

山口はん

漢語どゞいつ」(見返し)

方今文運盛大にして人智至大に開明し童蒙の輩ですら俗言を忌きそ
ふて漢語を弁解す然りと雖も予未だ漢語未熟なれども書房の求めに
応じて曖昧不当の漢文を編交して漢語都々逸と名号しこゝに一部の
小本を現出す看客可笑する事勿れと爾云

明治辰の春 漢仙老人記」(一才)

月影にちらりと看越す」(一ウ)容貌はかきのそとも杉のひとも
と

竹葉画」(二才)

自来不練「じらいふれん」(モトヨリナレヌ)のこの賤業「せんぎ
やう」(イヤシキワザ)も悉皆「しつかい」(みんな)おまへのこゝ
ろから」(二ウ)

わたしひとり心勞「しんろう」(シンバイ)させて傍觀座視「は
つくわんざし」(ソハデミテイ)するつらにくき」(三才)

ひとり都合「つがう」の片顔「へんぱ」(カタヲチ)な処分「しよ
ぶん」(さはき)そんな僻論「へきろん」(ムリナト)やめにしな」
(三ウ)

親父兄弟「しんふけいてい」(ヲヤキヤウダイ)絶交「ぜつかう」(マ
シハリタツ)してもたがいの契約「けいやく」(チギルムスブ)破

毀「はき」(ヤブリ)にやせぬ」(四才)

知己「ちき」(トモダチ)に依頼「いらい」(タノム)て熟議「じゆ
くぎ」(ソウダンシラベ)をとげてせけんはれての女夫「めうと」

なか」(四ウ)

みらひでそつとは往昔「わうじ」(ムカシ)の頑愚「ぐわんご」(ヲ
ロカ)現世「げんぜ」(コノヨ)でそはれにや廃止「はいし」(ヤメ)
する」(五才)

つらみ嶽嶺「がくりやう」(ヤマミネ)危険「きけん」(アヤウイ)

のうきよこして方今「はうこん」(タビイマ)のしん世帯「(五ウ)いへば自然「しぜん」(ナニヤラ)と愚魯「ぐる」(オロカ)らしいけれど不陳浮道「ふちんふどう」(イハナケリヤウワキ)なをらな「(六オ)逢「あふ」てうれしや戯言「ぎげん」の件「けん」が曉惜「げうせい」(アケガタヲシム)離涙「りるい」(ワカレナミダ)のたねばかり「(六ウ)接「せつ」(あふ)したうれしさ別離「べつり」(ワカレ)のつらさ鴛鴦「ゑんをう」(ヨシ)の契約「けいやく」(チギリムスブ)してみたい「(七オ)勉強「べんきやう」(ツトメ)しなんせ該梅「がいうめ」(アノバイ)の樹「き」(ジユ)も寒凌雪中「かんりやうせつちう」(サムサヲシノギユキノナカ)はながさく
体裁「ていさい」(ナリ)容貌「ようぼう」(カタチ)じゃわたしはほれぬ畜財「ちくざい」(カネモチ)のおかたが大専務「だいせんむ」(ダイスキ)「(八オ)八重「やへ」(ハチチヨウ)のやまぶき美艶「びえん」(ウツクシク)にさけど究竟「きうきやう」(ツマリ)無実「むじつ」(ミノナキ)の件「けん」(こと)ばかり「(八ウ)じみな談話「だんわ」(ハナシ)で深夜「しんや」(ヨフケ)におよびうれしや卒然「そつぜん」(ニハカ)大雷雨「だいらいう」(オホカミナリアメ)「(九オ)哭「こく」して遺失「あしつ」(ヲトシテ)のかんざしよりもうるむ落涙「らくるい」(ナミダ)大瀑布「だいはうふ」(たきのことし)「(九ウ)僑奢「きやうしや」(ヨゴリ)となへんうはきは無論「むろん」(ロシナシ)猪幣「ちよへい」(ヨカネ)と全身「ぜんしん」(カラダ)つゞくだけ「(十オ)暴風「ばうふう」(ヒドキカゼ)にちれたる木葉「もくえつ」(キノハ)みれば松栢「せうはく」(マツカシワ)紅葉「こうよう」(モミチ)たけつばき「(十ウ)他見不許「たけんゆるさぬ」(ホカノヒトニミセヌ)だいじなむす

めいつか欲色「ほつしよく」(イロガツク)むるのむめ「(十一オ)曖昧「あいまい」(ヨカシ)らしいと注意「ちうい」(コ、ロヲツル)をすれば屢々「しばしば」(イロイロ)めにつく件「けん」(コト)ばかり「(十一ウ)思慕「しばう」(ヨモヒシタフ)の樹木「じもく」(キ)へ調繆「ちやうびやう」(カラミツタ)すれば別離「べつり」(ハナルワカレ)せぬぞへつたかつら「(十二オ)対「たい」(ムカフ)すかゞみに疲体「ひたい」(ヤツレタスガタ)を写「しや」(ウツ)してひとりこゝろで悔泣「くわいきう」(クヤミナキ)する「(十二ウ)貴兄「きみ」(アナタ)の復心「ふくしん」(コ、ロ)いまひきしほの淵瀨変化「えんせへんくは」(フチモセトカハル)のあすががは「(十三オ)しやうしひとへも外見「ぐわいけん」(ホカノメ)かねて絶口「ぜつこう」(クチヲキカズ)してゐる身「み」(シン)のつらさ「(十三ウ)のぼりつめたる青楼閣「せいろうかく」(タカトノ)よひとの説諭「せつゆ」(トキサトス)うはのそら「(十四オ)部屋「へや」(ワカツイヘ)とやりての活眼「くわつぐはん」(ウゴクメ)しのびあげてうれしき夜具「やぐ」(ヨギ)の中「うち」(ナカ)「(十四ウ)容貌「ようぼう」(カタチ)きりうも北州「ほくしう」(ヨシハラ)の桜樹「あうじゆ」(サクラ)「これはこれとは懐「くわい」(ヨモフ)ばかり「(十五オ)漸「やうやく」(ゼン)放念「はうねん」(ヨモヒヲトゲ)「こよひのあふせこれで散別「さんべつ」(ワカレ)なけりやよい」(十五ウ)曩に漢語どゞ一の。初編をあらはせしに。殊の外賓客の御意にかなひ。猶後へんを著すべしと。江湖の求めに應じて。今又一冊を出す。童蒙女子。初学の輩には。聊が一助ならんとす。諸君陸續と。御笑覧あらん事を。
明治辰の春 漢仙老人記「(一オ)そなたも共にの「(一ウ)卒業すみて吐なる黄昏声じまん「(二オ)

盛隆「せいりう」(サカリ)「すぎれば桜樹」わづじゆ」(サクラ)「も炭」すみ」(タン)「と思惟」しめ」(オモヰ)「すりや月日がうらめしい」(二ウ)
空事「くうじ」(ソラコト)「放言」はうげん」(デタラメ)「くるぶはいへど胸中」きやうちう」(ムネノウチ)「辛勞」しんろう」(シンパイ)「たへやせぬ」(三オ)
君「きみ」(クン)「の來車」らいしゃ」(キタル)「をかぞへる鐘」しやう」(カネ)「に手指」しゆし」(ユビ)「と身体」しんたい」(カラダ)「起臥」きぐわ」(ヨキフシ)「に倦」う」(ケン)「む」(三ウ)
朝夕「てうせき」(アサユウ)「貴君」きくん」(アナタ)「の油画」とうぐわ」(アブラエ)「に対」たい」(ムカヒ)「し不識」しらず」(フシキ)「痴言」ちげん」(クリコト)「をかみだのみ」(四オ)
君「きみ」(ヨマへ)「と拙妾」せつしやう」(ワタシ)「は硯石海」けんせきかい」(スヰリウミ)「よ浅深」せんしん」(アサシフカシ)「毫毛」がうもう」(フデ)「で自然」しぜん」(ミツカラ)「しる
竹葉画」(四ウ)
熟醉上「じゆくすいじやう」(サケガイワセシ)「とは聊」いさ」(スコシモ)「かしらず真言」しんげん」(マコト)「明」あか」(メイ)「して恥」はづ」(チ)「かしい」(五オ)
登楼「とうろう」(ヨアガリ)「なさいと煙管」えんくわん」(キセル)「だして歩行」ほかう」(トホル)「男子」だんし」(ヨカタ)「のこころひき」(五ウ)
君「きみ」(ヨマへ)「と私」わたし」(シ)「は籬」まがき」(リ)「の松樹」しやうじゆ」(マツ)「光陰」くわういん」(ツキヒ)「経」ふ」(タツ)「るほどぶかくなる」(六オ)
主「ぬし」(シユ)「は秋風」しゅうふう」(アキカゼ)「弊子」へいし」(ワタシ)「はもみぢ嫉妬」しつと」(リンキ)「為」な」(スル)「すほど色」いろ」(シヨク)「にでる」(六ウ)
九時「くじ」や十時「じゅうじ」はさわぎてゐれど深更「しんかう」(ヨフケ)「するほど思考」しこう」(ヨモヒダス)「する」(七オ)
確「かく」と契約「けいやく」(やくそく)「するとは雖」いへ」(陰)「かげ」じやわたしに秋「あき」の風「かぜ」(七ウ)

廻円屏風「かいゑんびやうぶつ」(まはしへいふう)「の鴛鴦」えんおう」(ヨシドリ)「ながめ独」ひと」(ドク)「りねるなら宅」たく」(イへ)「で寝」ね」(シン)「る」(八オ)
心意「しんい」(コゝロ)「車輪」しやりん」(クルマノワ)「にきはあせれどもおやそい牛歩」ぎうほ」(ウシノアユミ)「のかへり」と」(ハウ)
熟考「じゆくかう」(カンガへ)「して見りやきれてはならぬ從來」じうらい」(イマノデ)「苦心」くしん」(クラフ)「のかひがない」(九オ)
終身「しうしん」(シヌマデ)「そをふと定約」じやうやく」(ヤクンク)「すれど義理」ぎり」(いふ字)「じ」で涙離「るいり」(ナキワカレ)「する」(九ウ)
雨降「うかう」(アメフリ)「なす夜」や」はたゞ寂々「しくしく」(サビシキ)「と心」こころ」さびしき夫婦中「めうとなか」(フウフチウ)「(十オ)
趣「おもむ」きはなけれど自然「しぜん」(ミツカラ)「アノおはな草」くさ」露「つゆ」を舍「ぶく」めるしほらしさ」(十ウ)
墨水「ぼくすい」(スミダガハ)「下流」かりう」(ナガレ)「に小舟」せうしう」(コフネ)「とめて堤上」ていじやう」(ドテヲ)「見困」みめぐりゑひざまし」(十一オ)
宿止不定「しゆくしゆふてい」(ネグラサメヌ)「のアノほとゝぎすねぐらさだめず漂々」へうへう」(ウカウカ)「と」(十一ウ)
露「つゆ」のいのちのアノすゝむしも欲哭難涙「よくこくなんるい」(ホツスナゲクカタシナミダ)「ものをもひ」(十二オ)
自惚「じこつ」(ミツカラホレル)「かよふに何」なに」(こわからふ暗夜通路「あんやつうろ」(ヤミノミチ)「もたゞひとり」(十二ウ)
花「はな」に驚「うぐひす」水「みづ」には蛙「かはづ」くらうするの男子「だんし」(ヲトコ)「ゆへ」(十三オ)
梅「むめ」(バイ)「か君」きみ」(くん)「ならわたしは翠柳「すいりう」(アヲヤナギ)「なかのよいのか戯怒」きど」(スネル)「するか」(十三ウ)
たつた河辺「かへん」(カハベ)「に小船」せうせん」(コフネ)「とめ

て鬱気「うつき」(シンキ) 枕「まくら」のそらねいり(十四才) 毫厘「がうりん」(スコシ) ゆめにも報知「ほうち」(シラセ)を依頼「いらい」(タノム) ほんにしんな事「こと」ばかり(十四才) 義理「ぎり」とせけんが現世「げんせ」(コノヨ)になくば末「すへ」(バツ)は接「せつ」(アハレル)せるななじやいな(十五才) 君「きみ」(クン)の心「こころ」(シン)は当時「とうじ」の地名「ちめい」変革「へんかく」(カハリ)するのりで気「き」かもめる

明治十六年一月廿五日御届

日本橋区馬喰町二丁目九番手

編輯出版人 荒川藤兵工(十五ウ)

(広告)

定価六銭

東京日本橋区馬喰町式丁目九番地

〔書物地本錦絵〕問屋 錦耕堂山口屋 荒川藤兵衛版(裏見返し)

三十八 『音曲独稽古』

明治十六年二月十九日御届。吉田正太郎編。請求番号：特 62-834。

音曲独稽古

定価金二十五銭(表紙)

文句入都々一

朝なゆふなに口説し写真(常盤津 将門)さがやお室の花盛り浮気な蝶も色かせく廓の者に連られて外珍らしき嵐山ソレ覚でか君様の袴も春の朧染おぼるげならぬ殿ぶりを見初てそめ(百十)て恥しの森の下露思ひは胸の光国様といふ事はその折しつて明くれ(下略)念が通じてこのおほせ

蝶よはなよで育ちし身でも(関の戸)かゝる山路の関の戸にさしもたへなる爪音を聞くに付ても身の上を思ひ出せば錦の戸ばり玉

のうてなに人となりひすゐのかんざしたおやかに(下略)手鍋さげるもおまへゆへ(百十一)

やぶうぐいすの私じやとても(おこま才三)そりや聞へませぬ才三さんお前と私が其中は昨日ふけふの事かいな屋敷に勤た其内にふつと見初て恥しい恋のいろはを袂からそつと私が心では天神様へ願掛て梅を一生たつたぞイ(下略)なく音に替りはありやせまいぬしに鸚鵡と氣を百千どり(清元 よし原雀)百十一(其手で深みへ浜千鳥通ひ馴たる土手八丁口八丁に乘られて沖の鷗の二丁立三丁立けんぞめきはむく鳥のむれつゝ木つゝき格子さきたゝく水鶏の口豆鳥に孔雀ぞめきで目白おし(下略)鷺じやさほどにおもやせぬ

待ば海路でおまへの名前(山うば)桃は気俣に山吹も見果ぬ内に春過て早卯の花と花がつみそしてあやめせつがや杜若ほつそりと(百十三)時鳥アレタ立にぬれ忍ぶ涼風かへ雁が届けし玉つさは(下略)返事とる手もこゝろせき

草の葉の露に影置アノ月さへも(夕たち)夕立の雨も一トふり馬の背を分て涼しき川岸に柳の枝の寄そひていつしか色に鳴神の音さへ遠き筑波東風残る暑を川水へ流す上手の帰り船草の葉に宿りし月も小夜風に悪やこぼれてはらばら(百十四)露か雫か雫か露か濡り色増す野への色(下略)かぶりふられりや地に落る

比翼れりのこのぬり枕(ごん八)それもく音の鶯も梅に三浦の小紫すいなゆかりと我ながらわがすま琴とかきならす思ひの竹の尺八も恋慕ながしはごん八が一ト夜きりとは氣にかゝる(下略)苦勞重なる床のうち(百十五)

二世も三世もかはした中を(おさん茂兵衛)疇を出てしよんぼりと世を秋雨の傘も人目忍てあやぶ道夫も何ゆへのきさを不義じやの何のかのへさる今日あしたのきのへ子と知らでかはせし事はじめその姫はじめ引きかへて今は命も亡ぶ日(下略)反古にする氣かこの誓紙

ぬしは牡丹よわたしは蝶で(百十六)長唄 相生しゝ乱曲)花に戯れ枝に伏しお獅子め獅子のあなたくひらりひらりと舞遊ぶ八ひき九ひきの奮迅の拍子夕暮に山々を見渡せば折しも松風に跡は涼し

く吹き誘ふ(下略)花にうかうか口をくらす

ふかくなる筈首たけはまり(一) 浅妻(一)百十七(このねめる浅妻船の浅からぬ契りの昔りさんきうそも鞆鼓の始りは先かく国より伝へ来て唐の明皇愛給ひ(下略)舟じや越されぬ恋の淵(百十八)

都々逸

他の物にはならない証こかわすゆび輪に主の紋
おまへの手事にふわりと乗て泳ぎ出たるうき袋
眉毛二度たて鍋町鬻に鉄ねもしら齒のかゑり花
親に孝行世間へ義理もかゝせず私しもみすてずに

歩行(あるく)犬より浮きな猫がいつかころんで棒に逢ふ

紫陽花ノ替ル習をかへつてかれりや心ノ操が立哩(わい)ノ

汚い奴だと云わりよが俣よボ口の仕上も西洋紙

警へ爪でも切れるときぎよ飛た噂にしてそしひ(百五十六)

いつそさつ張ゆふのは止て鶏のなく迄もつれ髪

こつてふらせるなみだの霰主ノ空きがもめるゆゑ

猫はほつれげおもわずかめば舌二からんだ主ノ髭

色けしら張さず蝙蝠傘も客にころばぬさきの杖

相乗り車でひと眼をかくし雨も嬉しき母衣の内

堅地と思つたこの中差に苦勞朱ぬりの恨めしさ

女房きどりて端書の便りしん実らしさの物日前

高い低いの差別はあれど同じに濡たる傘と下駄(百五十七)

誰に折られる野の女郎花はやく手活てぬしのとこ

世界にこひ路は放れぬものよ色で分たる五大洲

馬鹿な野良とあの晴雨計ふられながらに登り詰

胸の時計の狂つた二人つなき放れぬくさりゑん

すぬて帰りし蝙蝠傘をよこに見かへる糸やなぎ

私しが心はランブじや無が主に釣れて夜を明す

片膝なをして手管にのせる舌も巻葉の薄けふり

祈りころすと頑固はいわぬ祈り生して稼がせる

出ても嬉しいお前とならば証証がわりに新聞紙(百五十八)

帰るシヤツポの鏡をおさへとめる階子のだんの浦

煙になるのは知ツ、君の口でわたしをまき煙草

月はおぼろに待夜はふけて雁はかへるに主は来ぬ

はしば今戸は大名小路あさのけふりは娯膳さま

障子のかげ法師どなたと文を鶴に折子の如才なさ

目と目をしのんで恋路の道を友に氣を揉二疋馬車

衣かたしき只独り寝にぞつと霜夜のきりきりす

突出す手くだは玉転がしよ当がはづれて八当り

蠟色の手車わしや口車じつは囊中火のくるま(百五十九)

水かげんさへ人手は待たぬほんに開けた娯膳様

洗ぬこじれし恋ぢのしみがもめて淡たつ色砂盆

鐘やかからすに愚痴云よりも早く夫婦で暮したい

はれた妹背とやうやく極り履歴はなしもこの上

解て結んでもつれりやいつそ思ひ切髪なで下し

つらい勤はふすぬのところにされる小萩の物思ひ

人釣り橋うわ気なおまへ私しや只氣を紅葉山

月が隠れてヤレ嬉しやと思や眼に立瓦斯あかり

登る階子もあたりを兼てしのぶころのをく二階(百六十)

先へ一足行く手にすがり未練が跡へと引もどす

縮む寿命(じゆめい)が尺度で取れりや積る苦勞を知せたい

愚痴なやふだが瓦斯みる度に恋ぢも明うして見鯛

膝をはなせばアレ三味線もすねて柱のうしろむき

色だ色だとわけ白糸の染ぬさきからひとのくち

海の音聞がいやさに深山へ行ば亦も氣に成松の声

うき名流して顔みやこどりかげで糸ひく人がある

苦勞墨画の古風をすてゝいるでまとめた地球ダマ

好なをんなと蝙蝠がさは指で開いてぢきさせる(百六十一)

蓮のうてなの世帯はいやよ俱に稼いでれん化石

ぬしの浮きをきに掛時計ナンナン云のもお身の為

鉄槩はふくめど眉毛はおしみ松と桜の二こゝろ

虚を月夜のアノ里がらすないて迷わす恋のみち

善にうつれと日々書たてる人のかゞみの新聞紙

人がヤレコレ云ふても私しやぬしがアルミの此指輪

印紙はらねば誓紙も嘘よつくま祭りの鍋のかす

開けた心も恋には潤みすゝむ歩行（あゆみ）もあともどり
箱入もいつか連出し摺付られてハツト浮名の立マツチ」（百六十二）

文明と啼て来た蚊にチヨツトさゝれ開化無かと胸案

胸のほむらと石炭ちよつとしてさへ燃やすい

主はなほ更しうとは大事ほれたおまへを産だ親

開化教師もいろはの胸は開らき兼たるほの一字

はれてはれない夫婦だけどたてゝ置たい仮規則

来ては管まく子雀さへも笹のうへなら憎か無い

解けて結んだ袴の紐も堅い糸にししいしだゝみ

二かい関屋になき明石がた顔は写真で身をつくし

泥田そだちで実になる烏芋（くわい）みづをへらすは主計」（百六十三）

見定だてきかはづれてバツタリ泥の中へ飛込シヤテキ玉

髪にしんわら心に珊瑚ぬしにちかひの玉くしげ

黄色い声して英語を遣ひ青い書生の開花ぶり

世間みづ田の氷じや物を人にたゝかれ毒づかれ

隔られても洋灯（らんぷ）のホヤに來てはこがるゝ火取虫

隠す泪の手燭にもれてまたもむかしの闇になる

私シヤツゞみのどふでも能いが調て見たいは主のムネ

虫がついたと浮名はあれど末は芽出度はらみ稲」（百六十四）

じれつたい程うたぐり深い（同権八）つらい勤の其内に情は売ど

心迄うらぬわたしが苦界のまこと」などゝ手管でそらなみだ

字あまり都々一

浅草の名物すつかんすつかんの念仏堂めつほう高いは五重の塔みせ

物矢場の娘茶見せの子鳩ぼつぼに飛たりハネたりはじけ豆

私しや色気づきおつかさんは嘘つき親父（おとつ）さんは米搗めに

さ」（百六十五）んは浮気つきその亦弟は狐つき

私しや癩もち母（おつか）さんは癩もち親父（をっ）さんは疝氣持

で兄さんは疝癩もちで其また弟は（エヘン妙でゲス）たいこ持

渡水（しみづ）から蟹が出てやぶから虎が出て蟹と虎とけんかした

虎のちんぼ挟み切て蟹は逃たがとらまらぬ

廊下ばたばたモウシおゐらん挟み紙が落ちて居り升是ははばかり元の

穴へはさみ込だ其手ですぐ様つまみ喰

明神さまの森の木影でおまいとわたしが出合を仕たら神主さまが見

付て、コレコレ二人で何を、へい氏子をふやし」（百六十六）

て居り升る、ウ夫なら能（いゝ）、かみをそまつにせぬがよい

ざるや味噌こしおさゝら菜箸茶釜の輪手遊（わおもちや）の手桶に

しるだわし荒神ぼつきにしるぼつき内証のことだが坪皿なんぞもこ

ざり升

瀬田の唐橋の真中ごろに田原藤太の秀公なんぞが五尺ばかりにすつ

くと立て五人張に十五そくでつばきをしこたまこだまと附て百足を

ねらつてすいとほなす

（同かへし）はなす矢の根が近江の国の三上山をひとまき二巻三ま

きに四巻五まき六まき七巻半まき巻たる百足の額の処へおひこ」（百

六十七）ら うと矢が立た

さつま源五兵衛さんと言わるゝお方が小方を殺してころさぬ振よし

てうたいを唄ふてすましてかへります

どふせ焼けたよどなたの異見も聞のじやないよ手子ごも動かぬやれ

こりやどつこい恋の道

後朝後朝のなさけを知らば嘘でも能から最う一ツごとつけごと

つけもふ一ツごとつきや金龍山の明のかね

床の間のかけ花活を見るにつけても私しや思ひだす（清元山姥）

あやめ菖蒲やかきつばた」根は切れても水さへあが」（百六十八）

れば花が咲」（百六十九）

人情都々逸

早く染たいわたしのねかひいつまでしら齒でおくのだへ

そななに己（おいら）を疑るやうじやそなたのこころもきまるまい

ひとり寝る夜も枕をならへひとつわぬしとだいて寝る

わたしゆへにはおまへにまでもくるうさせるがいぢらしい」（百七

十二）

あふは別のはしめといへど死ぬまでわかれてなる物か

ふとした事からついのりがきて今はかた時わすられぬ

切るかくて斯なるものかたとへうわ気て出来たとて

逢ていはふと思ふたこともいはでわかれて何とくやむ

りんきらしいと言んすけれど」(百七十三) だれがこんなにぐちに
した

もしやさうかと悪察(わるずい)まわし口つらひくのもほどにしな
わるく言れりやともどもむりにけどられまいとて悪くいふ

たまにあふてと人目があればつもるはなしもなくばかり
かわいさうだよきはどい間にもめかほしのでいでいにくる」(百七
十四)

しのびあふてもはかなきあふせばこのんでも身にやならぬ
待もせぬ客はくれともまつあの人は声もまたせぬじれつたさ

たまにきてさへ咄もできず顔でわらつてむねで泣
末はどうかとあんじるやうでてんからいろになるものか

ぬしのあるのに命をかけて」(百七十五) まよひそめだ因果づく
たよりすくない此身の上としつてあながらにらしい

思ひ切とはむかしのことよ今さらいけぬはやほらしい
はらが立ならどふなとさんせおまへにまかせた此からだ

むかふ鏡にやつれた姿たれゆへこんなにくるうする」(百七十六)
そんならさうよといひたいけれど二日あはずにいらりうか

日にち毎日あふちる罰か今ははかなや遠ざかる
近所へ来ながら逢ずに行もじつは身の為すへの為

しあんしかへてみる気はないかそれじや苦ろうしたかひがない
仕うちでほれはゝわたしが悪い」(百七十七) 口をきいたはおまへ
から

かんがへへりヤかんがへるほどくろうがまそぶぐちになるのもむり
がない

はたじやまだ気も付ずにあるにすねにきずもちや気の弱み
わが身でわが身がじ由にならぬぢれてくひつく夜ぎのえり

相談つくなら遠ざかるふがとひをとづればしておくれ」(百七十八)
合せものはなれりや他人とそりや情がないうつくしづくならいつま
でも

たまたまあふのにまういろとかはじやなん癖つけたがる
ほかでみたならさぞをかしがるがいふにはれぬ事がある

末のくゝりはしてあるけれどおまへを思へばなきわかれ

聞わけがないとおまへはいはんすけれど」(百七十九) きれるかく
ごでほれはせぬ

友だちのためば時節を待とせつまつなら頼ミヤせぬ
苦勞させたりしもするからはいやだあきたといはしやせぬ

おまへいやならつんつんしやんせわたしやひとりで情たてる
どけう定てあいさつしやんせ酒のうへだといはしやせぬ」(百八十)

義りと世間と人目がなけりやこんなにくるうはせまいもの
その酒をとめておくれよ飲せちやいけぬしらふでいせせる事がある

かへりやさんすかちとまちなんしはなし残した事がある
とこのほてりもまたさめぬにかうもあひたくなるものか

骨のよはみを見こまれぬいて」(百八十一) ねこそげおまへにぢら
される

つとめのみならばどふしてなりとあげてたのしむことがある
いしゆもいこんとない客人へつらくあたるもおまへゆへ

あはぬ昔とこらへもせうがどふぞたよりはしておくれ
かくれてあがれば心のひがみせうちしてめてぐちがでる」(百八十
二)

口じやいはれずしうちじやできずぢれてふさいて癩のたね
たつたひとりのおまへを便り鬼の中でもしんぼする

女房もちとはしつてのことよほれるかげんがてきやうか
かるい世帯もおまへと二人きがねせぬのをたのしみに

おまへにまかしたわたしの体」(百八十三) 煮よと焼うとすきしだ
い

たつた一言人づてならでいふて置たいことがある
忘まいぞや行すへまでもかたいちかひのいれぼくる

なまじあひ見てなほ物思ひしらぬむかしにしてほしい
今くるといつてわたしをよもやにかけてもはや有あけとりが鳴く」
(百八十四)

しのぶ恋ちもついい色に出てものや思ふと人がとふ
をよばぬこととは思ツちやあれどやつはりみれんで神だのみ」(百
八十五)

明治十六年二月十九日御届

同 十六年三月 出版

定価式拾五銭

編輯兼出版人

埼玉県平民

吉田正太郎

神田区小川町十番地

大塚祐英方止宿

発兌所 神田小川町十番地 秩山堂書舗(奥付)

本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

三十九 『新咲都々々』 四季明治之花』

明治十六年三月十九日御届。澤田道太郎編。請求番号：特 57-551。

〔新咲都々々〕 四季明治之花 月之本梅光輯(表紙)

新咲都々々

四季明治之花

蘆之家里人閱

月之本梅光輯(見返し)

好風(いき)とは何ぞや。家暮(やぼ)ならぬをいふ。家暮とは何ぞや。自宅(うち)にばかり引籠て。世上の苦楽を知らぬゆゑ。偏屈人と称さるゝをいふ。彼偏屈に片?(かたづま)ず。粋と呼ばれて浮気に成ず。善々人情に流通して想像(おもひやり)のあるを以て。(さばけ)た人も。好風ともいふ。其情態を穿ちたる詞を集めし心意気は。倭も唐も西洋も異なる事はなけれども。東都(あづま)の家暮操觚者(さくしや)が。浪華の哩哥(うた)のよしあしを。知るべき筈もなき故に。月の本が撰に任せ。版元より乞ふ俚に。浮世の情を穿ち尽し。此都々逸の妙味を賞して。先叙文(はしがき)から。トントン。コリヤサア。と発声(つな)る

明治癸未春夜曾根崎新地の青楼において

東京 柳亭種彦醉題(序才)

(絵)(序ウ)

〔新咲都々々〕 四季明治の花

月之本梅光子輯

春之部

元旦 しんとおさまる一間の中を気づかず襖を明の春

同 とんとんとんと先づ初春に好郎(スキ)と上つた段ばしご

同 立つ歳月(トシツキ)の待甲斐あつてねん明の春添とげる(一才)

〃 羽織うち着せ扇子(アフギ)を渡し飛だ御礼をせぬ様に

四方拜 闇のざこ寝に好郎(スキ)何方(ドチラ)にと探すも小声

の四方拜

飾り松 女夫(メヲト)の若松祝ふて買てはつ世帯のしめ飾り

初祝 急ぐ化粧にひざぼん出してゑんぎ祝て初首尾

筆始 主にまゐらす此の玉章はことしのくぜつの筆はじめ(一ウ)

床飾り 風がとりもつ其よい中はなびく柳に笑ふうめ

雑煮 俱に兀(ハゲ)たと雑煮の椀をみつゝおぢんば祝ぬ笑(エミ)

段重 可愛ない好郎一寸叩き牛房うらみの数の子いひながら

七日 首尾は七種私や言囃しけふは八日で拍子ぬけ

同 叩いた傍から?いを?ばら好郎がはやせし齋ぐさ(二才)

恵方 恵方参りが可笑(ヲカシウ)それで今朝は女房の角はじめ

十日戎 鯛を釣のは蛭子が上手ゑびす釣のはねこ狐

? 逢て山々嬉しい景気笑顔で霞の帯をとき

花車 主の心は吹風しだいほんに浮気な花車

羽根 嘘を突羽根主や他所へそれ一二三夜さも待ばけた(二ウ)

凧 曳ば引ほどなづきながらなんで切たか紙鳶(イカ)のぼり

同 旨く昇したあの奴風人がしやくつて遂切れた

同 長い鼻毛を糸目に付て昇せられたか奴風

同 凧の如くにのぼされ客が遊所(シマシマ)経廻る夢想兵衛

同 家(コチ)の人ともまだ呼初ぬ居続け心の花世帯(三才)

同 花や今宵の女房の目からそらにしらぬ雨が降

同 花は散るとも豁(サバケ)た実意焼す言葉を根に戻す

同 つらき流の身苦界骨の上を粧ひて花を売る
 同 勤の花うる線香の灰でみがく心の引いわぬ
 同 折取給ひぞかならず余所の花にくるはづ来てほしい(三ウ)
 同 情夫(マブ)に内証で忠度さして花や今宵は客に売る
 同 寝顔の鷹へ頭痛の梅がおちてうはきのせきをする
 同 神へ梅断好郎へは意気地立て厭嫌(キライ)へ箒立て
 同 足の遠いは花の香男近いは近眼の親父客
 同 主より一足私や早咲の梅に出逢の神のみち(四オ)
 同 色香含でひと間の中をそつと覗いた窓のう
 同 好郎に咲した若木の花を嬉しうながめる庭の梅
 同 遠く隔てゝ驟ぐ花の香に思ひます様な風便り
 同 あんまり美(きれい)でちと梅干にあつたら筵と粹のはて
 同 隠しかくしたつもりも今は梅でさつた粹な親(四ウ)
 同 桜添ふて小意気に出す双合(フタコ)店桜框に花咲す(五オ)
 同 好郎に盃さゝれた時は飲まぬさきから桜いろ
 同 一座の嵐は笑顔でうけて囉ひ先までちるさくら
 同 死で花実が何さくら木も散れば見返る人は無い
 同 福寿草 口舌めでたく先づ明けましてうれし泪の福寿草
 同 梅と並んでひとつの鉢に女房気取の福寿草(五ウ)
 同 海棠 芸妓(ネコ)の湯上り咲く海棠の雨に濡れたる立すがた
 同 豆 類冠して毎夜(ヨゴト)の浮気よつぼどおまへは豆絞り
 同 豆をかぢりに来た鼠をば亭主に隠した網戸棚
 同 桃 世辞は産湯で桃下の豆お客次第の山計り
 同 鶯 鶯待つ木に鳥がとまり目的(アテ)の違ふた今朝の首尾(六オ)
 同 百千鳥 山が咲(ワラ)へば吹出すはるの風に轉る百千鳥
 同 帰雁 暮盤目形ちの所の町に燕と帰雁の打てがへ
 同 鮎 深い処へ堰おとされて水に気をもむ登り鮎
 同 扇 忘れて戻つた扇のさきを探らぬ女房の要なし(六ウ)
 同 夏 夏
 同 短夜 長い思ひが短い夜さに叶や猶さら明け安い
 同 思はぬ添寝に短夜明し好郎と嬉ふ昼寝した

同 すねあひ競(クラブ)に短夜あかしどちらも本意ない別した
 同 酒が過ると又無理ばかりこの短夜の気も汲ず(七オ)
 同 夏 夏瘦したかと問るゝ毎(タビ)に今年ばかりと云ふつらさ
 同 夏書 文の反古に娼妓(オヤマ)の夏書嘘と誠のうらおもて
 同 土用 虫に衣裳を残らず喰れ土用干する世話は無
 同 五月節句 主へ意気地を張子の虎で否な客へはかぶりふる
 同 雷 見るも穢と雷芸妓(ゲイコ)厭?(イヤ)へ紙幣をたゝきつけ
 (七ウ)
 同 露 其こゝろとは露しつて居る私は当座の花である
 同 蚊帳 解て逢夜の嬉さ蚊帳の紐に笑顔をむすび込む
 同 同 主のさしづで昼釣蚊帳を罪の無い子がうれしがる
 同 団扇 顔は見度(ミタイ)し見りや恥かしゝ団扇一重が吉野川
 同 同 うち片手に褌持ながら好郎に出逢て立ばなし(八オ)
 同 浴衣 屹度女夫(メヲト)に鳴海の浴衣しぼる互の実ふたつ
 同 同 互の身巾に合ふ浴衣かと思や喰つく肌ざはり
 同 同 俚になるみの絞りのゆかた主に着たり又着たり
 同 帷子 姉に裸の咄しを着せて好郎に帷子脱ぐ妹
 同 菖蒲 切れて仕舞ば六日の菖蒲なぞと案じるあの悪性(八ウ)
 同 同 男風呂には由縁(ユカリ)の色と尻眼が菖蒲の堰潜る
 同 茄子 色に迷ふて契てみたら謎(ヤサ)し茄子も針がある
 同 同 隣の伯母さん頼んで当座なすの家借る新世帯
 同 蓮 実(ゲ)にも蓮かと遊女の勉強客の当麻に糸仕事
 同 同 花の街(チマタ)に女兒(ムスメ)が出来て流れに蓮が咲わい
 同 同 な(九オ)
 同 同 朝の別れに惜むか蓮もじつと巻葉に握る露
 同 牡丹 袖ない洋服二十日も来ずと無理に牡丹をはづす床
 同 夢見艸 葉桜みながら昼寝をすれば好郎に逢たる夢見ぐさ
 同 石竹 心せきちくそわ付客の背を叩て言ふ無心
 同 蓼 癩の虫まで好てる蓼は添にや中々喰たらぬ(九ウ)
 同 胡瓜 あんたの種じやと世間の噂客へあてがふ瓜一つ(十オ)
 同 木影 情夫(マブ)と時折涼しい首尾は金の生る木の影です
 同 子規 嬉し初寝の首尾東雲に本望とげたる留魂鳥(ホト、ギス)

同 待て居るのに来ぬ時鳥またぬ鳥の声を聞く
 同 不如歸より嬉しう聞た命かけたのことが
 同 余所へ返事をかけたとみえてまつにつれない郭公(十ウ)
 同 水鶏 叩く水鶏も主かと思ふほんに待身はつらいもの
 同 待て居る夜は水鶏が欺す逢は鳥が邪魔をする
 同 旦那の声かとあはてゝ起て戸明て能く聞や蝉の声
 同 蛭 蛭狩にもお客は赤い湯もじばかりが眼にとまる
 同 眼の無い庭先文読に出る蛭籠ほど星あかり(十一オ)
 同 蚊 嘘の起請に蚊の血を付てお金吸取る客に遣る
 同 蚊を追ふ拍子に行燈が消て互に遠慮も何処へやら
 同 蚊を焼ともして寝顔の鷹見とれて出額(デボチン)やけどした
 同 蚤 蚤らい蚤じやと足取かへて搔くはずね負けする小口
 同 口舌中途(ナカバ)へ飛込蚤が鷹さすつてせゝり出す(十一ウ)
 同 せめて蚤ほど可愛人が寝さゝなんだら嬉しかる
 同 舞々虫 舞々虫ほど小廻りのする悪性男の濡どつし
 同 らんちう らんちうみた様な此腹ぼても元はざこねのもぐれから
 同 遊舟 暫時汐時二階の無言様を枕に舟あそび
 同 納涼 ゆかし三筋の糸引く声で婀娜に涼しい夏座敷(十二オ)
 同 夕浴 行水中端へ好郎から知らせ否な鳥の真似をした
 同 涼舟 すだれ下したあの涼ふね余所の事でも気に掛る
 同 蚊遣火 たまの此首尾あれ憎らしい寝さそと蚊遣火焚はせぬ
 同 好郎を待夜に焚く蚊遣火は消ゆるほど猶こがす胸
 同 昼寝 解ぬ思ひについする昼寝起て思ひの乱れがみ(十二ウ)
 同 他人の寝夜もねられぬ苦勞もとはついでした昼寝から
 同 天瓜粉 腕の汗瘡も枕の跡と思やたゝけぬ天瓜粉
 同 汗 今宵しつぼり嬉う逢て癩の固り汗で解く
 同 誰がこんな暑に暑いめさすと笑顔で二人が汗をふく(十三オ)
 秋之部
 同 秋夜 面白もない添寝は客の鼻の下より夜が長い
 同 添ふて長夜を知る昨日迄恨だ鳥にはづかしい
 同 秋暮 いづくも同じと言ねど後家が寡男(ヤモメ)に清辞(セジ)

うる秋の暮
 同 中秋 何れお目もじ此仲秋と今川もどきの実意文(十三ウ)
 同 秋風 抜てこまそか風鈴の舌秋風ふかしてやかましい
 同 又 又ないお客に勤の地金情夫(マブ)に秋風吹かして
 同 秋日 春気心に成たる同士好郎とやけたい秋の日に
 同 嘘を月影私やうしるから憎い女子の影もみた
 同 月も落ねば鳥も啼ぬ比に去(イネ)とは憎らしい(十四オ)
 同 晴れて逢れぬ身を尻からげ月の影行二人連れ(十四ウ)
 同 お内思へば焼餅形の月見するさへ物案事
 同 田毎に照され恥更科のつきほなしとは曲がない
 同 雨後の月 濡てみどりの濃き色増る松にやどかる雨後の月
 同 二百十日 七十五日の恋風すぎて二百十日も遠ざかる
 同 盆おどり 恋しいお方と躍りにすれて袖がえにしとなればよい(十五オ)
 同 七夕 時計の音聞き指おり姫の来る間待てる野夫(ヤボ)な客
 同 放生会 八幡詣りの親より留守か好郎と夜舟で放生会
 同 燈籠 すきの返事と嬉さそゝる封を切籠の裾まくる
 同 稲妻 座敷光らす稲妻芸妓西も東も囃ひさき
 同 秋の松 居間の襖も色かへぬ松立切る操の堅い後家(十五ウ)
 同 実入箱 虫が附たと浮名は立ど日立やめでたふはらむ稲
 同 紅葉 そつと見合す顔には紅葉秋は心になきものと
 同 さゝれた猪口から恋風吹て顔の楓がちりかける
 同 桐 気ならぬ添寝に心が置て桐の葉に夢やぶる
 同 鼠鳴して障子を明りや鳥の真似した桐一葉(十六オ)
 同 鳶 口舌もつれて出ていね去ぬの中に這ふ児が鳶かづら
 同 足手纏になるとも惚れた心はおまに鳶もみぢ
 同 芭蕉 ばせをの破るゝ音聞て居る添寝は猶さら情が深い
 同 鬼灯 好郎が出逢た嬉さまぎれ思はず鬼灯呑こんだ
 同 柱にもたれて鬼灯くはへ奥歯で鳴して物案事(十六ウ)
 同 朝顔 釣瓶取られて朝顔しほに水の無心に好郎の内
 同 同 (ヤサ)しい朝顔につこり笑ふ鷹に残つた口の紅
 同 蓼の花 姉は俄師妹は俳優蓼の花喰ふ間夫狂ひ

雁来紅 雁来紅みた様なべゝきた舞子孫とそろへにした隠居
女郎花 変る秋風とは気がつかず摩くあはれな女郎花(十七才)
西瓜 コレ狸さん夢お覚しと寝顔へ西瓜の種つぶて
菊 俱にながめておく陰のきく身請の金より上に居る
瓢箪 ぶらぶら仕て居て精出す女房青瓢箪じやと云はれてる
松茸 味の能いのがおますと洒落て後家に松茸売つける
唐辛子 女子(ヲナゴ)の御児(オコ)かと愛想に問れ自慢でみせ
てる唐辛子(十七ウ)
尾花 風のまにまに靡たゆゑか花を孕だいとすゝき
同 なびきかけては又刎かへすおもひますほの花芒
案山子 粹な妹が案山子になつてとりこむ二階は首尾の秋
同 案山子みた様なお客を抱て啼ぬ鳥をうらんでる
鹿 提て戻つた籠みてうぶな角折る嫁の気竿らし(十八才)
同 二人気楽に聞く鹿の声角氣(ツノケ)はなれた秋の床
同 文のこよりで鹿こしらへて角を乗てる好郎のひざ
蠱 姉はそゞろで氣はすきに飛罪ない妹は蠱とる
蚯蚓鳴 書けぬ返事の蚯蚓を鳴て下女は手紙を人たのみ
蛸 今宵来るとの便を聞て蛸なく比身づくろひ(十八ウ)
虫 あれさおよしと云ふ間にふつと氣転きかした火取虫
轡虫 やかましいのが粹にもなると轡虫買ふ若女夫(メウト)
松虫 主をまつ虫今宵も釣られ欺されて啼く籠の中
同 出て来ぬ主をば松虫ともにないて明したこの長夜
蜻蛉 ごくらくとんぼの野掛のしづに邪魔な子供をつけて出す(十
九才)
虫 露に濡るは私や厭はねど虫に聞かれる忍び足
同 虫聞そぶりで切戸をそつと明ける拍子に好郎の声
野懸 暑なし寒なし日ぐらし戻り秋の野懸のぬれ加減(十九ウ)
冬之部
師走 苦勞しはずでせわしい私嘘は春まで聞(キケ)ません
雪 苦勞中端に嬉しい雪が主をいなさぬ様に降る
同 積り積りし思ひの胸も解てうれしい雪の肌
同 宵にちらりと見た月影も今朝は変つた雪の肌(二十才)

同 私しや呉竹主や白雪の積る思ひでくらうする
水 妾(ワタシ)の涙も氷となつて主がうはきの胸ひやす
長襦袢 囉た客より内証の首尾でくたびれ勝なる長襦袢
鴨 鴨の脛ほどみじかい首尾に鶴のはぎほど待された
同 好郎と二人が鴨鍋だてを否(イヤ)な鳥が焼て居る(二十ウ)
炬燵 飛で出たのも元はといへば主の心の水こたつ(二十一才)
同 かんこくさいは此こたつかと探るそぶりで鳥渡(チヨト)さわ
る
同 巨燵は浜辺の浪打際と足で貝ふむこともある
千鳥 悪(ニク)やいそいそ主や千鳥足余所で浮氣の戻り足
餅搗 外で餅搗して来たからと言ふて肉餅かはす嬢
足袋 別れ惜みに出しおくれする脱すて足袋まで暖めて(二十一
ウ)
煤払 人の心に煤払(ス、ハキ)したらどんなほこりが出るだろう
雑之部
首尾は上々吉弥に結ぶ帯の解初め好郎のいろ
月に幾許(ナンボ)で飼れたからだおもや此身も籠の鳥(二十二
才)
嘘の泪が襟からつたひ臍のあたりがこそほなる
吸はせたい口煙管に籬石流(サスガ)夫者(ソレシヤ)のふき忘れ
帯文け取らねば寝悪杯と云ふはざこねの秘密らし
すきな方へは眼がよりやすい一座の女がみなしりめ
乱れ髪から洩る流視(シリメ)ほど男まよはず物はない(二十二
ウ)
惜い寝間出てこつかれに行客は敵のからすはだ
夢が覚たら親父の足と母者の臍とが恋しなる
誰が化物じやと持参の嫁が立聞して居て泪ぐむ
はつの御目もじお恥(はも)じながらゆもじ外して此しだら
水が鼻から出て有る親父みづの出盛(デバナ)の子に意見(二十
三才)
訳の分つた伯父さん所(トコ)へ愚痴や恨みを捨にゆく
三筋ぐらゐをひかすは内証みすじ退(ヒク)のは表向き

畳へうず巻く背向（ソムケ）て書は色に鳴戸の返事らし
すきな噂さを聞聾して人の意気問ふてれ隠し

一二三四と番付打つて小杉手本の四枚ごと（二十三ウ）

松に鶴ほど首延ばさして酒に虎とはどうよくな

余所へ預けに行小戻りは跡に大事な忘れもの

素顔で手入も物めづらしい引た当座の朝かゞみ

お酒ばかりでめつたに主は二日酔する人じやない

幾人（イクタリ）有ても子は宝じやとあいさつ仕ながら目尻みる
（二十四才）

尻に尾ありの猿智恵芸妓（ゲイシヤ）身の廻りさへ割ぶしん

逢たかつたの跡痛かつた泪ふきかけ御無心の

連て戻つて置んせ何の怪気はあちらがせぬやうに

可愛処へ手かゞきかね撥てこそぐるあしのうら

実意見抜て猶跡先のみへぬ実意が目積る（二十四ウ）

一寸とも寝られぬ今夜とかけて何と解へとなぞ口説

泣かざるゝのもつぶさるゝのも覚悟のすき髪薄化粧

癩に懸りの無い御客には妹の花だけさし込ます

可愛らしさの膺の隣憎てらしさの紅の跡

胸にあまつた頬に嬉さを包みや膺の穴を洩る（二十五才）

捨てもどつた噂のかけと思ふ壺をばついでみる

可愛可愛と言ふ口紅をふいた小杉が怪気さす

お客だました罪ほろぼしに主の浮名を飼放し

恥かしかつたと最二度目は一寸口舌の地ごしらへ

客の手くひを握つた思案金の脈とる医者芸妓（二十五ウ）

後る鏡にうつかり書た気のせく化粧の二本足

立つる茶釜も移るは色香湯（ユウ）が女子の水のあは

主は氣遣い目遣い私（ワシ）は告る素振をする中に

そやしてほしさにはづかしかつて面白がるのを聞のろけ

手管も今更引かれぬ足を抜く智恵追手を先へ出す（二十六才）

溜る埃りのうは水ながし急ぐ化粧の久しぶり

本の通りに鼻緒を直しそつと隠した下駄を出す

世帯破りが雇れさきの筵やぶりを手にいれる

長の勤もお前が杖になつてそれほど草臥ぬ

機嫌能して可愛い時は惚た当座の氣に戻る（二十六ウ）

尾付する様な顔して文が好郎の背骨を這さがる（二十七才）

酒と此方とどちらの味がよろしおますと抱しめる

客に線香の割ぶち懸てそつと利して合に來た

御客御無心などてれ客のひざで三味線乗せ氣取ル

無心の段取り考る夜は否（イヤ）な御客も夢に見る

着せる羽織の襟つくるふてお近いうちにと舌によるり（二十七ウ）

まげのある人御客にとりて眉毛の無い人情夫（マブ）にする

あちら向てる二本の足へ金のわらじを履す客

好郎に口説かれ嘘ばかりで言ふて背ける解け小口

紙入れさぐれば我文ばかり由断さすのか恋軍師

お客分じやと云てる内に腰の柳がうすになる（二十八才）

勤してゐる身のからくりの裏をみせたらをかしかる

人の袖まで泪でぬらす待夜更行はり仕事

膝を枕で寝る様な客でなけりや鼻毛もよみにくい

自惚れ心に深切めかし咄しするさへ情夫氣取り

三度（ミタビ）出雲の帳合戻り矢張末練の通ひ尻（二十八ウ）

分り兼ても女の書た文は誰でも読たがる

内を出しなの機嫌のよさが悪ふわたしは氣が廻る

心にこにこうかうか人に行当（あた）る嬉しい朝戻り

撫てみさんせおまへと留た癩がこゝらで笑て居る

別れ未練に見直す顔に付た紅ふく枕かみ（二十九才）

好郎な返事に嬉く走りや島田の鬚（ワゲ）まで踊り出す

これはこれとはばかりにしめる風にふきちる吉野紙

十二月随意兼題

一月姫始 むしの好く客姫はじめから帆柱立さすたから船（二十

九ウ）

二月彼岸灸 爰を互に貸たらきかぬあつくすゑると洒落女夫

同 お前はりん病私や消湯（シウカチ）で前にすゑ合ふ二日灸

同 内は灸（ヤイト）で出て彼の岸のすきな所へ舟よせる

三月汐干がり 恋の淵瀬へづんぶりはまり股までぬらした汐干狩

四月誕生会 言が丈け損びんびん草のすげな甘茶でゆかぬ奴」(三十才)

同 釈迦も達磨も飛出す穴によほど御利益ありさうな

五月流鏑馬 金気のある方へかけたる的は我からならいをはづさぬ

六月鳴神 行水みかけて鳴かみなりの目途は臍より下らしい

同 大事な所より臍丈け押へ行水あがりの稲光り

七月?? 年に一度は今宵も雲のうへ人でさへ泊りがけ」(三十ウ)

同 あれもト一と下女寝床から夜這ひ星みて洒落て居る

同 早よ来て星逢まつ身に待ぬ否(イヤ)が忍んで夜這ほし

八月月見 桂男は乱した萩をみては雲間を踏はず

九月茸狩 口に毒より見る眼に毒な茸(タケ)が女子の気を上す

同 歯ぐきはなけれど斯ふかみ入た此松茸のあぢは別」(三十一才)

同 みつけられたら取るゝ元と大事の松茸寝ずの番

同 二人蒲団で寝て居る姿茸狩はじめる東やま

十月亥の子 今宵はお越と仕て置炬燵好郎へ馳走の亥子餅

同 亥のこされたと櫓にもたれ独り狂言うつて居る

十一月初雪 壁に書れた傘敷て濡てかゝつた雪の軒」(三十一ウ)

同 未通女(オボコムスメ)のはつゆきの肌帯も心も解はじめ

十二月蔵入 今度の御客もまた蔵入と鍵まであづける大三十日

同 前働きしてまた蔵明て宝さしこむ大三十日

同 主へ蔵入するこんたんに客へ穴蔵一夜がし」(三十二才)

浪華歌ゆかりの月抜句

なつかしや お金まき出す客なつかしや惚たはれたは別にして

中にもしばし 否(イヤ)な中にも暫しは止めていやをすきじやと

節季前

可愛をとこに すげなふ受るも座のてれ隠し可愛男にちよくもらふ

て

広いせかいに 広い世界に夢喰ふ男などと卑下する手管惚」(三十ウ)

二ウ)

かあいをとこに 可愛男に為永くらう粹書本ほど現つ情事(せじ)

同 可愛男に遣る金なくてなんのおのれがお客かな

かあひ 可愛と云はれた嬉さで今かあいさうなと人にまで

つらい思はぬ人 何もつらいと思はぬ人の為に沈める此身なら

昔なつかし 身上りして迄逢たるむかしなつかしいほど世帯染」(三十三才)

思はぬ人に 眼をば針金伝信婆々が思はぬ人にも気をつめる

まどの内 まどのうちから誰かれなしにもしもしよの招き婆々

今はのざは いまはのざはが歌沢なる人に心をひかされる

かあいをとこ どんだけかあひと男に問はれぐつとつまつただけかあひ

すむは まことの嫌をきらひといふてすむは愉快の酒のとく」(三十三ウ)

うしとみ 色は黒うて恪気の角はうしとみるのも無理でない

ながれのむかしなつかし 質屋ながれのむかしの襦袢今思ひ出しや

なつかしい

こんなえにしかから こんなえにしがから紙そつと明て二人がしめ

うはき

むかしなつかし かあい此子に着せばや私がむかしなつかし裾もやう

すまぬこゝろのゆかり すまぬこゝろのすむ嬉しさはゆかり求めて

逢もどり」(三十四才)

ながれの 貞女破つてながれの勤め世帯やぶつたつゞくり

むかしなつかし たんもの隅からは見やしやんせむかしなつかし文

が出た

同 むかしなつかし旦那もまめで杯とせじ売るばゞげいこ

ひとつみづ ひとつみづ汲む長家の井戸へ行もはづかし新世帯

ゆかりの 川と云ふ字にゆかりの糸を弾て一座の客つかす」(三十四ウ)

姉と妹の好郎からへんじいそいそ化粧のひとつみづ」(三十五才)

すむはゆかりの 着かざる一座へ常着のまゝですむはゆかりの女(コナゴ)らし

こゝろの中 今宵のなりゆきみる辻占はすぎがこゝろのなか迎ひ

すまぬこゝろの すまぬこゝろの口舌が解てたゝむ帯まで腹合せ

せきよりつらい 好郎が相図のせきよりつらい気計り通はし逢ぬ身
は かあいをとこ かあいをとこが来て何事もしめて戸口は留守らしい
(三十五才)
すまぬこゝろのなかにも すまぬこゝろのなかにも文をみたし怖し
の躰もの

浪華名所読込句

高津北坂 情郎(スキ)がきたざか思はずみとれすかむいて居る遠
眼鏡

網嶋大長寺 待土器(カハラケ)へ南無あみじまと大長寺いれたる
ねずみなき(三十六才)

住吉詣 虎の御客に卯の日じや杯と参らすすみよし辰の日に
玉造二軒茶や 内を抜出て人車(クルマ)で急ぎすきを待合ふ二け
ん茶や

高津神社 噂もたかきやうつりし日よりやしきにぎはふ初かまど
電信局 長家の井戸端でんしんきよくで後家とやまめが出憎がる

夢の浮橋 手紙は無事でも顔みにやゆめのうきはし見た様に便りな
い(三十六才)

木津大黒天 居間へ行く後家きづかい杯とかけでだいこく恪気する
自安寺妙見 客へ売る情じあんじで情夫(マブ)が顔見がてらの朝
まぬり

茶臼山 初の御目もじ挽臼のせてちやうすやまとはおはもじい
天王寺名所 あげも五重の塔ほど出来てねこのもんだの初まはり

浦江聖天杜若 嬉し逢状を持って来たうらえ返事もうつゝでかきつば
た(三十七才)

森の宮 淋しからふと隠居をもりのみやひさしたる粹息子
住吉誕生石 晴れて二人がすみよし詣人目に重たいんげういし

淀屋橋名産 二階へ聞がし火ばちの傍のよどやばしみて高咄し
長柄の人柱 有るひとはしらの娘は親を寝ながら養ふなさけ売
桜の宮 花見すゝめてさくらのみやにすきの居る事悟られた(三
十七才)

樋の口三十石 三十こくから口々ぞめくひのくち上りの二人連

解船町の雪 積る思ひの帯ときふねちやうすきにまかした雪のはだ
久留米邸の蛸の松 逢にくるめの約束ちがひ恨みいふ耳たこのまつ
今宮戎神社 苦勞仕た甲斐いまみやさんせ素人ぐらしのえびすがほ
瀬戸物町 麒麟のお茶碗せとものちやうでふたつ買てる世帯前(三
十八才)

座摩宮の前穴門 車夫の粗忽(ソソウ)で身をもがくほどあなもん
広げたさまのまへ

産湯社 取上婆様(バサン)にうぶゆのさしづ仕られてから釜焚付
る

北御堂不明門 爪客計がきたみだうでは日柄もあけずのもんだ日前
寺町寒山寺 真身の咄が更行鐘に夢おどるかすかんざんじ

三番の萩 さんばがやかまし早去(ハヨイナ)してとおいはぎしら
れた羽織きる(三十八才)

心齋橋鉄橋 しんさい狂はにやお客に程を売も身すぎのかねのはし
鶴満寺糸桜 癪を片手に文かくまんじ乱れ心のいとざくら

鳴野造幣局 娼妓(ヒメ)も我折た寝間新發明不しぎの器械でおど
るかす

畿内名所読込句(三十九才)
大和泥川のだらすけ 澄ぬだらすけどろがはたけのいがい苦界が癪
の淵

西京耳塚大仏くづれもん 壁にみゝづか油断も隙間もれちや此首尾
くづれもん

同加茂糺 よそてうはきをしたかもしれぬたゞすもおまへの心から
撰津伊丹名物こぼれ梅 癪のいたみを押へる手先じつと笑顔がこぼ
れうめ

西京真葛れが原 そよく恋風身に染されて憎やまくづがはらゑぐり
(三十九才)

大和金剛山当麻越 それからふつゝりこんがうせんで文の便りをた
へまごし

浪花夕日の丘家隆塚 手先をしつかりうつかまへられて顔は上気の
ゆふひやま

西京四条河原夕すゞみ まゝのかはらで主や捨置て逢ば気休めゆふ

すゞみ

大和信貴百足山 好なお客を取られたむかで引にひかれぬ今のしぎ
山城男山石清水 ほんに悪性なあのをとこやまいつもうらみをいは
しみづ(四十才)

大和月が瀬梅花 笑ひ顔して嘘つきがせよ小袖にうつり香するはい
な

大和吉野山一目千本 ひとめにせんぼん花置さふでうけ込むよしの
ゝやまと客

西京龍安寺鴛鴦 しばし逢ねばをしもの思ひ切はせぬかとりやうあ
んじ

〔新咲都々一〕四季明治の花 終(四十ウ)

明治十六年三月十九日出版御届

全 年四月 刻成

編輯人 大坂府平民

沢田道太郎

東区北久宝寺町通

三丁目二十六番地

出版人 全

前川源七郎

東区北久宝寺町通

四丁目三十九番地

(広告)(奥付)

本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」
で公開されている。

四十『をもしろはうた(開化)都々一』

明治十六年四月十六日御届。吉川伊之吉編。請求番号：特 60-21。

明治十六年新板

をもしろはうた

〔開化〕都々一

はん元 塵積堂(見返し)

すがたみせねどやさしい声で人をまよはずほととぎす

(本てうしはうた) ゆきのよのつめたさにアレ小ざしき二人りづれ

たがひにぢらすあいことばほつれかゝりしあらいがみエ、モじれつ

たいかみやうじ(一才)

早く籍をば送せきなしてぬしの妻だといわれたい

(本てうしはうた) 梅がぬしなら柳がわたしなかのよひのかすねる

のかあるよひそかに山の月こゝろないぞへさよあらし(一ウ)

きざなやらうと小いきな人をこゝろの屏風でたてわける

(本てうしはうた) 川かぜをいたふすだれをはねあげて思わず見合

顔とかほわがつまどりのエ、エ、しんきなみやこどり(二才)

おもひたへかね文力キクケコどうか首尾してアイウエオ

これで死んだら腑分をねがひ恋のやまひをなをしたい(二ウ)

思ふやうにはそれはれぬ二人り死んでも未来が気にかゝる

(二上りはうた) すみとすゞりにこゝろをこめてまことあかせどそ

れとはしらずしんきしんくで夜をあかす(三才)

(本てうしはうた) 一夜あくればまた気もはれてはるのあそびもに

ぎやかにまりやはご板ふく引のうらじろねまつやぶかうじぬしのこ

げんと松かざり

立ちやいけないマアよこに寝てはゝのはなしをきゝなんし(三ウ)

蚊帳の籠城まくらの皆君のしん撃待ている

(本てうしはうた) しつぽりとふゆをたのしむたま子ぎはだとは

だとをぬくめ鳥おしのふすまのしき?のどこに?をつもる夜の雪と

けてうれしき朝の月(四才)

ぬしのこゝろのくさらぬさきにつけておきたやアルコール

(本てうしはうた) しのゝめに向ふ見わたす袖ヶ浦沖にふぜいのか

ゝり舟すさきのはなが見ゆるぞへあれしほがひる汐干ぶねやよひの

くせのくもりがち(四ウ)

海山こへてもたよりはできるきれちやいやだよでんしん機

(二上りはうた) 秋の七草むしのねにのこるほたるが身をこがすき

みをまつむしく音にほそる恋といふじがたいせつじや」(五才)
ぬしは金性わたしは木性木がねくらうは身のかく」

(三下りはうた) わしが思ひは三国一のふじのみやまのしら雪つもりやす?ともとけはせぬは名たつかやたつかやうき名今はうき名のためのもうれし人のこゝろはあいえんきえんいつせつからだも?になつたわいな」(五才)

(本てうしはうた) しのぶこいぢはさてはかなさよこんどあふよはいのちがけよごす涙のおしろいもそのかほかくすむりなさけ

きつとざい升だましちやいやよなぞとだましてかげで舌」(六才)
二人り寝る夜は玉子のやうだわたりや白みできみをだく

(三下りはうた) 夜ざくらやうかればがらすがうろると花のこかげにたれやらとまつわいなめぶき柳の風にもまれてるわいな、ふうわりふうわりとヲ、サそうじやいなそつじやわいな」(六才)

(本てうしはうた) はるばると姉をたづねて来るしのぶにかいへしので名のりあふ見るもむねさへいつばいな田舎ことばじやないかない

開化したとはたゞおもて向胸はひらけぬ恋のぐち」(七才)

(本てうしはうた) はざくらやまどをあければ山ほとゝぎすまたもなくかとまつ内にかつほかつほおやいさみだととんででるうわきせうではないかいな

あつぱれ立派ななまづをおさへでかした猫だといわれたい」(七才)
(はうた) アレ見やしやんせこのふるにぬれて町々御巡行コレモ人

民ほこの為

花にたんざくかけたるなぞはとけぬ心を結つける」(八才)
(はうた) そつときて這入ればしんに人のかげもしやとむねをさすりつゝ又のぞきけり月のかげ見れば木かげにぬしのかほ

背中合や又はら合せしはときろんの新聞紙」(八才)

ともに死なふとかくこはしたが命ありやこそすへもある
(本てうしはうた) 秋の夜ながにぬしにあふ夜のみじかさば月よからすがなくわいなつきじやごんせぬしらとあけのかね」(九才)
吸つけたばこについだまされておのが世帯を烟にする

(本てうしはうた) むつとしてかへれば門の青柳のくもりしむねを

はるさめにまたはれてゆく月のかげならばおぼろにして見たや」(九才)

ふけばきしるしふかねばゆるいほんにぬれ手へこのゆびわ
(本てうしはうた) おきて見つ寝てみつまでどたよりなし蚊やのひるさにたゞひとりかやりの火よりむねの火のもゆる思ひをさつしやんせ」(十才)

うそとまことは仕うちでしれるかくすおまの気がしれぬ
(本てうしはうた) 身は一りんは二り三りまたのながれによどむうた瀧の君にあふ夜のかじまくらあかつき方のくものおびなくか中洲

のほとゝぎす」(十才)

そんな其様な言はけしらぬわたした写真がきしや文
(はうた) 世にかほるう?なまふけの軒の棲花?の家の風吹き伝へては今更に引にひかれぬえんのはし」(十一才)

(はうた) つきあかりみればおぼろのふねのうちいきな二上りつめびきもしのびあふよのしゆびのまつ
芝居見たくもまゝにはならぬ」(清元) かたいやしきの御ほう公あ

のをく様のおつかいが」たまに出た時見る新聞屋」(十一才)

義理をかいても斯なるからはあくまで女房にせにやならぬ
(本てうしはうた) 春はひとしほおもわせぶりなはなくもり角田のつゝみの桜木をあれはるかぜのつらにくやさかりの花はちらちらと

浅くさ寺のいり合に返りともなや夕げしき」(十二才)
(本てうしはうた) あだしのつゆのなさにすゝむしのまちあかしては今さらになくになかれぬものをもひ

きたたお人の写しんを見つめふさぐこゝろがはづかしい」(十二才)

明治十六年四月十六日御届
編輯兼出版人 本?町?町目十四番地
吉川伊之吉

定価四銭」(奥付)

本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

四十一 『小づら山都々逸百首』

明治十六年九月十一日御届。活版本。春雨亭三眠（窪田重平）著。
請求番号：特 60.435。〔 〕内は角書。清濁はそのまま。振り仮名
は特別なものを除き省略。

〔春雨亭／三眠著〕小づら山都々逸百首／知新堂出版（表紙）
小倉山轟々逸百首序

物の名も所るによりてかはりけり難波のよしこの東まの都都一名は
かはりてもしらざるものなくうたはざる所るもなしそもそもうたは
雅俗ともに長短あれど長歌はしばらくおいて短歌の第一等は三十一
文字にして位も最も高ければ芋喰つて屁こく雲の下人には其意嗅
ぎつけがたく百敷は股引と思ひ誤まり足引は趁跛と合点するものな
きにあらず夫より何等下るか五文字減（ひ）くうして八雲立何時（い
つも）磨ることな（序一オ）く或ひは尻とり頭まづけさわり文
句もした紐のいと解易きは都々一なりそこで其流行と解り易すきと
よりおもひついたりとて一日（あるひ）三眠子此の小冊を携さひ来
りて如何（どうだ）といふ予概略通読（ざあーつ）と見るに作（で
き）の巧（よ）し拙（あし）はマツ棚へあげおき矢鱈闇雲冒頭（し
やつぶ）ばかりを取り冠（か）ぶせたる小倉都々の類にあらず名
もかはり品もかはれど本歌の意を誤やまらざるを旨（む）ねとした
れば鼻肩口よりいふときは俗より雅に入る捷徑（ちかみち）卑（ひ
き）きより高きに登ぼる楷梯といふもチト仰山なれど棚の達摩さん
を（序一ウ）チヨイとおろす児女（こむすめ）が踏台とでもなる
ならばそれから次第（だんだん）進歩（のびあがり）不知文字の権
助も小倉の山の峰の月さやかに悟も開くべしと口唐（くちから）出
鱈目こじつくるは猶（やつぱり）書肆（ふみや）と同じ狐の穴賢々
々
明けく治る御代くめど尽せぬ葵の末の年独酌もあきのなかば楓下に
しるす
十八軒主人（序二オ）

一夕話二云遍昭在俗の時良峰宗貞といふ世にすぐれたる美男にして
ある年正月五条わたりにて雨のふり出ければ暫し雨やとりせんとて
荒たる家の軒にたゝすみ奥の方を見るに人の影見へねは門の内に入
てみれば軒に梅の咲たるに鶯も鳴居たり破れたみすの内にはうるはし
き女の見ゆるか
よもきをいて荒たる宿を鶯の人くと鳴や誰とかまたん

とひとり言に吟したれば宗貞これをきゝ心うかれて

来たれとも（序二ウ）いひし馴ねは鶯の君につけよとをしくてそ
鳴

と声うるはしう吟し返せば彼の女驚けるけしきにてはつかしきさま
見へたる事よと物をもいはず内に入たる云々

女の哥の心を都々一
鶯の誰を待とて荒たる宿の梅に人??鳴やらん
宗貞の哥の心を都々逸

来ては居たれといひ出しかねりや粋な鶯す音すれる（序三オ）
自序

此頃童べが傍らにて百人一首を讀るを聞が中にフト心に浮みけるま
ゝ一首の歌の心と詞を取て試みに都々逸とはなしぬそれより思ひ起
し一ツ一ツものしけるも秀句の長くして意の狭きあり意の広くて一
句に眼目を持せしあり一ツも疎かならぬ歌を疎かなる智恵もて約め
しものゆへ心詞の調へるは雨夜の星の稀にもなければど鶯の片言も
聞所あり初蛙の声調ぬも流石に哀れなりと御覽（みそなは）さんこ
とを希ふ 著者百拜（序三ウ）
小倉山都々逸百首

春雨亭三眠著
天智天皇

苦のすきもる夜露にぬれて秋の田守をする苦勞
持統天皇

夏が来たやら香ぐ山あたりしるい着物がほしてある
柿本人麿

ながながしい夜をまつかひもなく（一オ）このまゝ独り寝するこ
とが

山辺赤人
田子の浦から富士がね見ればかさねかさねにつもるゆき
猿丸大夫
もみぢふみわけ妻恋ふ鹿の声もかなしき秋のくれ
中納言家持
橋におく霜しるぎを見れば「(一ウ)よるのふけたをしるわいな
安倍仲磨
古郷隔てゝ他国のそらにおなじみかさの月を見る
喜撰法師
わしが住居(すまゐ)は都のたつみつき世遁るゝつぢの山
小野小町
思案なかばへ降る春雨に「(二オ)いつかつつろふ花の色
蝉丸
しるもしらぬもあふ坂なればゆくもかへるもこゝろせき
参議堂
島々をかけて波路を漕ぎ出だせしと蟹の釣舟おとづれよ
僧正遍昭
雲の通ひ路天(そら)「(ふく風に)「(二ウ)とちでこ女をとゞめたい
陽成院
我恋は筑波の峯より流るゝ水よつもりつもりて淵となる
河原左大臣
われも誰ゆゑそちあるゆゑにみだれそめしぞしのぶずり
光孝天皇
君のためなら雪降る野辺に「(三オ)わかなつむのもいとやせぬ
中納言行平
起(たつ)てわかれりやいなばのやまのまつと聞ても帰りたい
在原業平朝臣
神代にきかない龍田の川でからくれなひにてくゝるみつ
藤原敏行朝臣
住の江のきしの波ほどこゝろをよせて「(三ウ)夢さへ人めをよけ
て見る
伊勢

難波渦みじかい蘆かやそのふしのまもあはで此世を過すのか
元良親王
わびていつまで難波の浦よ身を尽してもあふこゝろ
素性法師
今に来るかこの長き夜を「(四オ)月ともまぢあかす
文屋康秀
なさけなく秋の草木を吹山風をそれであらしといふかいな
大江千里
月を見るさへかなしいものよ我身ばかりの秋じやない
菅家
ぬさのかわりにもみぢのにしき「(四ウ)こゝろばかりの手向山
三条右大臣
名にしあふみの逢坂山のかつらしるべにくればよい
貞信公
こゝろあるなら小くらのもみぢまたのみゆきを此まゝに
中納言兼輔
いづみ河しらでかやうに恋しきものか「(五オ)せてひとめもみ
かの原
源宗干朝臣
冬の山里淋しさまさる草も人めもないゆへに
凡河内躬恒
こゝろあてにおればをらるゝ白菊なれどいろをまどはす初の霜
壬生忠岑
つれなく別れしうき暁きを「(五ウ)有明月までしらぬ顔
坂上是則
有明の月の影かと見るあけがたによしのゝ里にはつもる雪
春道列樹
山河に風がかけたかそりやしがらみよちらしたもみぢをまたとめる
紀友則
天(そら)「会のどけきこの春の日に「(六オ)なにをめでてにちる
さくら
藤原興風

高砂の松もむかしの友ではなかる老いてなじみもない我身
紀貫之

古郷の人のこゝろはわしやしらねども花はむかしの香に匂ふ

清原深養父

夏の夜は宵と思ひし間もなく明けて「(六ウ) 月はいつこに雲のや
ど

文屋朝康

しら露に風のふきしく秋の野見ればつなぎとめない玉ぞちる

右近

すてられし身をば思わすちかひし人の罰(ばち)のあたるをあんじ
られ

参議等

をのゝしの原しのぶとすれど「(七オ) あまり恋しさをたへられぬ

平兼盛

なにを思ふと人とふまでにしのぶ恋路がいろに出る

壬生忠見

人しれず思ひ初にしわたしの恋がいつか世間に浮名たつ

清原元輔

末の松山かはらじものと「(七ウ) 誓ひし言葉に波もこす

中納言敦忠

逢みての後のおもひにくらべて見ればあわぬむかしはさほどにも

中納言朝忠

たへて逢ひたいこゝろがなくなれば人も我身も恨むまじ

謙徳公

いと恋しといふ人もなく「(八オ) このまゝこがれてしぬるのか

曾根好忠

由良の迫門(せと)わたるかじさへもふをれはてゝ行衛もしらない

我恋路

恵慶法師

茂る艸葉の淋しきやどに人は見へねど秋は来る

源重之

風にさそわれ岩つつなみの「(八ウ) ちゞにくたくるわが思ひ

大中臣能宣朝臣

衛士のたく火とわたしの胸はひるは消へつゝよるはもえ

藤原義孝

命ちにかへても逢たひおもひあへば千代までそふ心

藤原実方朝臣

明けてそれともいふきのもぐさ「(九オ) もゆる思ひをしらぬ人

藤原道信朝臣

あけりやくるゝと承知で居ても朝のわかれがうらめしい

右大将道綱母

明ける門さへまたるゝものをひとり寝る夜のそのながさ

儀同三司母

忘れじとちかひし心のかわらぬうちに「(九ウ) しぬるかゞこで居

るわいな

大納言公任

水煮はなれし古滝なれど音は絶ても名をながす

和泉式部

こがれてしぬなら今一度はあふてあの世の思ひ出に

紫式部

もしやそれかと思わかぬうちに「(十オ) 雲かくれする夜半の月

大式三位

猪名の篠原そよふく風のおとづれないほどわすられぬ

赤染衛門

とけて寝られずまつ夜はふけてかたふく月をばひとり見る

小式部内侍

大江山かけて幾野の道遠ければ「(十ウ) あまのはしだてふみも見

ぬ

伊勢大輔

いにしへの奈良の都にさく八重桜けふ九重までにほひます

清少納言

もろこしの関はこえても我逢坂はとりのそらねじやゆるしやせぬ

左京大夫道雅

思ひたへしと人伝ならで「(十一オ) つげる手術(てだて)のない

ものか

権中納言定頼

明けかたに宇治の川霧まだらにはれて瀬々のあじろ木人目だつ
相模

うらみの袖さへかわかぬうちにくちはつる名も恋ゆえぞ

大僧正行尊

ともにあわれと深山のさくら(十一ウ)人はしるまい花ばかり

周防内侍

春のみじか夜見し手枕の甲斐なき夢にもうきなたつ

三条院

のぞみなきよになからへし軀(み)も恋しい今宵の月の顔

能因法師

嵐ふくたびきをもみぢ葉よ(十二オ)うき名たつたにちるにしき

良暹法師

やどばかりかとあちこち見ればいづこも淋しい秋のくれ

大納言経信

ゆふくれに門の稲葉をそよ音づれて蘆やに吹入る秋のかげ

祐子内親王家紀伊

あだなことをばを聞くその果ては(十二ウ)うらみなきすることもある

権中納言匡房

山の尾上にさかりのさくら外から霞のたぬやう

源俊頼朝臣

なびくやうにと初瀬へいのりあまりはげしき山おろし

藤原基俊

露の恵みを命にかけて(十三オ)まちし今年の秋もすぐ

法性寺入道前関白太政大臣

はてもなき海の面にたつ白浪が雲井とひとつに見ゆるそへ

崇徳院

岩にせかれてわかるゝ水も末はひとつになるものを

源兼昌

かよふ千鳥の声きくさへも(十三ウ)寝ざめの淋しき須磨の関

左京大夫顕輔

秋風になかをたれしその雲間よりもるゝ今宵のさへた月

待賢門院堀河

ながれとむすびし黒髪みだれて今朝はいとゞ思ひのますかゞみ

後徳大寺左大臣

時鳥たしか鳴たとあたりを見れば(十四オ)有明月のみめにかゝ

道因法師

おもひわびても恋死にもせずこぼれやすさよわが涙だ

皇太后宮大夫俊成

まゝならぬ世をばのがるゝこの山奥にまたもかなしき鹿の声

藤原清輔朝臣

うしと思ひし世をながらへて(十四ウ)今は昔がなつかしさ

俊恵法師

闇のすきまをうらみるまでに物思ひする夜のながさ

西行法師

うるむ涙だをかこつけかほにわれからかなしい月を見る

寂蓮法師

むらさめにぬるゝ槇の葉まだひぬものを(十五オ)秋にあわれを

そゆる霧

皇嘉門院別当

浪花江の蘆の刈根にひとよの契りわすれまいぞへ身をつくし

式子内親王

しのぶこゝろのよわらぬうちにたゆる命はたへよかし

殷富門院大輔

ぬれぬれし蜚の袖だにかはらぬものを(十五ウ)ぬしに見せたい

血の涙

後京極摂政前太政大臣

秋の夜さむにまるねをすればしのび音に鳴きりぎりす

二条院讃岐

人こそしるまいわたしの袖はかまくまもなき沖の石

鎌倉右大臣

世の中の風もなぎさにこく蟹舟の「(十六才) 綱をひくのゝおもし
るさ

参議雅経

みよしのゝ山の秋風ふるさと寒くふけて哀れにきく擣衣(きぬた)

前大僧正慈円

世の人のいのりのためとてわがたつ袖にすみの衣に身をやつす

入道前太政大臣

花さそふ庭のあらしの雪にはあらで「(十六ウ) ふり行く我身につ

もるとし

権中納言定家

人をまつほの浦ゆふなぎに藻塩やく火の身をこがす

従二位家隆

夕くれに櫓の小河に涼風たてど夏のしるしかみそぎする

後鳥羽院

人をおしくもまだうらめしく「(十七才) あだに浮世や身をおもふ

順徳院

古き軒端に世をしのぶにもあまるむかしが恋しさよ

明治十六年九月十一日御届

同 年九月三十日出版(定価金十銭)

著述兼出版人 長野県平民

窪田重平

松本南深志町三百六番地

発売元

大売捌書肆

慶林堂 青雲堂
水琴堂 精華堂

一〇飯田

本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」
で公開されている。

四十二 『粹の大蔵書』

明治十六年十二月十六日御届。前田喜治郎編・泥水情史校閲。請求
番号：特66-291。

泥水情史校閲

粹の大蔵書 上ノ巻

大坂 綿喜「(表紙)

よしこの

宵はうれしくきく鐘の音が今はつらさの明の鐘

おもひだすほどわするゝひまがなくてしばしもくがたへぬ

すぎしひとことまだみゝそこに「(三ノ十) あつて夜」ことのゆめに
まで

おもひ切たといふひとがどうかみれんの残ぐさ

哥のもんくがふと氣に当りうたいながらもふさぎだす

ゆすりおこされこちらをむけどいやな嵐にすねた萩

をまへのしんじつそりやうかなどといふたも心が探りたさ

こゝろならぬよあの家形ぶぬぬしにたふりにたるこへ

遠ざかるのも浮名をふせぐ「(三ノ十一) 一ツは身の為ぬしの為

ひよんなどこからくもりがでてぬれにやならぬよ夕だちに

猫やきつねがうきよになけりやコン、ニヤンくろうはせぬわいな

おもひがけなくみあわす顔をけむりにしてゆく汽車の窓

腹も立まいたゝせもせまい四海兄弟自由の権

恋の議院を出雲へたてゝいろの会議がしてほしい

松といふ字はすかるゝはずよ「(三ノ十二) 公と木のさしむかい

金の時計が目あてじやものを衿につくのはしれたこと

印紙はつたる私しがからだ二重抵当にやなりはせぬ

鼠あなより女猫の穴がくらのためには不用心

ぬしは原告私しは被告まわす屏風が書記くわんり

丸くしたるは私しのつまみぬけめないぞへ新銅貨

もしやそれかと門の戸あけて「(三ノ十三) みればにげだすたんぼ

うし屋

猫は魔のものおどつて舞てすへは高位の二等親

ならば検査のお医しやにみせてむねのうちまで知らせたい
私しのしんじつこのかん札におまへとそふなとしづのとし
海山こへてもかわらぬこゝろ切ちやいやだよでんしんき
娼妓(じよらう)のまこともうそとはいへぬひらけりや三十日に月
がでる

むねの蒸気のツイもへすぎて(三ノ十四) いろで航海するわいな
起証せいしへ印紙をはつてすへにまちがや訴訟する

束縛されよとかうなりやまゝ男を掠奪したとがに

アレサおまちよがらすですけるたゞさへ人目がおゝいのに

わかれともないそのおもさきへヒューウーと蒸気の笛がなる

明けの鐘の音きゝたくないが権(ごん)となるとはたのましい

これからさわり入の部(三ノ十五)

ふつと逢ふたが私しのつよみ(賢女かゞみ八) 三千たかに尋ね

ても又とあるまい殿ごぶり目にちらちらとかたどきも忘るゝまなき

三つらさま」いつそせつないむねのうち

すへのくろうもみなうちわすれ(廿四孝二) お主さまともご主人

ともわさまへしらぬつたなひ筆に心のたけを岩本の神のむすぶのを

なさけにうれしひ枕かわしたとき(三ノ十六) こゝろはづかしこ

のすがた

人いやいわれずおもひのたけを(鳴戸) めつとのまことを天道

もあわれみあつて国次のかたなのせんぎすむまではをつとのいのち

たすけてたべと」神やほとけにひらたのみ

日頃おもひのうらみもいまは(忠九) むすめこゝへと叫いだせ

ば谷の戸あけてうぐひすのむめみつけたるほゝえがほまぶかにきた

るぼうしの内ア(三ノ十七) ノ力弥さんのおやしきはもふこゝか

へわしやはづかしいと」いふにいわれぬそでのうち

こがれなみだにまたふさぎかけ(ひらかな三) つまかふ鹿のは

てならでなんぎすゞりのうみ山とくるうするすみうきことをかづか

くお筆が身のゆくへるつまではてじなにはがた」すへはどふなるり

ことじややら

まかすからにはこのたましいをぬしのうはきにぬれかへて(三ノ

十八)

命あつてのふたりが中にすてゝそはりやうはづがけない
むりなねがひも縁さへとげてすてるいのちもおしくなる
ちゞまるほどにもくをした主にそへばながいきしたくなる
偽りにいふたがまことゝなつてまこといふたがあだとなる
むりにいぬきは外ではないがさきへこゝろがまわりみち
酒でわすれてまたはこではおもひだしてはひとりごと(三ノ十九)

つわき男におなごのみちをとひて誠がきかしたい

親のいけんとおまへのじつに明暮をもわんことはなぬ(三ノ廿)

明治十六年十二月十六日出版御届

定価金十五銭

編輯兼出版人 大阪府平民

前田喜治郎

府下難波邨

発兌 大阪心齋橋しほ町角

綿喜

同平野町心齋橋西へ入

支店(奥付)

泥水情史校閲

粹の大蔵書 中の巻

大坂 綿喜(表紙)

よしこの

ちよつと手水におりさいわいと二人がそれたるなにかき

からだかざつて出るお客には舌のさきまでけしよする

わかれにうれしひ一トこときいてのちの首尾ねんおしわすれ

ざこねの用心このよい中のかきに舞子をいれておく

またばけて出たアノふるためき目をむいたよな若づくり(百十五)

きれてからでもツイ無事なかとせわしてもるふた人にとふ

今宵はとめずにかへしますといゝつゝはなしを引のばす

客にもろふたつめたいお金ぬくふして出す人がすき

どきどきするよなあぶない首尾はうきうきするほどおもしろい

客に金ありしんせつもあり間夫にや銭なしじつもなし

寝てゝたばこをのむそぶりしてあんどけしてゐるながきせる」(百十六)

またの逢ふせがもふきにかゝるむりに首尾した今よいから
いろにきやうなおまへのゆびはうづがまふてる二ほんだけ
疵はこゝろと齒でなでてみるゆうべかまれた舌のさき

もたれさんせと三味せん箱をきらひなお客のかきにする

あとからもじもじいゝけしているたきつけられたときがついて
逢へばたがいにしてこと計りあわにや二夕人が死ぬものに」(百十七)

梅もさくらもきれいなけれどわたしや山吹いるがすき

おたのしみだとせ中をうたれうれしいどつきがむねに打
万事もの事いたらぬ私し実の外にはないとり多

どうしてこんななそわれぬやらとぐちでみている三世相

ひぎにもたれてたばこをつけて一寸いつぶく吸な味

うそとしりつゝそのやさしさに乗てくやしい口車」(百十八)

恋のおもにを主しやもちかねてかたかへ心でするうはき

仲間でわらわれせけんいきがぬぬしにやぶそくの店おろし

粹をかかしてばらつき雨が相乗車へきせる母衣

人とは反対梅松さくらよりもシヘイがわたしやすき

たれたをよしと後をむけばかきが袖ひくまがりかど

まわるせかいを今夜(こよい)はとめてはなしのあり切してみたい」

(百十九)

宵にみたときやさうでもないがあいそがつきたよこの寝ぞう

葉書手にとり八テふしぎなとそのばをまぎらす親のまへ

かたい娘がはこいりならばずい娘はかはづゝみ

なぎしでよばれてざしきへでればヲヤマアいやだよ検査医者

色よいへんじをきかしておくれとゆうびんはがきをそへてやる

店へもしらすづ岩ぬいらしい来る事さとしてしりすはす」(百廿)

さわりよしこの

あさのわかれにひぎすりよせて」(なると)ま一ど顔とひきよせて
みればみるほどむねせまりはなれがたなきつき思」のちのあふせの
ねんをおす

むねに手おおきしあんをすれば」(三勝酒や)わしといふものない
ならばしうとごさんもおつうにめんじ子までなしたる三かつどのと
くにもよびいれさゝんしたら半七さんのみもちもなをり御かんど
もあるまいに」(百廿一)といふていまさらどぶなるか

やつぱりうはきは主しやまぬのか」(千本すしや)みやこでおわか
れ申てよりすまや八島のいくさをあんじ一門のこらずうち死ときく
かなしさはさがの奥ないてばつかりくらせしに高野とやらんにおわ
するといふものゝありしゆへ小金吾めしつれおゆくへおたつねだす
みち追手にであい」すいりよさゝんせわしがきを

のけば長者といわんすにくさ」(質みせ)アレあのやまがやのよめ
をみよかあいそふに久松が思ひつめて死んだの」(百廿二)おみす
てすぐによめ入は大身代のやうまがやでゑよふがしたさじやみなよ
くじやあつかわづらな女子じやと大阪中でゆびさゝれわらはれて」
そふてくるふがしとけたい

どふぞいゝたいふそくもあるが」(ぬまづ)こよひの事はこのばぎ
りおとしよられたおまへに迄くるうをかけしぶごうのつみ」ま一ど
こらへてくださんせ

いひそゝくくはつてはツイ夜をふかし」(円覚寺)心一ツにとつおいつ
いふてうらみうらんで一人あかするよあけの鳥か」(百廿三)わ
ひわひと鳥さへも」またもほいない別れする

おもはずうれしくひきよせられ」(千両のぼり)うつしてみたきか
ゝみたてうつせばうつるかをとかほ」こんなにやせたはたれがわざ
みれんながらもまた右や左と」(八陣)みやこでおわかれ申てより

もつたない事ながらとゝさまや母さまをおもふあんじはどこへや
らあなたの事がくになつてほんにねたよも忘かね」あんじすごして
みはやつれ」(百廿四)

これほどあかせどまだかくさんす」(いもせ山)たかひもひくいも
姫御前の夫といふはたつた一人けがらしい玉のこし」きくもいや
だよきやすめは

おもひやりして又すがりつき」(忠七)勘平どののは三十になるやな
らづにしめるのはさぞかなしがるあひたかつたであるふのになぜ
あわして下さんせぬ」エゝモきこへぬこと計り

ふみにいるはの心をこめて「(壬生村)」「(百廿五) いやといふたら
とゝさんのためにならぬがかなしさにうられてゆくはゆくけれども
かならずあんじておくれなへ」「うそじゃないかとわざといふ」(百
廿六)

詩入よしこの「(百卅五)

いとゞかなしひこのゆうぐれを「北風吹白雲。万里渡河汾。心緒逢
揺落。秋声不可聞」にくや身にそふあきのかぜ「(百卅六)

どふしたゑんやらおまへとわたし「湖水還帰海。流人却到呉。相逢
問愁苦淚尽日南珠」いくそのしんくをするじややら「(百卅七)

こうしてうちとけそひ寝をすれば「綿綿漏鼓洛陽城客舍平居絶送迎
逢君買酒因成醉醉後焉知世上情」ぐちもくぜつも夢のうち「(百卅

八)

おもわずみとれて気もうつゝだよ「冷絶全欺雪。余香乍入衣。春風
且莫定。吹向玉階飛」よその花とはしりつゝも「(百卅九)

ふける夜かぞへて寝かほをみつめ「月落烏啼霜滿天江楓漁火对愁眠
姑蘇城外寒山寺夜半鐘声到客船」わかれちがさになみだぐみ「(百

四十)

やう気うはきでくらせる春も「紅粉青娥映楚雲桃花馬上石榴裙羅敷
独向東方去謾学他家作使君」逢れにやいつでもふさぎづめ「(百四

十一)

はれた月かげまたさよざよと「牀前看月光疑是地上霜拳頭望山月低
頭思故郷」見てはおもひにくもるむね「(百四十二)

たよりすくなひ身につまされて「去国三巴遠登樓万里春傷心江上客
不是故郷人」沖のふねさへなつかしく「(百四十三)

明治十六年十二月十六日出版御届

明治十七年二月出版

代価金十五銭

大阪府平民編輯兼出版人

前田喜治郎

府下難波邨千四百四十九番地

大阪心齋橋塩町角

発兌

綿喜

同平野町心齋橋西へ入

支店「(奥付)」

校閲泥水情史

粹の大蔵書 下ノ巻

大阪 綿喜「(表紙)」

「よしこのつじうら」ひとりはんだん

うんき ねがひ事

男女愛情 まち人

ゑんだん ゆめ見

夫婦相性

吾が心中に思ふ事を占わんとするときはまづ一より十までの札をよ

よくまぜかやしてならべ吾思ふことまち人なれば高倉様の方をむい

て一心にをがみその中のふだを一枚くらどりにして「(一) 其とり

たる札二なればこの本の中にあるまち人のなかの二のしるしある下

のよしこのではんだんができること妙なりそのほかもみなおなじ

うんき

一くるう心のちやうしの駒がのちの苦勞を引いだす

二ようならぬとはあきらめいれど猶も悪なる私が運

三苦勞したかひよふよふ今度みたよゑびすの笑顔

四よるべ定めぬ身は浮人形「(二) かせにまかしている計り

五つらい中にもしんぼうすれば亦もよくなる事が有

六今の思ひおむかしのことにするは一人が働きに

七身を粉にきざんだ苦勞お仕遂今は氣樂のさし向ひ

八なくも笑ふも苦勞も樂もみんな心のをきどころ

九する事なすこと皆俣ならぬといふてのらつくかい性無

十いまの安樂昔しの苦勞どをぞ忘れずいつ迄も「(三)

ねがひ事

一俣にならぬが浮世の常として居ながら俣ならぬ

二はよう苦界の三すじをやめて思ふ一筋とげるよふ

三女にふられる金銭はきれる寝ると蚊めが亦責る

四うわ気しとげて苦勞をしとげりん気仕遂て添遂た

五 およばぬ事とは思ふて居れど猶もみれんで神頼み
六 ゆづべの夢見がまよひの種よ(四)今は一人が身のつまり
七 どうせ及ばぬ願ひじやなどいふうちや思がまだ浅い
八 ほんに二人はなぜ此よふに苦勞問屋をするつらさ
九 人の出世はしれないものよあんな人にもあんな事
十 きたない奴じやといわれよと俣よボロノ仕上も西洋紙
男女愛情おもひ

一 烏みたよな権平客に三度に一度は義理で出る(五)
二 ふさぐ顔いろ見てとる実は他人でわからぬほれた中
三 うるさい人じやと横目でみれば先はほれたと思やがる
四 あんどかき立寝顔見ればよその女もほれるはず
五 山の奥じやて谷底じやとて二人連ならいとやせぬ
六 しやくし顔でも飯よりすきななさけ所の盛のよさ
七 糸んを結びのわしや神さんへむりな願ひの朝まいり(六)
八 おちかづきにとさす盃が色になるとはしらなんだ
九 いけんぐらいで思ひがやめばおちる入日をよび戻す
十 命にでもと契つた人に帯やきものをころされた
まぢ人

一 あふて嬉しやその日の内にわずか葉書がとりもちで
二 すゝみながらも待身もしらずぬしが出てこぬ風までも
三 まてどおまへのこぬ夜のとは(七)ほんにしんきな事計り
四 ちりが積つた枕の山に鶴くびのばした主がきた
五 主と逢ずに寝夜は窓をたゞく嵐も気にかゝる
六 もしやもしやとさびしき寝やに君を待風音ばかり
七 待てはら立顔見てわらひ後はなきだす寝やのうち
八 ぬしの来るのを待夜にかざりとほけ鳥のあほう啼
九 きつとですよと約束したる(八)主しが出て来て気はそゞろ
十月は臙にまつ夜はふけて雁は啼のに主しはこぬ
ゑんだん
一 ふみも心も届いて遂て今宵むすぶは二世のゑん
二 遊び半ぶんたきぞこなふた飯もうれしい新世帯
三 くににもするまいわずかな月日やが見さんせ宿の妻

四 いなさなならねば喜(つれ)しい明の鐘は添日をちかうする(九)
五 いがみながらも針持よふになつたも添たいいちすから
六 はれて夫婦にならぬなればはやく死たいもろとも
七 ふつとむすんだ糸にしの糸が今はもつれてこの苦勞
八 先も添たし私しも添気だれが邪魔する事じややら
九 他人目先ですげなくしたも添る縁じやと極てから
十 他人をにくむも添たい一つ可愛おまへはなほの事(十)
ゆめ見

一 思ひ余りて寝まきをかへし寝て見た夢から又ふさぐ
二 ほんにうれしい夢見た跡は元のつらさに返るとこ
三 夢にみじかい夏の夜あけてみれん残すはのみのあと
四 俣になるなら夕辺の夢の跡をひる寝で見たいもの
五 思ひこがれて心もそらにひるはまぼろし夜はゆめ
六 せめて夢にと思ふていれど(十一)さめりやなまなか見ぬがま
し

七 おきりやおもかけ目にちらちらと寝ては夢見の恋やつれ
八 ぬしのゆめ見てフトさめた目があわぬその夜の物あんじ
九 うれし初ゆめ主しより外にいふてきかせる人がない
十 あわぬ昔しとあきらながら夢見りやもしやと気がもめる
夫婦相性

一 うわきなお前は田毎の月よどれがまことの心やら(十二)
二 まことつくしたそのかいあつてくらしやうれしいぬしのそば
三 命すてゝも添ねばならぬ人にいわれた事がある
四 主しの水性うわきをすれば私しや火性で焼ばかり
五 うわべ計りに色みせかけてしんに身のない銚り海老
六 女房にいけんをしられるよふな人と世間でいわれぬよふ
七 いやでも別れぬ人さへ有になぜにわかれなならぬとは(十三)
八 主しがわしほど実あるなればこも苦勞はせぬものを
九 おやにかうかうせけんへぎりもかゝさず私しも見捨ぬよふ
十 われと我でにもとめた苦勞今さらうらみをいわれよか(十四)
さわり入よしこの
うたかふ心はみじんもないが(二十四孝)ゑこうせふとておすが

たを糸にはかゝしはせぬものをたましいかへすはんごんこう名？のちからもあるならばかわいとたつた一ことのおこゑがきゝたいきゝたいとゑぞぶの」どぶもまこととおもわれず」(廿四)

むすめ心のたゞ一すじに」(野崎村) あんまりあいたさなつかしきもつたない事ながら観音さまをかこつけてあひにきたやら南やら」きてみりやつれない事ばかり

おもふわたしにおもわぬおまへ」(朝顔宿屋) またもみやこをまよひいでいつかはくり逢阪のせきじをあとに近江路やみのおわりさへさだめなくこいしこいしに目をなきつぶしものゝあいるもみづどりのくがにさまよふかなしきは」いつかをまへに大井川」(廿五)

あいといわりよかそのにくてぐち」(白木屋) そりやきこへませぬさい三さんおまへとわたしがそのなかはきのふやけふの事かいなやしきにつとめたそのうちにふつとみそめてはづかしいこいのいろはをたもとから」にくらしひほどかわいなる

やぶれかぶれとみは三味せん」(安達三) おねがひ申たてまつるいまのうきみのはづかしさ父うへや母さまのおきにそむきしむくいて二世の夫にひきわかれなきつぶしたるめなしどり」くろうするはづおやのばち」(廿六)

人めしのでこひじのせきを」(新口村) それはつれしうござんせふさりながらわたしとゝさんかゝさんは京の六条珠数や町」こへてとうげのまたくろう

たまさか首尾してあふたるなかを」(三浦別の段) みじかいなつの一夜さにちうきのかける事もあるまいこれほどまでにつきしたふわたしとゝるおもひやつてもくれもせで」すねていさんすぎがにくい」(廿七)

わたしばかりかおまゑにまでも」(玉もの前) こんなうきめをみせまするもみなみづからがいたづらからとてもかなわぬこいゆへとかくこはきわめておりましたつゆちり御おんをおくりもせず」くろうさせたるみはくやし」(廿八)

「俳優名人」よしこの」(百廿七)

実川あかした此延若よ心汲気の八重井筒

そ右団治たならもふこの上はあふ夜まつ川ひしに鳶

ふたりが中村おもへもとげてこれから苦もなく末広や八百蔵万の神々様のちはやふるほどおもふ人

ひとへもふたへも顔三重角にツイに浮名は高しまや京やあすやと身を雀右衛門どうぞ病ひの出ぬ内に」(百廿八) 花に嵐か此立花に心伊丹やきつうなる

わしもやつぱり日本の多見蔵玉をみやこにとゞめおく中村あふたらアノ蝶々も花にたわむる時蔵あるあつい心はかさなりや帯をといてうたるゝ滝十郎ひくもひかるも此駒之助みんな綱もつ人がある

心底尽さば出雲の璃笑そこでおもいは立花や」(百廿九) わしの雁次郎にらんだ上はむりな咄しも成駒屋井筒けしたるに咄した事がちよふど延三の元となる

みんし裁判せらりよとまゝよこの恋叶へにやおきわせぬ高砂や此浦船までうたいし恋は百になるとてやみはせぬ葉村や散たり嵐もあれど春はきれいに梅の花

うれし噂を菊五郎さんの重ね扇をまちかぬる」(百卅〇) 市川にすんだ鰻ならにこりもなくてこしお折る迄そいとぐる心の通りに身を成田やで苦もなく暮せる団十郎

おとなしおすやアノ紀の国やどうで心は智恵の槌心正朝で気は実川とうまふ菜種にしたふ蝶

阪東にや来るとのやくそくしたがなんでお豊田ないのやらおもひ通りに成駒やとの芝翫違ひし身のつらさ」(百卅一)

一寸此処で口上これより画入二句の都々々」は此本の奥の広告にある幸町裏川四海亭の新普請の披露の印刷に当時日の出の朝日新聞社の先生続き物の名人と呼ばれたる雨の家狸遊氏が同亭より依頼されたる戯作の都々逸にて実に近頃の出来ものなれば粋の大蔵書に抜萃して我日本中の粋客さまへお報せのため記載すること爾り 前田竹窓しるす」(百卅二)

遊びの家移り余所から見ればまるで粋書の生人形これも世帯の稽古じやなどと襦をもつ手に水仕事」(百卅三) 明治十六年十二月十六日出版御届

同 十七年 五月十八日出版

定価十五銭
編輯出版人

大阪府平民

前田喜治郎

府下西成郡難波村

千四百四十九番地(百五十一)

本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

四十三 『浜千鳥諸芸の種本』

明治十七年二月六日御届。大沢栄吉編。請求番号：特43.262。

大沢栄吉？行

浜千鳥諸芸の種本(表紙)

諸芸の種本

大沢栄吉編輯

柳心堂板(見返し)

都々一之部

恋務省をば出雲へ立りや主はさしつめ卿の職(やく)

人力車と彼(あの)権妻は乗(のせ)て(コトバ)モシ旦那

アンテ(徐々(そろそろ)請求(ねだり)出(だす))

庭の千草が夜露に打れふくさばきの音が為(する)

来か来かと待身をやめておそい帰をあんじ鯛

おそい帰りを待身につけて留た昔を思ひ出す

人目忍んで送(や)るちわ文はいつか互ひの枕紙(十三ウ)

わかれがつらいと小声でいへばしめるはかたの帯がなく(下段)

都々一

電信に止る燕はありや二心どちの便を聞て有(ある)

切手張とは気に為(なる)言葉トハ故(いへ)端書にや猶書(かけ)ぬ

丸く世渡る御主の胸に抜目無ぞへ新貨幣

花は散ども香(にほひ)は残る人の鏡や梅の花

後からさせる羽織の襟先よりも帰(かへす)心は更に無(ない)」

(十四才)

死なですむなら解ほう願主に見せたや私(わし)が胸

浪の音聞が憂(いや)さに山家へ居(すめ)ば又松風の音計り

梅の香りについほだされて軒を通ふや春の風

ゆき丈揃ていつ添(そわれ)るか今ぢや下着のかくし妻

ストンと下る階子(はしご)の真中頃で辛抱しやんせと目に涙

字余り都々一

鳥渡(ちよいと)見りや無事な人で手から手を取て手と手と合せ

りやお前も泥水のんだすへ

京大坂東京三国の地に無(ない)たつた一人のお前を捨てどふマ

ア他国へ行かりやうか

四国は三州中の郡象頭山金比羅こんていそはか御前立には金山比

古の御尊

一度で済事二度も三度もしつこいちや無か恍惚(のろけ)ちや惚

たが(ホントニ)解りやせぬ

浅草の名物すとことんの念仏堂めつポウ高が五重の塔山の古茶

屋のこ茶店のこりはとぼよぶじ店飛たりはねたりはしけ豆(十

四ウ)

山で木を切や其木を薪にして薪をたいて炭にして炭をこにしてた

どんにしてしやなおきやくにだきねをされて頭をはられて灰となる

鳥渡見りや黒い物で中見りや真赤な物して見りやおもしろい物皆

様御好の花の札

意見しやんすな意見はよしなよ内を出りやモウわする豆腐にか

すがいぬかにくぎ戸板に豆だよつべこべ言だけむたな事

明の鐘ごとつきや鳥すが(カアカア)には鳥とつけこふ積りし

雪が真白で日の出が真赤ゆふべが過たか御前のお顔か真さをた

本町二丁目の金物屋へどろぼふがはいつて盗人(どろぼう)の鞆

丸家内つかんで金物屋でよかつたよ船宿なんぞのかみさんなればあ

はてゝさをでもつかむだる

しのばづの池の中には数年大蛇が住蛇そふ蛇がその大蛇が女蛇々か男蛇々かなん蛇かかん蛇かわからぬ蛇

床のまのかけ花活けを見るにつけてもあれ見やしやんせ(清元山姥)あやめ菖蒲やかき(十五才)つばた)根は切ても水さへまわせば花が咲

明神様の森の木影でおまへとわたしが出合をしたら神主さんが見付てコレコレ二人で何をすへい氏子をふやして居升るウンそんなら能神を麓末にせぬがよい

油樽に烏がポキポキ油樽に烏がポキポキ油樽に烏がポキポキ三ツ合せりや三油樽に三からす三ポキポキ

はま千鳥 終

明治十七年二月六日御届

同 十七年二月 出版

定価金八銭

編輯兼出版人 東京府平民

大沢栄吉

京橋区銀座四丁目三番地(十五ウ)

本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

四十四 『新奇妙案』 風流都々一』

明治十七年三月十四日御届。 稲垣良助編。 請求番号：特 60-25。

〔新奇妙案〕 風流都々一 稲垣良助編輯 全(表紙)

〔新奇妙案〕 風流都々一 全(見返し)

序にかえて

ふりつむや度どあつづけの雪の客

隅田園(一才)

月はてらてらまどからさすがどこにあるやらかたより

くものたへまをもれでる月にさへてきこへるかみはぬた(一ウ)アレみやしやんせ?かりがねもいとしかわひのめうとづれ月のでぬまにそとのばんせはれちやあはれぬことがある(二才)いつかいつかと人めをかねておもふばかりもこほんとしほれたおかたにまたほれられてこんなうれしいことはなひ(二ウ)いろけづいたよアノほうづきもいつのまにやらちぎられるにせとちかひしふたりがゑんのきれたゆめみてしやくとなる(三才)

くるわのさくらも見あきてはやくみたひおまへのりやうのきく

女房もちとはしつての事よほれるにかげんがなるものか(三ウ)

ほくにするきのせいしじやなひがやぶれかぶれの恋のいぢ

よくもおもはぬおとこだけれど人にとられちやはらがたつ(四才)

かたひわたしをうわきにさせてとうぎのはなとはあんまりな

ぬしのなさけでくになるとしのあけてうれしきはなのはる(四ウ)

とふざからせてしんぼうさせてすへにやひとつになるかく)

とふくはなれてゐるかなしさにうはきされてもせひがなひ(五才)

ほどもきりやうもすぐれたおまへほかにあなでもなけりやよひ

女ぼもちとはしつてのことよほれるにかげんがなるうかへ(五ウ)

はなはさくらとたれしもういへどぬしにますはなほかになひ

かつて見たひとこゝるをこめてきけばぬしあるやまざくら(六才)

ぬしの心と田ごとの月はどこへまことがうつるやら

ちわがこぶじてけんくわでかへしあとであんじるけさの雪(六ウ)

ていしゆがぢやんこでかゝアがどんでしとうどんちやん大さはぎ

手づるもとめておくりしふみが今じやうきなのひやうばんき(七才)

此雪にようきなましたとたがひにつもる思ひのふかさをさして見る

ゆきのふるよはみにしみじみとつもる思ひにぐちばかり(七ウ)

はやくくがいをめでたくかしくかへすがへすのないやうに

にくいしまつとふつふついいへどあへばかわゆくなるいんぐわ(八才)

いつそりんきのつのもはやしつひてやりたひ人がある

いへばどふやらさいそくらしいいはねばかへさぬかしたかね(八

ウ) ほれちやゐれどもいひだしにくひどふかさきからいへばよひ
ちよいとすいつけすいがらはたきこんなにつまつたふたりのみ「(九
オ)
ぢれてかへるをはしごでとめてゆきがとりもつなかなをり
ほつとひといきつれしやゆめとさめたでみるぬしのかほ「(九ウ)
みつがみにぞつとすがほのゆあがりすがたどこの手いけの花じやや
ら
心せかすにさめなひやうにまつとたけとのすへながく「(十ウ)
ながひねんきをかみいちまいにぶうじられたるみのつらさ
ないてうれしひゆふべのかはりわらつてせつなひこのざしき「(十
ウ)
よひはまたせてれんじの月のふけてさしこむむねのしやく
そふてそはれぬなかでもなひがねんのながひがまちどふひ「(十一
オ)
人めありやこそみすじのいとでひいてさかせるわしがむね
うたぐりぶかひとさげすまるゝもみんなおまへのためばかり「(十
一ウ)
うそとしりつゝきやすめじやうずふはとのりますくちぐるま
うちにくろうやきがねもわすれせかいちがひのよつでか「(十二
オ)
さだめなきみをさだめるからはともにかせいでそひとげる
めぐりあふ日もまたあるふかとほとけだのみのつとめ「(十二
ウ)
三日月のまゆげおとしたゆきげのふじよ花の象がほにまよはせる
ふじとつくばがなにするものか思ひ思ひの山のなり「(十三オ)
おれも男だくちへはださぬむねにはだんだんすへのこと
のちはたがひにまことまことしよてはうはきがこだのしみ「(十
三ウ)
ふぎりさへせにやせけんはひろいたとへまづしくくらしても
これかあれかとまよふてゐてはいつもさだまることはなひ「(十四
オ)

まつもうらむもおとゝいきなもつらひつとめのなかにある
けいせいももとはしろうとしそうなむすめうそまこともひとによ
る「(十四ウ)
かんばんのふだをけつづられどきやうのねじめどふかいとみちつくだ
るう
のろけさんすなそのくちほどはさきじやおもはぬうわきもの「(十
五オ)
みねのふゞきととどかぬこひはあだな風にもちるつきな
みすてさんすなわしやつたもみぢからひけぶりはぬしばかり「(十
五ウ)
こひのしがらみせきとめかねてきれてながるゝなみだ川
梅にやうぐひすたけにはすゞめわたしやおまへをまつばかり「(十
六オ)
さみせんのばちのあたりでふつつりきれてくるうひきだすさんのい
と
あだなすがたのよひ山ざくらどふか手いけにしてみたい「(十六ウ)
やがてふうふとなるみのゆかた思ひそめたもむりはなひ
かうすりやかうしてかうなることゝしりつゝかうしてかうなつた「
(十七オ)
ぬしの心はいまどのかしでかわらないとはうそらしい
むかふもいやならこつちもいやよてんからむしがすかなんだ「(十
七ウ)
たからぶねしてふつかのまくらゆめのうれしやみなめざめ
ぬしがふねならわたしがみづよ中のよいのも風しだひ「(十八オ)
あんなすなをなやなぎでさへも風にかたよるいぢをだす
あへばわかれとさてしりながらわかれともなや雪のあさ「(十八ウ)
風のたよりにまかせてあふてうれしなみだのおちば川
ぢれたふりしてみかへりやなぎはながそでひく糸もんざか「(十九
オ)
ねがひととひてやしれうれしやおもやおもひのまたうはき
ねまきひとつでそばはなれずぬしにもたれてくらしたひ「(十九
ウ)

るんはないぞへさつしなさんせぬしゆへけふびのこのしらは
ひよんな事からつひとつざかりしらぬかほとはむりなひと(二十
オ)
としまざかりをしらはのまゝでくろぶするのまかやのばち
りんきらしいがいはずにぬればすへがどぶやらおほつかぬ(二十
ウ)
ぬしに二日もあはずにぬればかぜのくさめも気にかゝる
きみをたよりにわしやさくはなよほかにちる気はさらになひ(二
十一オ)
思ひまわせばこの身のなきもめぐるいんぐわのくるまの輪
たにんがましひおまへのしうち心おきなくしておくれ(二十一ウ)
ねんがとゞいて手いけとなればあさばんたのしむ床の花
わざとけなしてまたあるときはむねでのるけるぶかひ中(二十一
オ)
むりなぎりつめむたいなくときいやとはいはれずどうしやうぞ
のんでのまるゝくせならよしなすてゝしまおうこのさけを(二十
二ウ)
まてどこぬ夜はつひかんしやくでどくとしりつゝちやわん酒
心がらじやとせけんの人にゆびさしさるゝもおまへゆゑ(二十三
オ)
おしどりと人はいはれたふたりがなかもひよんな事からひとりに
くやしい思ひも男のふじつほんにもつれたむねのあや(二十三ウ)
えんりよするのはいはじめのうちよわがまゝするほどぶかくなる
てんにいやならなぜかうなつたいまさらいやとはよくできた(二
十四オ)
さみだれのある夜ひそかにまどをあけりやそつと出てある月の顔
(二十四ウ)
しのびあふ夜はぎぬたのおともいつかみだれしつきのそら
くもりがちなるもなかの月ははれてあはれぬつちつらか(二十五
オ)
よしあしをさだがたなき身のなりゆきとみづのながれやなにはがた
つらひつとめのざしきをしひて今じやしうとで又気がね(二十五

ウ)
めなみやさしき小いそのはまへちれてぶつかるあだおなみ
こがるゝ心をさきやしらなみのよるべなきさのすておぶね(二十
六オ)
うそかまことかさつぱりしれぬさきてもしれなひわがそこる
なさけしらずがまつ身をしらでけふもこねこはあんまりな(二十
六ウ)
さらりとかれたと人にはいへどかげじやみれんでしのびなき
あきもあかれもせぬその中をきりといふ字でないてある(二十七
オ)
みから出たさびひきはなされてやるせなみだのおきのいし
もしひよつとかわりやせぬかとあんにてぬれどわざとじらしてうた
ぐらせ(二十七ウ)
らくなやうてもおほくのひとのきげんとるみは気がいたむ
せけんしらずがおかやきもちでなんのえきなひ人のじやま(二十
八オ)
ゆふべのうつりがまださめやらすまたねうれしきけさのゆめ
しみみとつらひつとめをしんぼうするも心からだがおまへゆゑ
(二十八ウ)
ところさだめぬアノつきくさやけふはあちらのきしにさく
あやめかきつばたにたなかなれどかもとあひるはねがちがふ(二
十九オ)
なんぼしあんのほかとはいへどぎりをしらなひ人でなし
せくなせきやるなうきよはくるまいのちながけりやめぐりあふ(二
十九ウ)
わるくいふならいはしておきなあんなものにはようはない
さんぜんせかいにひとりの男うわ気されてもすてられぬ(三十オ)
いのちをすてるはてんからかくこしぬまでえんおはきるものか
はなればなれのすまゐをすればたがひにつたがふ事ばかり(三十
ウ)
うわ気づくひす梅おはすててとなりあるきのもゝの花
梅のにほひをさくらにこめてしただれやなきにさかせたひ(三十一

オ) 今さら心をいれかへたとてたつたつきなはきへはせぬ
わがみでわからぬわがみのこゝろひよんなはづみでこのしだら(三十一ウ)
梅とさくらのいるかの中へずつとすましたいとやなぎ
やなぎやなぎで千世おもしろくうけてくらすがみのくすり(三十二オ)
いとのみだれとわたしの心とくとかれぬ此もつれ
人にやがまんでみれんはないといふて心でないてゐる(三十二ウ)
おなじながれにさてすみながらさきはいねむるうはあさる
じみな恋なまことまことゆきのしらさぎめにやたぬ(三十三オ)
ないてまつよなふけゆくかねは明のかねよりなをつらひ
かうしてかうすりやかうなることしりつゝかうしてかうなつた(三十三ウ)
いひと思へばたにはならずためになる人きがすまぬ
はたらきがなけりやいきでもいひ男でも今の娘ははなつまみ(三十四オ)
かげはさしてもたゞみるばかり手にもとられぬ水のつき
月にむらくもはなにはあらしとかくつきよは(三十四ウ)さはりがち
ぬしにみめぐりたけやのわたしこれで心もすみだ川
まゆげおとしたおまへのかほはあをばがくれのおそざくら(三十五オ)
その日その日の朝がほでさへ思ひ思ひのいろにさく
かきの朝がほたよかにされてからみつくほどちから竹(三十五ウ)
はかなひ此みはのきばのむすめひと夜つられてなきあかす
ふみぢやわからぬ心のたけをねものがたりにしてみたひ(三十六オ)
こぐらかつてもきながにとけばながくつながらるゑんのいと
うわきしたとてなにしてやうぞほれてていしゆにした男(三十六ウ)

女どくろはうつろひやすひほれたがあてにはならぬもの
いきでびなんでりかうな人もかねがなければ世ははれぬ(三十七オ)

さとられまいぞとかくしてぬれどうつかりのろけが口へ出る
いつまでないしよであられるものかはやくふうふになるがよい(三十七ウ)

明治十七年三月十四日御届

同年同月 出版

定価十八銭

発兌

編集兼出版人

稲垣良助

日本橋区米沢町三丁目吉番地

深川屋良助

同区同番地

牧野惣治郎

同区橋町三丁目拾番地(奥付)

本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

四十五 『「花街柳巷」花競粹の粧』

明治十七年三月一日御届。江島金太郎撰。活版。請求番号：特43-534。

はなくらべ粹の粧(扉題)

「花街柳巷」花競粹の粧(目録題)

「花街柳巷」花競粹の粧

東都 倉田皆真 補助

遊花亭柳嫖撰集

都々逸

けずり掛たるお前の胸へうつす心のかゞみもち ヤナギバシ千代
 まさかと思へど臙げならぬ浮気性丈気がもめる ヨシハラ角海老艶
 柳 誠明せば主やうたぐるし勤は苦界邪ゆるさんせ ネツ大八幡小紫
 有喜世咄しも悪口を交て善悪をたゞすは粹な人 ニホンバシ故叶屋
 歌吉 浮名立られ顔みやこ鳥主とならんだ此しやしん
 いつも色よき鯛釣あげて抱は恵比寿のかみの徳 コンバル近江屋と
 んこ(四才) 初会座敷のしらべの花が今じや苦勞の種となる
 一ぶくお呑よ私しの実を堅くほめたる此たばこ ネツ金邑楼田毎
 逢はぬ昔と断念(あきらめ) たれど思ひ出してはついふさぐ コク
 丁藤屋三吉 出合頭のふとした事が思ひがけない首尾となり
 浮気で握つた手先にひかせ口の車のかぢをとる シンメイ川越屋稲
 吉 玉吉 浮名立られ顔みやこ鳥主とならんだ此しやしん
 秋の雨夜にしつぱり濡て首尾もよしなの女夫雁 ネツ大常磐浜吉
 片言のほうほけ今日は思ひが届梅と狂て嬉し啼 ヨシ丁浜田家繁松
 着せる羽織の裏約束にきつとぞ升とかへすゑり ヨシハラ大文字静
 江 驚が仇な声して人足止てよもや手を出や逃だる ヤナギバシ上総屋
 房八 ぬしは驚私しや梅が枝よ外所(よそ)の浮木(うはき)へ止はせぬ
 同八百 水にたゞよふ浮艸さへも心に根がありや花が咲 ヨシハラ尾州楼左
 京 時鳥慥鳴たと飛石ずたい幾度はだして通たやら コンバル翁屋いな
 たまに逢ふ夜は話しも更ていつか窓もる月の影 スキヤ丁松屋才造
 (四ウ) すぐた柳もいつしかめざす堅いあの子もはる心 ヤナギバシ中屋ふ
 み 札の恵比寿と銀行の為替あれば晦日に質が出る ソトカンダ手遊
 主の名のある大黒傘のしるし見てさへねずみ啼 フカハナカ丁小
 いと いた ぐさめ仕てさへ気に成体染々いやだよ風の沙汰 ニホンバシ佐の家

百 逢ぬ義理なく身は山鳥の尾上へだてゝ苦勞する ヨシハラ品川楼泉
 州 けつと敷たり花ごさしくも蚤にも刺せぬ主の肌 コンバル近江屋と
 んこ 浮名立られ顔みやこ鳥主とならんだ此しやしん
 浮名立られ顔みやこ鳥主とならんだ此しやしん
 初会座敷のしらべの花が今じや苦勞の種となる
 恋と欲との二筋みちを私しや三筋のいとでひく
 ぬき足差足とび石ずたい忍ぶ月夜をかくすくも
 吉 スキヤ丁橋屋寿々
 つゆの情を私しや松むしよ招く尾花を楽しみに
 出合頭のふとした事が思ひがけない首尾となり
 玉吉 カラスモリ新三河
 きつとあいまと待駒すれど金と銀とが俣ならぬ
 ヨシハラ甲子楼七
 町 ぎざなお客の真実よりも粹なお前の無理がよひ
 おもひ思ふて届いた思ひなをも思ひを増おもひ
 はなれて勤た心にはじて又の御げんを仇にまつ
 勤する身はこと更つらひ義理も立たり立せたり
 惚た客でも返さにや成ぬ俣になるなら幾夜でも
 かくす一座できく辻占に顔をてらせしもみじ山
 まさ ヤナギバシ梅の家
 刻み烟草の身の粉にしても主に好れて吸れたい
 わたしの心は大門口よぬしをひとすじ守るみち
 衣 アサクサ柳家小雪
 しつぱり濡たる時雨の窓をあけて嬉しい松の月
 (五ウ) コンバル夷屋三勝
 人のものだと知りつゝ惚て人に云れぬ苦勞する
 一夜あくれば気もわか水にうつるお前のはて姿
 勝 コンバル翁屋いな
 わずか八十余州の内でおやのこくは恋しらず
 之助 ヨシハラ大文字歌

三人寄れば文珠の智慧二人で情死(しんじう)のちゑもいや 二ホ
 ンバシ豊田屋梅吉
 晴て逢はせりや深くはならぬ元は世間が悪から ナカノ丁小せん
 梅のかしくにうぐひす止てとなり座敷で聞初音 コク丁喜家小国
 思ひあり気なあの眼づかひは若や恨のある事か ネット 大松葉松雪
 情夫なき客を寝とつて置いて恨つらみも欲出来た ネット相八幡瀬川
 くらき夜道も何怖からふ主をたよりに只ひとり シントミ丁金子家
 ちび
 悋気するのも腹をば立もりんき恋変ときにある カメジマ千代吉
 燈火(ともしび)を消て逢夜に嬉顔を見よと差こむ窓の月 ヨシ
 ハラ稲本楼薄紫(六才)
 俣よこうなりや世間の義理も捨てあく迄添通す コンパル 守田小
 とみ
 みがきア鏡となる人心私しやこひゆへ曇りがち ネット大八幡濃紫
 高根たてずと入わけ聞て解ておくれよ富士の雪 ナカノ丁小せん
 松の操はほめては見たが色づく紅葉が恥かしい ヤナギバシ竹嶋屋
 小さん
 誠明さにや惚たが知れず明しや手管と疑ぐられ コンパル花の家お
 蝶
 千しん万苦をする其なかに望む願はたゞひとつ ヨシハラ河内楼勝
 見
 ほんにお前は旧弊なお人まるい世界に其たぶさ ネット大常磐帆船
 ふなぞこ枕で四ツ手を卸しあせの浪うつ綾瀬川 シンメイ大黒屋浅
 吉
 つもる口舌に仇雪ふゞき解りや浮名も水となる ヨシハラ品川楼金
 糸
 ひよつと今のが正夢ならと捻る烟草も湿りがち シンジク新石橋小
 芳
 花の薫りで惚たる鳥も今じや枯葉のあきのかぜ ニホンバシ吉田屋
 かつ(六ウ)
 つんと立たる毘沙門さんの心つよさの武しや姿 コンパル近江屋と
 んこ

弁天に酌を取せて皆にこにこと家も賑はし戎講 ネット金邑楼田毎
 泣て別れたやよひの雁も無事をきかせる月の窓 フカッ八ナカ丁小
 いと
 すまぬ事だと知ては居れど情夫に逢ふ夜は雲隠 ヨシハラ角海老艶
 柳
 凄寸法と云やうな物と云へば三宝に九寸五分 ネット岩戸屋小鎌
 あれマア御らんよ胡蝶でさへも色に迷ふて菊畑 スキヤ丁松屋才造
 出し抜の身請咄にト胸を付て馴た虚(うそ)さへ跡や先 ヤナギバ
 シ中屋ふみ
 まこと明して尽せし情もすへを便りと思ふゆへ ヨシハラ中米楼静
 浮気は其日の友達次第野暮な苦勞はせぬがよい ネット八幡楼玉吉
 いやなお方の吸つけ烟草すきな雲井もそらへ吹 ヨシハラ河内楼千
 鳥
 云にいはいれぬ浮世の義理で切れる憂さの胸の中 コンパル鈴木屋奴
 (七才)
 未練らしいが察(あきら)め兼る義理の二文字に引されて キヤウ
 丁浪花屋いろ
 初会さしきで見た人魂はあとを引くとの辻占か ヨシハラ竜ヶ崎浜
 波
 今更きれては世間の人に笑はれる共ほめはせぬ コンパル翁屋いな
 わたしの心と寒暖計はあついであついでほりつめ シタヤ胡きん
 主はなぜだか久しく来ない若やかげんの悪のか ネット大八幡小紫
 色香なけれど深山のさくら人に折さぬ気の高さ ナカノ丁小せん
 きけば聞程ふさがる思ひきかねば聞ぬで晴ぬ胸 ヤナギバシ梅の家
 まさ
 主は菜の花私しは小蝶いつも画にさへ添て居る ヨシハラ品川楼金
 龍
 主へみさほの松かいありて今は目出度門かざり センジユ美濃家な
 る次
 井筒ぐるまのあの縄釣瓶ふかひ底いもくみ通す コンパル守田小と
 み
 もつれもつれしあの村雲のとれて涼しき月のかほ ヨシハラ尾州楼

左京(七ウ)
 逢て話さしや私しや気が晴ぬ月を見無(ない)で塞(ふさぐ)胸
 ヤナギバシ杉本とく松
 浮名立られこうなるからは晴て夫婦と云れたい コンパル近江屋小
 梅
 すいな風にはツイとけやすい包むふくさの小紫 ネット大八幡濃紫
 いきで意気地の有人よりもやぼで旧弊な方がいゝ シンメイ上総屋
 のぶ吉
 主にぎずとはお酒のあとでいつも管をば巻烟草 スキヤ丁橋屋寿々
 吉
 かたい私しの心の花を来てはちらかす風やどり ネット金邑楼篤之助
 ほれた証拠に貰ふた指輪抜きし仕るとの謎々か ヨシ丁静
 つもる咄しの有のも知らず狸寝いりの面にくさ ヨシハラ稲本楼梅
 之助
 わたしの家業とあの葉桜は虫が付ては嫌はれる コク丁藤屋三吉
 たから船してお前とまくら夢もつれしひ七福神 シンメイ川越屋ち
 やら
 四海なみ風先おさまりて舟にさほさす床のうち ヨシハラ大黒楼初
 紫(八オ)
 実につるさいあの又音はぎざなお客のたばこ盆 ネット並八幡吉里
 きくに誠の誓ひをこめて替るまいぞや友しらが コンパル万屋大吉
 しごき片手に写真を詠め思ひ出しては一人ごと シントミ丁新松兼
 小園
 ぬしの心の解ぬにじれて私しや結ぶの髪いじり ヨシハラ福大和雲
 井
 うはべにや濁れど心の底が澄ばやどれる月の影 ネット金邑楼田毎
 縁もうす舞また秋さめに逢へば烟草も湿りがち フカハナナカ丁小
 いと
 実も不実と成身のつらさ贈る茶屋にも義理が有 ヨシハラ品川楼金
 糸
 思ひ焦るゝ私しを恥て不義理なお前は恨やせぬ コンパル近江屋と
 んこ

操たてたる眉毛をなでゝ沈む苦界に身をちゞめ ヨシハラ角海老艶
 柳
 松の木影へさしこむ月に左右に別れた人のかけ シンメイ江沢ふさ
 吉(八ウ)
 まこと明すは主きりしまと赤い心でさくつゝじ ネット大八幡小紫
 じつと手に手を握てゝて胸に答ゆるエレキテル ソトカンド鶴賀家
 小春
 いもの際(そば)にて吞玉子酒これも恋路のつなぎもの ヨシ丁大
 坂屋小村
 水際のたつた一人のお客に呼れ流す浮名に散涙 ニホンバシ豊田屋
 梅吉
 流す遊びのてうしがついて鯉の滝川のぼりつめ ヨシハラ角尾張小
 菊
 焦れた蛸もふられりや?よ縁は稲蝗(いなご)と思ひきる ネット八
 幡楼高八
 ほんに涼き此よき夜半はまつにまたるゝ月の顔 コンパル夷屋三勝
 引てあまたも皆振すてゝぬしと女夫(めうと)に鳴子なは ヤナギ
 バシ小光
 れんじに差込あの月影を主はいづくで詠むやら ヨシハラ甲子楼七
 町
 たまの逢ふ瀬を沢山そふにしらして聞せる時鳥 ナカノ丁小せん
 そとをつゝみし紫ふくさ中はさめなない恋のふみ ヨシハラ尾州楼左
 京(九オ)
 こゝろこゝろの浮気をやめて一トツ心にしてほしひ スキヤ丁橋屋
 寿々吉
 したばの妾が実意も知らず君がそでない浮気性 カラスモリ小松屋
 とり
 いつゞけ差たは私が悪ひされど来たのが主の罪 ネット新八幡瀬川
 ほんに嬉しい此おゝ降によくも尋て御ざんした スキヤ丁玉屋小三
 おもふ計りで便りが知れぬ主の当名は虚だから ネット大八幡左近
 思ふお方と顔見合てヲヤカマシウさへ口のうち レイガンジマ上総
 屋ちい

色のよし腹はななく頃につなぎ止たや胸のこま ヨシハラ河内楼琴
 吹 臙月夜はわたしの願ひ晴て逢はれる身ではない コンパル守田小と
 み かほふ者だよあの客人の伽はきせると烟草ぼん ネツ相八幡浜浦
 女松と男松が左右にならび夫婦気取の門かざり コンパル野嶋家小
 徳 めしと二日の初夢見よと一ト夜明るを松かざり ヤナギバシきち
 (九ウ)
 逢気で招げば風さへ来るに何か障の出来たのか ヨシハラ河内楼初
 菊 月影に移る私しの？(やつれ)し姿秋が来たかと気を紅葉 ヤナギ
 バシ梅の家まさ
 引に引れぬ世間の浮名此様(こんな)に成気邪なかつたが ナカノ
 丁小せん
 菊見戻りにふと云かわし今宵来るかと根津に待 ネツ大八幡薄雲
 芸者しやうばい止たら直に主へ貢の小あきない コンパル武蔵屋小
 勝 今じや二人が浮世をはなれ秋の虫の音菊のぬし スキヤ丁松屋才造
 山家そだちの藪うぐひすも何日(いつ)か都の梅になく コンパル
 近江屋とんこ
 すごい寸法よむね三寸の舌のつるぎで迷はせる ヨシハラ中米楼小
 町 梅は春べに薫ると菊の私しやおくれて花がさく ヤナギバシ竹島屋
 小三
 わちぎが心はます穂の薄主はつれなき秋のかぜ シバタ丁花吉
 せぢも手管もみな売つくし残る誠のしまいもの ヨシハラ竜ヶ崎花
 鳥(十才)
 ないて勤をする蝉よりも泣ずに勤をするほたる ネツ八幡楼玉吉
 九重の内ぞ床しきみす洩風に匂かんばし菊の花 ネツ金邑楼田毎
 すへを案じて返した誠とふりすこして遠ざかる シナガハ武蔵屋も
 ん

風に蚊やりのもへたつ心顔見りや思はずため涙 コンパル守田小と
 み 釣れて一生泣あかすなら寧(いつ)そ縁をばきりぎりす ネツ小竹
 主は不実とすねては見たが来て見りや替ぬ世事詞 コク丁藤屋三吉
 可愛がられて焦れて居たが妻子あるとは露知らず ヨシハラ角海老
 艶柳
 舟は涼しきあのすみ田川ちかき秋葉の風がふく ヤナギバシ千代
 私しや紫うばふて見たひ明のかねのね鳥のこへ ネツ大八幡小紫
 郵便たより邪御家へわるい旧弊な様だが人頼み ヨシハラ品川楼金
 糸 人目しのばづ弁天茶屋に時雨やました二人づれ シンカハ小浅(十
 ウ)
 あの人でする朝まいりさへ逢へど互にも云ぬ コンパル翁屋いな
 雪も積れば恋路もつもる解ぬふたりの舌話(ちわ)口説 ニホンバ
 シ豊田屋梅吉
 一寸初は仕たおか惚がとゞいて今では此くろう ヨシハラ松大黒た
 より
 こゝろ有明飛こむ虫もこがれ死ぬのも恋ゆへか ネツ八幡楼ふさ
 黄菊しら菊両手に持てすいな浮世でくらしたい シンメイ川越屋ち
 やら
 めしの顔見て年期をまてば長い月日と鼻のした ヨシハラ安尾張三
 扇
 こくびかたげて窓から覗き主はおいでか菊の花 カラスモリ村田や
 小松
 気に入ぬ風もあらふに此風車転(まはる)心のしほらしさ ヨシハ
 ラ尾州楼左京
 逢ふ夜とだへて肌さむくとも私しや重ぬこひ衣 ナカノ丁小せん
 浮気なかほりを妾しの胸でたゝむ羽織の比翼紋 ネツ亀吉
 さゝの機嫌でつれない口説さめて嬉しき中直り コンパル松屋小辰
 (十一才)
 ひとは涼しいふ川岸になぜか蛭が身をこがす ネツ大八幡濃紫
 玉をあざむく清水の流れ悪やねたみにはか雨 コンパル寿屋三勝

さしみの枕を替したからは妻と居（いは）れて主のそば ヨシハラ
 稲弁楼初菊
 実も気兼もぬしゆへ尽すうたぐり深いも程が有 ヤナギバシ上総屋
 お花
 気兼苦勞をするのも後に寝ものがたりと楽みに ネヅ大八幡小鶴
 ういた家業と云のもどつり化粧下には花いかだ ヨシ丁ふじ
 影でしのばつ渡りをつけて晴た夫婦の月見ばし ナカノ丁とせ
 風を待乳の隅田のきしに粹たどうしの船すゞみ シンメイ江沢ふさ
 吉
 泥水家業はして居るけれど腹の中迄濁りやせぬ ヨシハラ稲本楼梅
 之助
 めしの心と水風呂おけはあつく見せても底は水 ネット長龜わか
 首尾はよけれど何やら月にはづる姿の羽ぬけ鳥 コンパル寿屋六助
 (十一ウ)
 忍ぶ色香もいつしかもれる間に小梅と二人づれ レイガンジマ新大
 和小釜
 主もあんまり疑ひ深いうそも手管もひとによる ヨシハラ相万楼栄
 山
 主の疑ひさつぱり晴てほんに嬉しい今日のつき スキヤ丁松屋才造
 くもる心もいつしか晴てまねぐ柳の月のかげ ヨシハラ伊世楼雲柳
 どうなとさんせお前の胸の晴て涼く成やうに ヨシハラ河内楼千鳥
 おもひ思ふた互の胸をあけてはづかしけそふ文 ヤナギバシ丸家ら
 く
 世帯始に焚く飯(まゝ)よりも嬉しさゑくほに吹こぼれ ヨシハラ
 大文字九重
 ひよんな事から鞆当筋を私しや大和屋さばき役 スキヤ丁小若
 花と紅葉にこうたいさせて雁と燕にきくたより ネット金邑楼田毎
 浮気およしと親立言へば仮にならない此つとめ コク丁藤屋三吉
 比良の雪より話しも解てぬしにやつした浮身堂 ヨシハラ杉戸楼田
 毎(十一才)
 返(かへり) なんすかいつ来なんすと世事も無心の腹積り ヨシハ
 ラ角海老艶柳

解てむすんだ離ぬなかは縷子と博多の腹あはせ ニホンバシ黒吉
 どこも白魚も焚火はひとつ芝とつくだの内と外 ヤナギバシ中屋ふ
 み
 ともに嬉しき心のうちを明て嬉しき今朝のはる ヤナギバシ中島屋
 うめ
 頼みがひないお前の胸をどうか頼にして見たい ヨシハラ品川楼金
 糸
 ふたつ枕の吸つけ烟草寝ものがたりの睦ましさ スキヤ丁橋屋寿々
 吉
 一寸手に取挿てまはし善あし見わくる生たまご コンパル野鳥家小
 徳
 人目ありやこそ互にそれと問ずがたりの涼み台 ヨシハラ松大黒龜
 菊
 しあんの外て字走(しんにう)かけて主と手をとりに逃したく ニホ
 ンバシ叶屋宮子
 うたぐる程なを知ぬも道理実意の裏かく恋の情 ヤナギバシ小かね
 私しや無念の涙を呑どむごひお前にやはも立ぬ ヨシ丁菊松(十
 二ウ)
 指折かぞへて考へさせばアノ時ア慥にあのお客 ソトカンダ手遊
 春の心もまだおそざくら堅いつぼみの中がはな ナカノ丁小せん
 すぐな私しの心も知らでよそへ車をまげるぬし ヨシハラ稲本楼薄
 紫
 王子戻りにふと云かはし今日か飛鳥と待たより ネット大八幡小鶴
 お家の首尾はと気てんで菊に筆を染井の迎ひ文 フカガハナカ丁小
 いと
 たより菊には電信かけて顔は写真でおみなへし ヨシハラ角海老稲
 葉
 主と寝酒の話しが積り過ちや毒だとかくす猪口 ニホンバシ豊田屋
 梅吉
 恋のやく束寿老をたてゝ鹿と根々がしてほしい コンパル守田小と
 み
 たために成人いゝ人まぶと掛りや目方はおなじ事 ネット平野屋小芳

かりの便もない夫ゆへに秋が来たかと気を紅葉
 之助 ヨシハラ稲本楼梅
 どうせ痛かる此手まくらは主に焦れて骨とかは
 蝶（十二才） コンパル花の家お
 惚ていりやこそ少は無理も云はお首尾を思から
 ろ キヤウ丁浪花屋い
 こがれこがれて逢瀬の首尾を松にもやひし涼み船
 勝 コンパル寿屋三
 うれし夢見てまだ間もないに月夜鳥に脅かされ
 勤する身はあの松むしよ啼々月見るかこのうち
 返さにやならぬと涙を袖に返す浮世の憂いぎり
 染 ヨシハラ梶田楼墨
 あふせ堅田のはかない中は雁の便りも空のやう
 和小兼 レイガンジマ新大
 氷室でかこつたお前の心堅いようだが解やすい
 勝 コンパル武蔵屋小
 思ふお方にさかづきさゝれ呑ぬうちから赤い顔
 きのふ大坂京都是ゆかず心にまつのは長野県
 かずの子宝つむ重詰はうみ山忘れぬ御代のおん
 嬉しさ蚊帳中転る首尾にだるま返し（十二才）の鬚くづす
 龍 ヨシハラ品川楼金
 端書の便邪人目が多い末練な様だが来ておくれ
 同金糸
 ふみの文句の手管でかたく虚言を尽しの兵庫曲
 ヤナギバシいそ
 挿花の様な根のない黄菊の私し水を指れて独床
 センジユ美濃家な
 る次
 若や夫かと雨戸を明りや月が顔見てはづかしい
 ヨシハラ松大黒小
 菊
 にくひ人じやとにらんだ顔の口と心の裏おもて
 コンパル近江屋と
 んこ
 浮気うぐひす梅をばしらしわざと隣の桃におく
 ネット八幡楼静
 はなに迷へばあらしが苦勞いつそ定たい柳たる
 キヤウ丁浪花屋久
 吉

私しの思ひを十分の一もきかずお前の空たばこ
 吉 シンメイ江沢ふさ
 偶に逢夜の寝てから先はどんな苦勞も忘れませ
 盤木 ヨシハラ角尾張常
 千代も濁らぬ此わか水でもあい手水の程のよき
 手だしはせねども口先あらいい人はうぢより育がら
 ふみ（十四才） ネット大常盤浜吉
 姿うつせる写しんはあれと思ふ心はうつらない
 鶴 ヨシハラ梶田楼梅
 よひの曇りもたがひに晴て実に嬉しい今日の月
 いと ?カ?八ナカ丁小
 事をわけてのお前の詞まもりませへ千歳まで
 やら シンメイ川越屋ち
 曇りがちなる此入梅もぬしのかほ見てはれる胸
 柳 ヨシハラ角海老艶
 秋の夜寒につひうとうとと夢も手枕さめるさけ
 尾 センジユ亀鶴楼玉
 思ひ出しては忘るゝひまも泣て恥るふかこの鳥
 花にうかれて啼うぐひすの声も二上り三さがり
 郎 シンメイ江沢桃太
 偶々逢ふのに咄しが出来ぬほんに勤はつらひ物
 太夫 ヨシハラ宝来楼曳
 空だのめなる詞のはなが逢へば口説の種となる
 蝶 ヨシハラ万年楼小
 〆た襖にや透間は無がどうして咄しが洩たやら
 梅吉 ニホンバシ豊田屋
 主の詞にかわりがなけりや私しや変らぬ末を松
 小松（十四才） カラスモリ村田屋
 ぬしと私しをたとへて見れば梅に黄鳥きくに蝶
 ヨシハラ安尾張梅
 ケ枝
 三曲で賣て鯛て行を捜す其な手網にや乗はせぬ
 ヤナギバシ梅の家
 まさ

まつの中に巢ごもる鶴も千年はなれぬ女夫(めうと)づれ シンメイ林屋小鶴

花の咲のは実になるもとひ浮世の枝葉に恋の幹 ヤナギバシ平和泉いな

水も洩さぬ二人のなかをそつと覗きしまどの月 同 立花屋小

いやな旦那を取て置いて浮気をするなは親の無理

文句入 同 立花屋小

つらひ勤のしん抱とげて(清元権八)やがて廓の年あけて名も呼

び替ておかもじと(楽なそる寝がして見たひ ヨシハラ品川楼金糸

(十五才)

人にや何だの彼だのと云はれ(端唄)先やさほどにも思やせぬの

にこちや登りつめ(こんなつまらぬ事はない ヤナギバシ扇屋たけ

苦勞性なる私しとして(一中浅間)まだ其癖がおほ定の咳も出

ぬのに重よぎ(又もけびやうの人じらし ヨシハラ松大黒小菊

いやと云気はさらさらないが(清元権八)すねて見せたる瘤柳け

むる柳のたばこぼん(じつは気を引下ごる ネツ大八幡小紫

登りつめたる恋路の山に(常盤津将門)はや衣々と引しめる帯か

くさる(戯むれは)(十五ウ)おるるはしごもつらあり ヨシハ

ラ稲弁楼愛人

主は来るはづなげまアおそへ(清元)じつと誠のゆき合のはしご

に足もひけすぎの(ねずみ啼して待つらさ ヨシ丁静

たまに逢ふたにほいない別れ(新内)身にしみじみといとしさに

肌をはなすはいやなれど(おうちのお首尾にせひがない ヨシハラ

河内楼愛洲

げいしやげいしやと只ひと口に(三筋はうれど情まで売ぬ私しがぬ

しさんへ)たてる操をさつしやんせ(二ホンバシ大黒屋たま

義理も世間もたつ其いけん(十六才)(お俊堀川)お詞むりとわ

思ねどそも逢かゝる初より末の末い替(なんの今更切りりよか

ヨシハラ相万楼栄山

折角咄がまとまりかゝりや(端唄)アレ寝なんすか起なんし(エ

、毛ぢれつてへ罪な人 ヨシハラ大文字七越

たへず便りはせひしておくれ(端唄)一言が十言にむかふ嬉しさ

はわすらりよ物か(忘れてしまへば焦れじに ネツ松葉琴女

やつと日頃の思ひがとゞき(朝顔)たまたま逢ひはあひ乍らつれ

なき嵐に吹わけられ(今は十倍ますくろう レイガンジマ新大和小

釜(十六ウ)

うかうか暮した此身のうへも(太閤記十段目)十八年が其あいだ

だれと定めた人もない ヤナギバシ中屋ふみ

ぬしが病気ときいては居れど(清元権八)逢いたい見たさは飛立

ばかり籠の鳥かやうらやまし(まゝにならない此苦界 ヨシハラ品

川楼一龍

ひと夜明ればついで気も浮れ(清元北州)霞のころも衣紋坂えもん

つくらふ初買の袂ゆたかに大門の花の江戸町京町や(背中あはせは

松かざり シンバシいね

じれたまぎれに歯で曳さいた(十七才)(端唄)紙でかあるのま

じないも(きいて嬉しい主の声 ヨシハラ松大黒たより

雲にせかれて姿も見ずに(一中??)声もきかねば顔も見ず(泣

てあかしのほととぎす ヤナギバシ上総屋お花

嬉しい逢ふ瀬の又ない首尾も(富本浅間)こち向せと寄添ばひん

と振切袖香に誰と寝て来た移香と(なぜか口説で夜をあかす ヨシ

ハラ河内楼高篠

西と東にわかれたまこと(書送)思ひまはして俣ならぬ早く苦界

を候かしく(じみなみなりで北のかた ネツ金邑楼篤之助(十七

ウ)

短気は損気と云ではないか(一中小春)さりとは狭き御量見死ん

で花が咲かいな(そはれる時節も来るである ヨシハラ松大黒此花

承知で惚たるお前の邪けん(常盤津お駒)打て腹がいへるなら心

任にした上でもう堪忍をしてやると(いつて笑ふてくださんせ ヤ

ナギバシ扇屋たけ

人の事だと思つて居たが(新内浦里)今は我身につまされて義理

と云字は情なや(切にやならない身の苦勞 ヨシハラ稲弁楼愛人

今朝のきぬぎぬ檀どくせんの(一中駒の涙)むかしを慕い聞時は

委陀太子は十九にて王宮を出たまひ(十八才)しやくの童子にま

す思ひ ヨシ丁大坂屋小村

しよては浮気で中度は実で「(一中)妾が風引て寝て居たら枕のそばへ密と来て飯でも喰ぬか薬でも其優さに引替て」すへの邪けんな気がしれぬ ヨシハラ松大黒花紫「(十八ウ)」

明治十七年三月 一日御届

同 十七年三月廿五日出版(定価金十八銭)

編集兼出版人 東京府平民

江島金太郎

日本橋区本石町二丁目九番地

発兌人 江島万笈閣

同 同区同町二丁目九番地

同 内藤金桜堂

同 同区通四丁目八番地

同 商弘所

同 京橋区中橋東中通下楨町十一番地

同 鈴木常助

同 日本橋区通三丁目十番地「(奥附)」

本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

四十六 『新撰絵入はうた都々一集』

明治十七年四月一日御届。菅谷与吉編。請求番号：特60512。

(本てうしはうた)しのぶこいぢはさてはかなさよこんどあふよはいのちがけよごす涙のおしろいもそのかほかくすむりなさけきつとざい升だましちやいやよなぞとだましてかげで舌「(一オ)二人寝る夜は玉子のやうだわたりしや白みできみをだく

(三下りはうた)夜ざくらやうかれがらすがうるうると花のこかけたれやらとまつわいなめふき柳の風にもまれてゐるわいなエ、ふうわりふうわりとヲ、サそつじやいなそつじやわいな「(一ウ)」

(本てうしはうた)秋の夜はながいものとはまん丸に月見る人の心かもふけてまでもこぬ人の音するものはかねばかりかぞふるゆびもねつおきつわしやてらされてゐるはいな

こんなうれしくあわれる夜半があるでかなしい夜半もある「(二オ)」

ゆびを切らふとしたかみそりを今日はうれしうそるまゆ毛

うれしかあいひるねの夢をエ、もじや魔した手のしびれ「(二ウ)」

これはわたしのかへもんなど、うそをゆびわのかげのろけ

ぬしのうわきをきくたびごとにしやくがふとつて身はやせる「(三オ)」

(本てうしはうた)げいしやしやうばいさぐりをやめて両国へんに

すまゐしておまへはぎんこうへかよはんせ私しは内ではりしことふ

たりが中にやうんで川といふじにねて見たい

はやくおまへをなまづにさしてふたりぬらぬら暮したい「(三ウ)」

うわきじゆうのけんあるぬしを手くださの糸にてほほくする

まつにかいなき今宵の雨で内に居ながら袖ぬらす「(四オ)」

ぎむが立ぬの世間があるの何の彼のとてよくにげる

(本てうしはうた)一トことが十ことに向ふうれしきはわすらりよ

物が忘れぬうそにもほれたをじつにしてエ、くらすエ「(四ウ)」

はをりきせかけゆく先ねどひすねてたんすをせなでしめ

(三下りはうた)としまざかりのはつとらまぬりしのぶづぎんのつ

ひ見しられてしみる小袖のかくしうらこぼれ松葉のいく千代もはな

れぬ中のたのしみは太平楽で世をおくるヲ、よい事のよい事の「(五オ)」

わたしお尻はきしやけいききうはやいとかるいで人がのる

はれてあふとはそりやぬしがむり雨と雲とでもてる中「(五ウ)」

(本てうしはうた)はるばると姉をたづねて来るしのぶにかいへし

のんで名のりあふ見るもむねさへいつばいな田舎ことばじやないか

いな

開化したとはたゞおもて向胸はひらけぬ恋のぐち「(六オ)」

(本てうしはうた)はざくらやまどをあければ山ほとゝぎすまたも

なくかたまつ内にかつほかつほおやいさみだととんでるうわきせ

うではないかいな

あつぱれ立派ななまづをおさへでかした猫だといわれたい」(六ウ)

ぬしをまつ夜は戸たゞく風ももしやとあたりへするきがね

ひさしぶりだと一ざの手まへたつた今逢たその人に」(七オ)

(本てうしはうた) ゆきの朝寝まきのまゝのおぎつきがついした事
で深うなり今はたがひにせきせかれひよんな噂を聞につけもしやさ
うかとあんじて見てもふさいで見ても只ぼうぜんと畳ざんして経ま
くら

思ふお方になぞではないが解せて見せたい胸のうち」(七ウ)

アレ見やしやんせこのふるにぬれて町々御巡行コレモ人民ほこの為
花にたんざくかけたるなぞはとけぬ心を結つける」(八オ)

(はうた) そつときて這入れればしん二人のかげもしやとむねをさす
りつゝ又のぞきけり月のかげ見れば木かげにぬしのかほ

背中合や又はら合せちはとぎろんの新聞紙」(八ウ)

きざなやらうと小さいきな人をこゝろの屏風でたてわけ

(本てうしはうた) 川かぜをいたふすだれをはねあげて思わず見合
顔とかほわがつまどりのエ、エ、しんきなみやこどり」(九オ)

おもひたへかね文力キクケコどうぞ首尾してアイウエオ

これで死んだら腑分をねがひ恋のやまひをなをしたい」(九ウ)

海山こへてもたよりはできるきれちやいやだよでんしん機

(二上りはうた) 秋の七草むしのねにのこるほたるが身をこがすき
みをまつむしなく音にほそる恋といふじがたいせつじや」(十オ)

ぬしは金性わたしは木性木がねくらうは身のかく」

(三下りはうた) わしが思ひは三国一のふじのみやまのしら雪はも
りやするともとけはせぬ浮名たつかやたつかやうきな今はうきな
たつのもうれし人のこゝろはあいえんきえんいつせつからだもやる

きになつたわいな」(十ウ)

やつとはふ小とこくくわいぎいん立るやうでもまだ立ぬ

(本てうしはうた) はる風にふきまはされし小てふさへつがひはな
れぬめうとなるなのはにちぎるこゝろねを風がじやまして袖やたも
とのあやとなる」(十一オ)

大工たのんでかんなでそつと立たつき名をけつりたい

ゆめでもよいからもちたいものは金のなる木とよい女房」(十一ウ)

もてりや散財ふられりややけよどうせこつなりやからさい布

(本てうしはうた) あまのとの明るといへる嬉しさにつひひかさる
ゝ春かすみ思ひのたけをいふふじも直なこゝろのトすじやさゝの
きげんできそはじめ顔にうつるふはつ日の出」(十二オ)

じつのあるのがかへつてくるう人にもそんなであらうかと
ざしき??をくるはすねこはちよつと二を上げ三を下げ」(十二ウ)

うごけないほどねんきと?と借をしよつても気はかるい

おぼる月夜にまつ身の嬉し雁は帰るに主は来る」(十三オ)

逢て居てさへとゞかぬことば文にかくれるはづがない

小鳥の名に似た女郎のたんす明て見さんせ四十雀」(十三ウ)

月をおしんで夜はふかしても日には目のない朝ねほつ

ふけてまつ夜に見るせこんどは一時一時にせまるむね」(十四オ)

をりをりてい主がおせわになると?ふ火でこがさぬやき上手

右にぬしの手左にへラをつかんでゆうほがして見たい」(十四ウ)

すがたみせねどやさしい声で人をまよはすほとゞぎす

(本てうしはうた) ゆきのよのつめたさにアレ小ざしき二人りづれ
たがひにぢらすあいことばほつれかゝりしあらいがみエ、もじれつ
たいかみやうじ」(十五オ)

早く籍をば送せきなしてぬしの妻だといわれたい

(本てうしはうた) 梅がぬしなら柳がわたしなかのよひのかすねる
のかあるよひそかに山の月こゝろないぞへさよあらし」(十五ウ)

口でけなしてこゝろでほれて人目しので見る写しん

(本てうしはうた) 紙をたゝんで眉毛をかくしちよつとはをそめう
しる帯よふ似あふたか見やしやんせもしへといふて名をよばぬたの
しむ中の気まゝ酒」(十六オ)

口じや言はれずしうちじやできずおしと目くらの色ばなし

しよてはおまへにせつかくされて今じやわたしがいけんする」(十
六ウ)

そんな其様な言はけしらぬわたし写真がきしや文

(はうた) 世にかほるうきなまふけの軒の棲花?の家の風吹き伝へ
ては今更に引にひかれぬえんのはし」(十七オ)

(はうた)つきあかりそれはおぼろのふねのうちいきな二上りつめ
びきもしのびあふよのしゆびのまつ)

芝居見たくもまゝにはならぬ(清元)かたいやしきの御ほう公あ
のをく様のおつかいが)たまに出た時見る新聞屋(十七ウ)

義理をかいても斯なるからはあくまで女房にせにやならぬ

(本てうしはうた)春はひとしほおもはせぶりなはななくもり角田の
つゝみの桜木をあれはるかぜのつらにくやさかりの花はちらちらと
浅くさ寺のいり合に返りともなや夕げしき(十八ウ)

(本てうしはうた)あだしのゝつゆのなさけにすゝむしのまちあか
しては今さらになくになかれぬものをもひ

きれたお人の写しんを見つめふさぐこゝろがはづかしい(十八ウ)
思ふやうにはそれはれぬ二人り死んでも未来が気にかゝる

(二上りはうた)すみとすゞりにこゝろをこめてまことあかせどそ
れとはしらすでしんきしんくで夜をあかす(十九ウ)

(本てうしはうた)一夜あくればまた気ははれてはるのあそびもに
ぎやかにまりやはご板ぶく引のうらじろねまつやぶかうじぬしのご
げんを松かざり

立ちやいけないマア横に寝てはゝのはなしをきゝなんし(十九ウ)
ふけばきしるしふかねばゆるいほんにぬれ手へこのゆびわ

(本てうしはうた)おきて見つ寝てみつまでどたよりなしねやのひ
ろさにたゞひとりがやりの火よりむねの火のもゆる思ひをさつしや
んせ(二十ウ)

うそとまことは仕うちでしれるかくすおまへの気がしれぬ

(本てうしはうた)身は一ツ心は二ツ三ツまたのながれによどむう
た瀉の君にあふ夜のかじまくらあかつき?のくものおびなくか中洲
のほとゝぎす(二十ウ)

ともに死なふとかくこはしたが命ありやこそすへもある

(本てうしはうた)秋の夜ながにぬしにあふ夜のみじかさは月よか
らすがなくわいなつきじやこんせぬしらすとあけのかね(二十
一ウ)

吸つけたばこについだまされておのが世帯を烟にする

(本てうしはうた)むつとしてかへれば門の青柳のくもりしむねを

はるさめにまたはれてゆく月のかげならばおぼろにして見たや(二
十一ウ)

蚊帳の籠城まぐらの皆君のしん撃待ている

(本てうしはうた)しつぼりとふゆをたのしむたま子ぎけはだとは
だとをぬくめ鳥おしのふすまのしき寝のところに?をつもる夜の雪と
けてうれしき朝の月(二十二ウ)

ぬしのこゝろのくさらぬさきにつけておきたやアルコール

(本てうしはうた)しのゝめに向ふ見わたす袖が浦沖にふぜいのか
ゞり舟すさきのはまが見ゆるぞへあれしほがひる汐干ふねやよひの
くせのくもりがち(二十一ウ)

(本てうし)柳と世をおもしろふかけて暮すかいのちの??梅にし
たかへ柳になびくそのおくの風しだいに??まこともぎりもなし始
めはすいに?へども??にほれていひくるになかひるねの床のうき
おもひどふしたひやうりのひやうしたん??はらの立月じやへ
しまひるふしむがふしゆびがしゆびが返さぬ女にまつ女房(二十
三ウ)

ぎりもふぎりもあわれもむりも札の紙からわいて出る
ころし文句のおまへの文はもつしよどころかはだまもり(二十三
ウ)

見すてしやんすなゆくす糸までもなどゝしやしんへひとりごと
(本てうしはうた)かうもりの出て北はまの夕すゞみ川風さつと?
くぼたん??かけの色男いなさぬいなさぬいつ迄もなにはのみづ
にうつすがた糸(二十四ウ)

うその中からまことの事を言せて見たさにこのくるつ
あのふる夜も通ひはずれどたゞの一度もぬれはせぬ(二十四ウ)
(本てうしはうた)タぐれにながめ見あかぬすみ田川月にふぜいは
まつち山ほかけたふねが見ゆるぞへアレ鳥がなく?の名のみやこに
めいしよが有はいな

かねの権兵衛を宵からやとひ明のからすを追したい(二十五ウ)
すきときらひが一度にくればほつき立たりたをしたり

(本てうしはうた)げいしやしやうばいはじめよりとくしんづくで
こふなつて今ではやばな女房気もぎしきつとめて客さんのきげんを

とるがおかしな三味せんひくがふしぎなり??もやすみやすみいはんしたがよいわいな(二十五ウ)

(本てうしはうた)春くれば色香をふくむきさらぎのおもひこがれて花になくほうほけきやうのートこへはうかれてくるふうめのうぐひす

人もほめるしわたしもよいと思つて見とれるぬしのかほ(二十六オ)

こひのやみぢにまよふているをランプおやぢのいけんする

おかほれしてさへうき名がたつに恋じや出るはつしんぶん紙(二十六ウ)

ほれたわたしのまよひかぬしがじつをいふほどうそらしい

さみだれに袖もかわかぬくぜつの中へ空で音をなくほととぎす(二十七オ)

おやのいけんと霜夜のさけは五ぞう六ふへしみわたる

あへばさほどにはなしもないがかほ見りやくるうでねつかれぬ

御届明治十七年四月一日
編輯兼出版人 小川町十五番地

菅谷与吉

定価十銭(二十七ウ)

本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

四十七『月並百々一 第十会』

明治十七年四月十二日御届。宮島徳兵衛編。活版。請求番号：特53-793。

宮島徳兵衛の編著は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」において公開されている。したがって、本書についても、著作権は消滅しているものと考えることができる。

月並百々一 第十会(表紙)

月並百 一会贈序

情真面目に成て案に陰陽の消長寒暑の往来四時の流行万物の榮枯目前りに梅飛で詩歌も去年の桜時発兌初たる粹な文其名は四方に響いたる抑一会の出版より嫌な停中止の沙汰もなく当年本月も十会と云ふ其祝賀とて投粹士がよつて酒肴の懇親会近々催しを扇中君の嘸しに田楽も嗜し紛れの前祝ひ一寸一杯夕食の御膳の上で一二合飲し酒からこふなくてなんで弥生も桜時粹客方の花の顔拝覧も近にアリヨロと酔た紛れに浮れ節意気名二上り三味線のトンと当つた好調子はどこの都々逸の声なるかと喝採の賛声に待に待たる甲斐有て他日に開筵宴会は江湖に類なき勢ひならんと咲ぬ前から吉当盛大は保証と廻らぬ筆に口駄を時者は毎々御邪間をいたす

京ばしの片隅南新二詫住居す

内駄の田楽述(一オ)

百々一は其意頗る猥褻に渉るに似たるも能く男女の情態を穿ち月下氷人を兼その心を通じ春情を動かすに足るの深味を含みまた芸妓衆の糸に掛れば四季の徒然を忘るゝの陽逸にして積鬱を散しその妙趣に至りては淫奔多情をも教戒し鬼神をも感ぜしむることやわ無きにしも有らず故に凡通人粹客と呼るゝ才子は之を学ばざるは専稀なり寅心生情々過去を思ひ起す月並百々一会は去年の五月の開催より粹通雅客の金玉を活字版に保存して月一卷の首尾を為せしに当時の流行に適切し会経る毎に繁殖し這回第十会の数を重ねるに至るは一重に文明に進歩し粹客伶俐の多きによるならんと聊小理窟を并て以て幸に余白あれば緒に供をせんとす

維時二明治甲申ノ弥生赤坂丹後町春風多処ノ艸蘆ニ拙筆ヲ耕ス

寅心粹仙 林鑄次 叙(一ウ)

楽あれば句あると徳若の床慢在枝も栄へて葉も茂ると祝ふ初春早や過て第十会の月並と百々一会を見渡せば柳桜を濃ませてもとゝのふ名家佳作の梯情の稜粹と通とのそか中へ野暮で不粹のわれわれが序文なぞとはちとおこなれど枯木も山の賑しく自分理窟もつき兼る白痴気た投書としりながらどふいふ赤繩か黒人の撰者のなさけ有馬山否にはあらぬ稲舟の恋の初分の糸口より稀に逢瀬の后朝にその鶏鐘をかこつたる手練手管の幽妙蘊奥猫も酌子もきらいなく腕も達者な

兄イチヤンへたのんで余白をけがすのもこの上もなき楽しみとなす
も矢ツ張り句(苦)の種か何は兎もあれお見捨なふ是ツ非お目かけ
句出載とかくはものしつ

維時に明治の十七年弥生の中 芝浦の月漏破房灯下にて

薄情舎 床慢在 述(二才)

人心浮立つ春の閑さよ笑ひ初けり梅が枝の花香を慕ふ諸人の瓢筆を
腰に連行近きは亀井戸鎌田村遠くは杉田小向井と最早そ花の散り果
て持問もわづか隅田のつゝみはや咲ぬらん桜花又梅よりは格別に浮
れ桜堤坊を千鳥あし川面に浮ぶ家根舟の中は二八か二九からぬ仇な
姿の手弱女は何所の芸者か白魚の細きゆびもて弾く三弦の根も調
子も張あげて三題に因みて謡ふ百々一のかるき口調に遂ひほだされ
て又も一筆出放題春の日長にかくの如し

百花燕升粹誌(二才)

月並百 一 第十会

十会目撰者 沖の家春帆

十一会目撰者 百 一房雅楽

十二会目撰者 閑 居物外

補助 仮名垣九魔

評者 著作道人

白 赤 黒(三才)

五点之部

うちはつかひの白地の浴衣うつる鏡にぬしのむね 小舟町栄花

黒くかせいてせけんを白く家業赤るくくらししたひ 神奈川可愛亭

しるい世界に赤るい身をば黒うするのも心るがら 墨阪能無子

赤い狐にやついうかうかと承知しながら化される 浦賀在丸仲

人目忍んでアイウヅヲして今じや黒をサシスセソ 極楽贅水

暮したいぞや世間と義理をかゝず赤るく末ながく 信墨イツヘツ

へト

赤い御旗は御国の光りきらきらちらちら軒のさき 来里安閑坊

さくらそよげば世界もなびく天津日の丸神ながら 不忍柿八

真赤に怒たあの炭の火に尻おしされてか怒鳴る釜 極楽贅水

白や黄菊と隔てはあれど枯りやもどりてもとの土 蠣二点知(三

ウ)

夜の梅見をそしらぬ顔で匂ひつゝむか黒小そで 赤阪丹後町宝

梅 仇な浮名も世けんにはつとぬしに明石は須磨の閑 口柄出方題

思案なかなか此黒髪をいつて仕舞ほかいふまいか 吉岡極楽亭遊

穴 人目しのでかく文さきへ白くさしこむ窓のつき 神明白木内き

ん ほんに美しくお前のすがた白くべにさすふじ額い 春風亭秋香

面白出来商法も御酒の機嫌いつも銚子のよい御連 口柄出方題

ぬしのためならこの黒髪を切りてなります尼法師 足利一笑艶史

染まり付いたるあくをば抜て色もかわらぬ黒羽織 八王子耕水

みどりの黒髪片手からみむりにとふせし解し櫛 木崎徳林楼内

しづ 三々九度の目出たいなかへすゑる高砂兩人白髪 川崎酔眼

赤い顔して帰つて来れば私しや何より気がもめる 多賀亭堂太

(四才)

ぬしは白髪に私しや伊勢海老と云て御礼の明の春 田所町清子

浮気いろとは私しや白いと染てはづかし水浅黄 信州松本山笑

赤い着物をさせたも実はみんな私たしがなした罪 上毛田胡玉齋

木地の箱だとすまして居るが明りや朱塗で赤い色 銚子波の家千

鳥 いろの初わけもまだ白木綿そめて色濃き恋ごろも 信州松本山笑

さいて匂ひのこと葉の花を千代とむすぶの友白髪 不忍柿八

おやのむすびし赤繩をかたくまもる貞節ぬしに忠 蠣二点知

こんな事とは私しや白鷺で泥へはまつた恨めしさ 本郷武野冬鷲

実とみさを立田の川のながれつきせぬとも白髪 口柄出方題

思ひみだれし此黒髪をいふてきゝたいむねのうち 田名宿阿房

膝をまくらに白髪をぬかしみんなぬひたら丸坊主 五雷(四才)

あれさ御らんよあの笑顔ぬしによようにたこの赤子 横浜三福対

いきな住居に黒板塀をたてゝおぬしとくらしたい 稲荷山南桂

富士の白酒寿命のくすりのんでたのしむ千代の春 足利一笑艶史

人の心とランプのあかりしんのきり様に立ヨイシ 水原小町奈斉

同道

金のむくをは白歯へはめりや雪に黄金の福寿草 八王子耕水

窓さすあかりにふと目を覚し明りや白魚取る燈り 君津の半痴

先は支那ゆくもつ白石に勝たる困暮の吉備がよへ 水原小町奈斉

同道

白妙えの雪に恥かし常盤のこゝろ操鏡も二度の夫 川崎醉眠

私しやそら豆早や此さやをぬけて附たひお齒黒を 小舟町虎眼

ふでを手に取り墨くろくると人目はゞかる恋の文 上総成東町枝

雪

泥水育ちの私しじやけれどこころ清らの白はちす 明石亭真「(五

才)

散花をよそにみなして桜をけづり赤い心を筆で書 信州松本山笑

肌は黒でもこゝろは赤い顔もおしろい塗りや白い 黄木山出琴

くらうする墨しんなし筆でさきへ心がとゞかない 本郷武野冬鷺

月

わたしのやうなる黒棧留が主の結城になるものか 田名宿更科太

秋の来るまで通ひもせぬに私を此やうに赤とんぼ 横浜登法華

富士にや白雪私しの胸にや消えづ残つて居る恨み 薄情舎床慢在

同道

親の仇思ひ知たか夜実盛の首を討取りや白髪武者 水原小町奈斉

白川夜舟にふと目をさまし声も遠音のほとゞぎす 深川浜九里

巴

闇のかほりとつい白むめに寄ればベタツク柳の香 静岡かはせ割

ふたりがなかをば誰れ白髭や多い人目の関屋ぶり 吾妻橋つさぎ

雪

さゑる十五の赤月なれどぬしが曇りをかけたがる 上総成東町の

るけ(五ウ)

水にうつろふアノかがり火は佝もよりの白魚ふね 一光坊夢中

千辛万苦をつくして今日は赤いさかづき四海なみ 山口軒巴城

赤いや黒いのいろにもそまぬこころ正しき白牡丹 梅柳庵清香

きかひ運転便利をひらき根本は赤ひげさんゆゑよ 上総成東町枝

きのふの初会に今宵もいなり赤い鳥居のない私し 銚子松岸都乃

枝

白鼠み杯とされて居内や夢よ筆先露頭でが覚る 石巻米屋小僧

糸

すがたよし野の小ざくら娘め顔は白雪名はおはな 横浜鳶迺家桂

糸

赤ひ陶器じや異国までもひかりかゞやく九谷やき 木崎吉田家一

啞と白鷺鴉雁とのつてとけぬハンポで此くるふ 千住山川

する墨に心の誠を細々と書ど主は茶にして白ぬ顔 シバノ喜遊

(六才)

清浄も垢なるアノ白雪もとけりや頭はれ出る下地 黄木山出琴

黒ふするのおまへの為と赤いこころを墨でかく 春風低若枝

くらい心の炭部屋ぢやとて赤ぬ穂先はうけかねる 薄情舎床慢在

おさない娘の手習草紙いろはと云字で黒くする 伊勢町新井清

離のお客くがほんのりよふて赤いお顔の桃さくら 鶴の家れい

巴

骨まで見せても主や白扇ぎ添なきや此身は紙頼み 静岡かはせ割

ひとがかれこれいふのも道理よその黒まめ妻身髯 イセ貫女

黒の衣もに身はやつせども夢のうき世はひと悟り 梅柳庵清香

うは部磨けど根に黒さびのとれぬうは気が玉に疵 芳山夜梅

君のこゝろを浜まつ風に黒きけむりになみのをと 小舟町栄花

すゝむ開化にまつ国会の開けりや世に出る赤心家 堀留白花燕升

白鬼だまして折つたる角が帰りや女房に生ている 上毛木崎鑄查

(六ウ)

主しは白雪わたしはあられすへはともども枕川 横浜鳶迺家桂枝

黒髪の乱れ姿のあの美麗い思へば今宵も寝付れぬ 川出鱈目

白梅の薫ゆかしきあの春風が雨に為のが憎らしい シバノ喜遊

むねの八重雲今たちまさり黒白わかたぬこひの路 香烟情史

白きものにもたぐひはあれど心るなくさむ梅の花 上毛木崎鑄查

粹な浮世をはなれしこゝろふつり黒髪きつた後 伊勢町新井清

松にあやかりみさほをまげす夫女中よく友白ら賀 上州木崎安済

つれなく別れたあか月よりも待はものうさ宵の空 道化家テレツ

ぬしを待乳のあの赤月は心る無く鳴くほととぎす 信墨イツヘツ

へ くりむめいろをばぶん析すれば赤が七分で黒三分 水原月雪亭花

白 白い学者は天狗をいわず心ではらをばしめて居る まる山人「(七

オ) 見ても美麗なあの白魚はむなにあふ隅田の川そだち 柳町金乃家

仇な色とはわしや白綾の赤いころに染まりたい 千住秀峨

四海なみ風まづしづまりてはれて白帆も見ゆる灘 イセ貫女

いのちかけ鯛ぬしや白魚顔鯉にやまけなひ初松魚 赤阪普通見

三味や太鼓で面白ろそふにあそばせるひと遊ぶ人 蠣一是亭余暇

楼 人も白歯のうちから君と黒くよごしたまくらがみ 信陽墨阪山泉

堂 深山つゞきに咲うのはなの雪へとびこむ朝すゞめ 川崎花の家

色は迷はぬこの白ら布で巻ひて見せたひいわた帯 芳山夜梅

きれいさつぱり色気を放れ今しや白妙身をよする 銚子一と声

下女が早起してとぐ米の次第に白むよ明けのそら 上州木崎安濟

猫に小判はむかしの事よ今じや赤ひげ糸りにつく 新富町松金家

(七ウ) 知りて白んと言のはよいが赤ひお顔が見ぐるしい 水原小町奈音

同道 赤い心るをうち分いへど主がうたがひまだ晴れぬ 藤沢筆の家文

磨 八朔の雪の白むく其成解て終にや寒気もつける迄 銚子満丸

かみへたけ長ころに珊瑚すへをちかひの玉櫛笄 千住秀峨

江戸のみづから仕立た花はつやも香もある白牡丹 芝愛香好

雪はさらさら咄しは積るとけりやまた結ぶ岩田帯 銚子松岸都乃

田染 染た白歯をまたはがしたも鉄漿故二度のこの始末 南新二内駄の

千代もまん歳かわらぬ妹背いまは目出度友しら髪 千住家宝茶

干鯛すへ広長のし昆布いく世かわらぬとも白ら髪 銚子本城よし

よし 花にほだされついつかつかと白髪あたりも浮の空 赤阪普通見

赤いしきせを着る身のとがは色と欲とが九分九厘 深川小辰「(八

オ) 実で見染た羽織のいろはかわりやせぬぞへ黒七子 銚子小梅

霞むいかだもみな白妙にはなのゆきちるすみだ川 川さき花の家

黒門の右も左りも白もゝの花をくに多福の弁財天 千寿山の家

赤地錦きを身にまく御代と捨てとゞろく丸い御代 銚子下声

月は満ん満んしらす浪しずかかよう千鳥が淡路しま 牛込保利奈男

きみは五ばんで四角なとこで丸い黒白あらためる 新富町松金家

ぬれぬ先から誰が白壁にかいてぬれたるもあひ傘 恋し川ひと筆

わけも白浪千ひろの海へ立つる操ほもぬしがゆゑ 石巻米屋小元

花にあらしのさはりはあれど赤き心るは醒やせぬ 恋し川ひと筆

口でいわずに目に物言わせ顔を赤めてしらすぬふり 銚子程よし

顔を赤らめはづかしそうもほんに十七花ざかり 文の家たより「

(八ウ) 白と黒との赤りをたてな立なきや世間が真の間 石巻冷呵子

墨と硯りの恋なかなかを親にはなしてもらひたい 鈴木直丸

須磨や明石の白帆を見ても苦勞する程らくになる 天草杏谷

刑法そむいて先非をくやみあかい着物も不学ゆゑ 富貴楼文雄

月に黒みし影法師踏んでしのぶふたりが中田ん圃 石巻冷呵子

愛国なぞとは未だ口ち青い真の苦勞もなめぬうち 池の小村

しかと契約定めたからはかわるまいぞへとも白髪 平蜘蛛小僧自惚

あふたその夜の口舌のすへははないて明石の浦千鳥 睡気増蔵

これ程おもふにさきへはしれずぬしは白浪磯千鳥 小石川好二

赤い心るは私しのみさをほかの色香にや迷やせぬ 富貴楼文雄

苦勞する墨たれ白紙へそめてうれしいむねのうち 高橋松林「(九

オ) 黄金白銀は浮世のたから忠と孝とは身のままもり 平蜘蛛小僧自惚

顔もほんのりあの白ざけに酔てもどるや雛の寄く 上毛安中真可

雨のふる夜にさくきらをさきさみあかき心を墨でかく 茨城青集堂

後凋

白ばくれても根が泥水よにこる言葉にあらわるる めの宇や男万子

白面九尾の白むくでつかさすがたくみの尾も白し 樂山
そらものどけき自由の朝あかき御旗のあさひかげ 神田文の家し
をり

白い肌をば霞にかくし誰にも見へないふじのゆき 上毛安中真可
胸のくもりもいつしか晴て心る月夜をまちあかし 近江屋ヤスシ
馬く鹿けてねこなでこゑでねづみなきする白狐 徒三典知人三斎
南風をば白帆にはらもそして女護のしまめぐり 逸齋飯間
黒いたどんもおこれば赤くけいりやまた白灰と成 神奈川北好良
(九ウ)

伸てうれしいこの黒髪よわたしややおまへの風次第 横山一正泉

赤い色もつ野山の梅も春気すぐればみをむすぶ 浦賀湊清
私しとお前の其中々を千歳かわらぬとも白髪 甲子

わたしやおまへの疑ひ晴て胸もさらしの白もめん 四ツ谷の龜の子

人目白梅かほりに漏れてはつとうき名がたつ霞 銚子松岸連一化
共に色香の変らぬよふに黒地の羽織へひよくもん 堀留文福
米びつむすめに白粉つけて親が極楽子は地ごく 浦賀湊喜多恵
猫をうるとの知らせはなへが牛を売との赤い文じ 南都佳肴
主とりの字が二の字に成てそして赤子で川となる 熱海の湯野保

私しや心でこころをしめて主しを黒縷子帯のしん 小舟町曉松
ぬしにあふ夜は枕の山へポツトあからむ初紅葉 信松春雨亭三眠
(十才)

七点之部
恋にみだれしわが黒髪は結ふにいわれぬ胸のうち 一光坊夢中
須磨やあかして隔てはあれど来ては嬉しき浜千鳥 通四宝栄丸
ぬしは白露私しやうぐひすよ濡て嬉しき夢うつゝ 上総成東町枝

雪
白い黒いのわけさへ立てば顔に紅葉は散しやせぬ 銚子松岸連越

誠
ぬしのくらふは国への為よわしの苦勞はぬしの為 ?狎還

赤くなつたよもふちぎられる杯と手を出す庭の柿 魁連扇要舎開
扇
すいなすいせん黄菊に迷ひこちは白菊女みなんし 戸塚鹿島屋内
とき

赤くした顔紅梅つぼみはるの夜かぜにわらひ出す 富山松葉屋小
松
苦勞黒かね恋路のせきとおもひとつし矢結びぶみ 梅の家薫ル
よはひかさなる妹背のなかは友に干とせの白頭花 千住秀峨(十
ウ)

白浪の寄もよらぬもおまへの心風の便りを松私し 古事付庵人ま
ね
ぬしは白露わしや出る稲穂夜毎毎に実がおもる 信松本芋洗連

狂人
白いくろいのあらそひごとも元は色から起ること 上毛清花
白露の定なき世に宿れる月を受けてたもてる萩の枝 かつしか乙力
須磨ぬ心に夜を明石瀉なひて浮寝のうらちどり 神田文の家しを

赤い仕掛けにまよふた故に柿色の衣でくろうつする 小舟町常信
白たへの雪やふる巢と老鷲の声もつつ?の花霽 銚子梅の家
苦勞白齒もぬしへの操おつるまゆ毛のはづかしさ よし此
耳にふへの音目にすさまじく空に蒸氣の黒けむり 堀留堂亭芸升
嘘がありやこそ誠がわかる雪の白鷺や目に立たぬ 牛込斜月
かよふ恋路も今朝白妙となつてうらみしゆきの里 越中高岡大野

如石(十一才)
積り積りて身はしるかさねまるびあふたる雪の竹 梅の家薫ル
白らぬふりしてアレ憎らしいすねて北向く磯の松 堀留文福

三三九度のそのさかづきに顔もあからむゆふ日暮 紙乱亭若蘭
くろふ墨絵のあの富士山をいろに駿河と恋ひの暗 南新一内駄の
田楽
隠岐に居る舟私しや白浪よいまだお主になあわじ嶋 越中高岡稲

積万真

白い地肌へうす紅さした蒼み明けたやはつぎくら
浪花洒落齊一

名のみ残し黒木の御所もむかしわすれぬさくら時
牛込閑人

梅は飛梅桜猶更とも白太夫が時節松尾も千代の首尾
越中高岡正

実明石てあれはづかしと白齒をかくしたそでケ浦
堀留堂亭芸升

白い心も血に交わればそまりやすひがひとのつね
銚子程よし

浅黄ぞめでももと白ぎぬの六ツの玉川みずそだち
越中高岡河内

内の白藤じやとなりの柵に忍びざきして契らるる
山富貴

十七の年は取てもまだ恥かしい二十三迄待てくれ
上毛山石二三

秋風ふくから小ばらが立田顔はほんのりちる紅葉
多賀亭堂志太

猫の秘実の尿管のわなへ掛られましたよ白ねづみ
水原菊亭はつ

黒い羽をりに白紋つきであかいけだしは権じるし
上毛安中蛙吟

黒髪乱してじれてもみだがぬしの浮気にや憾なし
梅松山竹枝

恋の山路と降る白雪はつもりや積むほどなほ迷ふ
四季廼舎松寿

恋の一字に浮名をながしいまはふたりがとも白髪
加賀金沢越田

色は赤いが心はからいなめてみしやんせ唐がらし
新ばし源遊船

京から習つて織出しはじめ顔も赤地のにしきばた
水原小町奈斎

雪のはだへに白地の浴衣かけもすゞしきなつの月
信州松本山笑

白雪の中に三人の子を労て末は世に出る源氏方 雁舟

色は黒くも孝ある烏すなでか恋路のじやまになる
君津の半痴

眉毛おとしてかね黒くるとしめて嬉しきいわた帯
川崎醉眠

堅ひちかひの岩間に咲て見せるこころの赤つゝじ
明石亭真

主のためなら身を粉にしても活計たいぞへ共白髪
醉夢庵中橋

月のかゞみに身の潔白をうつす嵯峨野の琴しらべ
信州松本山笑

いつか庵崎人目の関屋ぬしはしら髭私しや待乳山
神奈川新泉内

松と云ふ字をさかさに読ませ末らや高砂とも白髪
田名宿阿房

知ぬいろはも今ふ力キケケコ屹度わすれぬ五十音
水原町奈斎同

郭公鳴いた方をば詠むれ見れば最早東雲赤わたる
上総成東町の

春雨に赤く芽したあの芍薬は男蝶迷はずした心る
富山中村屋若

人はソレかと未だ白ふしもいつか柳ぎの袖をひく
讃岐高松木村

袖にしづくの涙だのあと赤きこゝろの裏のなぞ
香烟情史

いる香変らで奥床しきはぬしのこゝろに黒はをり
堀留百花燕升

黒いおまへの心ろでわしを疑ぐり深へも程がある
鶴の家れい

私しの心をあか石て置にそれじやお前は須磨の浦
上槿福地岩次

親衆に一寸こゝえと呼ばれた時に胸に覚への赤い顔
礪川出鱈目

白糸の心ろ一すじ色気をはなれ実意競の友かせぎ
堀留百花燕升

つなく赤縄によりうちかけて堅くむすんで友白髪
千住山川

腹黒な主と知ずに誠をあか石親へ対て須磨め義理
千住出見助

憂にたいぬは世の人こゝろ兎角黒にはそめやすい
梅柳庵清香

毒にやならないお呑よお酒赤くなるほど品がよい
鶴の家れい

忍ぶ恋路にあの黒くもが月をつゝんで首尾させる
薄情舎床慢在

くるふ仕とげてたがいには堅く結んだ繻子の帯
千住山川

人目しのでちぎつてみたい黒堀こしたる庭の梅
木崎吉田家一

糸

君の御幸のありがたなみだはれて赤るき鄙ざくら
香りゆかしきアノ白梅をたれが手打かにくらしい
(十三ウ)
人目しのんで紅ふで染て赤きこゝろをふうじぶみ
川崎松吟
吾妻橋宇さき

安

赤きこゝろに遂ひほだされて親に仕ふる道はやみ
吉岡極楽亭遊

穴

顔はほんのりもつれたかみのわけて目に立雪の朝
満堂一致
顔を赤らめはづかしそつにはいと返事も口こもり
春風亭秋香

能留

不二のたかねのアノ白雪も解くに由なき仇あらし
本所桂廼舎美
露と添寝をたが白ら萩よ月に見られてあらはれた
れんがのくれ

竹

四海白なみしづけき御代になぜか自由の風が吹く
信墨イツヘツ
無事で帰国と見送る蒸気あとにのこせし黒けむり
れんがのくれ

志

赤い衣服着であか恥さらしこの世で地獄の懲役場
浪越雪廼舎素
白雪も今朝は嬉しく解たと見て姿見たよ富士の峯
讃岐高松木村

梅亭

あれさおまちよ未だ宵月よせめて東の白らむまで
湯しま東水
(十四才)
藻屑と果たる白縫姫もきみのためなら是非もない
本所桂廼舎美

能留

黒塗の三齒はくより箱屋を連て軽い薄齒で左り棲
牛込閑人
赤い花より常盤の色をそふておぬしにちぎる千代
信墨イツヘツ
へ
四海白浪かぜふくときは船じやあぶないおか蒸気
道化家ヲレッツ
ク
堅くちぎりしふたりがなかは添てとげたる友白髪
伊勢町新井清

志

勤する身はする薄墨よますます黒つをするばかり
浪越雪廼舎素
月夜がらすと白ばつくて居れど隠せぬ朝すゞめ
浪花洒落齋一

笑

私しや黒ぬり足駄となりてのせて程よくかくし妻
津久戸牛鹿下
馬
玉のかんばせあの黒髪を由井しいなせの島田まげ
有隣舎不孤
君とわたしは白紙にふでよ黒う赤間のすゞりいし
深川小辰
黒人めかして白人のくせに生いき百々一赤いはじ
水原緑のきん

来

あれさ憎らしアノ白梅にまゝにしからむ鳥かつら
浦賀の磯丸
赤く成つても身の錆ならば細くも繋がるくさり縁
芝愛吞好
萩がこぼさぬアノ白露にぬれてうれしいつきの縁
水原足袋者都

来

顔もよし田で気も静岡にいろも白々富士びたい
芝愛吞好
黒き頭きんをかぶつた人は赤い四季施で島すま居
上州木崎安済
むねをあか石やすへ松島やきつと夫婦にやなり駒屋
浜の家千島
白雲の掛る疑ひ今朝すつぱりと晴て嬉しき山の雪
藤沢梅の屋有

米丸

宵からまつ風立白浪にもまれて千鳥はなきあか石
水原足袋者都
来
夫と死んだにお白粉つけて後家は操をぬりつづす
上毛木崎鑄查
血ぬるさくら田花降るなかは仇を赤眼炎つるぎ
重山発塵

堂

ポツちり海棠の露ほど赤く雪の膚へのみのあと
信陽黒阪山泉
(十五才)
十
点ノ部

来

貞女めかして黒髪きつたあかい信女かしろいかほ
名古屋生意気
色気をついたるあの紅梅をいつか咲せるはるの空
石巻米屋小元

来

おもひ染井はたゞ君ばかりあかい心でさくつゝし
浜の家千島
うそのなみだでツイ白粉がはげてあらはす化の皮
菊廼家まかき
ぬしと末広赤縄のいとをまるくむすんで家内喜樽
千住家宝茶
主にや自由に鳴海のわたし赤いこゝろを絞らるゝ
有隣舎不孤

柳さくらのすがたにはぢてはつと赤らむ花つばき
眉毛おとして白齒をそめてふたりで黒うをます鏡
垣のしらゆき卯花くだし君をまつ夜のほととぎす
だいこく柱といはるゝひとももとは子がいの白鼠
俄(十五ウ) 千住自回亭男

白く言はれぬ人目の関所悟ておくれよ私しがむね
大常盤楼内帆

舟 面白き花見盛や隅田の土手に富士の夕日も一都会
越中高岡正村

半泉 楽に赤心つくしたすへがはれてめつとのとも白髪
紙乱亭若蘭
白雪の中も厭わぬ恋路の道は通ひ詰たる九十九夜
相州一之宮万

楽 私しが去れりや定めし赤が乳をたづねて泣である
柳町金の家
千代に八千代にむすぶの神の合せかゞみが友白髪
浦賀の磯丸
したん黒たん又たがやさんほんに夫唐木がもめる
水原菊亭はつ
奥でにあげたあの白かゆも千代忠義の名をのこす
蠣二是亭余暇

楼 赤らむ顔をば袖にてかくしといておくれよ私の謎
？狎遠
赤い御膳で女に成つて小角豆ごぜんで子が出来る
芝源助町久野
箱入育ちのあの白扇も身をばやぶればすてらるゝ
幽霊亭柳下

(十六才)
生るの死のと真ツ赤になつて白とくるとの大軍さ
満堂一致
応と返辞も赤らむ顔をそむけてのゝ字をゆびで書
石巻米屋小信
赤らむ顔から浮名が立た私しや一人りで気を紅葉
横濱鳶迺家桂

枝 主の久留米を本ばとおもひはでにきかざる白薩摩
表神保町宝井

家 泥にすんでも身は潔白とあかくさきたるみず芙蓉
牛込斜月
こつして浮名が高砂なればそはざるまい友白髪
下谷翫月
宵にあおふと嬉しの森で心ろせき屋をしらひげか
山家寿

花 見かわす目元のあからむ顔を一寸かくした袖屏風
銚子松岸連一

橋 みだれそめにし私がくる髪にうらみをつげの櫛
恋路川かけ
みだれそめにし寝て唐崎のまつのしろつゆ夜の雨
睡気増蔵

白いか黒いはお前が承知赤の他人ぢやあるまひし
満堂一致(十六ウ)

縁の薄ずみ及ばぬながら手に手つくして黒うする
銚子波の家千

鳥 こゝろ赤城の社にねがひえんをむすぶの神だのみ
魁連柳陰子更

柳 あたりみめぐりたれ白らひげと心綾瀬にしるぶ塚
掘留文福
人眼せき垣ながむる花はさきじや白菊つゆほども
重山発慶

野辺の白菊かりすてられて土に思ひの根をのこす
雁舟
赤いこゝろを自由の風に咲てちらさぬさくらばな
信松由縁屋紫

こゝある鳥をいやがる人は親に不孝をするである
君津の半痴
楓葉の風に枝をば放るゝとても赤心は替りやせぬ
明石亭真

ぬしにあき風立田と聞てかほに紅葉のはつしぐれ
酔夢庵中橋
娼妓の誠とを目黒にのこし義理となさけの比翼塚
神奈川新泉内

小作 おほこおほこと言ふうちいつか乳は黒鯛はらはぶく
本郷武野冬

驚(十七才)
どんな白むく貰たとでも洗ひだてすりや疵がつく
田名宿更科太

月 赤間が関所をほどよく通り主にみさをを筑紫たい
横浜登法華
寺の大黒もとしるぎつねいまはひつそり尾九住居
水原小町奈斉

同道 心黒髪千すじにみだれいふにや結れぬものおもひ
信松由縁屋紫
わたる恋路は糸い代かけておもひつくだの白魚舟
深川浜九里

ふとした赤縄がまことと成て今じや嬉しい新世帯
吾妻橋つさぎ
白く咲てもこゝろは黒いどこかとげあるばらの花
盤城国大垣龜

太郎 黒の羽織もよふかん色とばけりや狐も化かさない
稻荷山南桂
紅もさしたりお白粉したりまよふにお客も色ガラス
四季迺舎松

寿

親のなげきも白齒のむすめまよひいでたる恋の間
はなにたわむれ面白さうに酒がふう切るはつ言葉
(十七ウ) 足利一笑艶史
深川浜九里

家

うきな立のもわしや白浪よいつか治まる四海なみ
表神保町宝井
誠とつくせし赤心とゞきぬしにみめぐり気は隅田
白ひ齒をする息子をもてばいづれ親父の苦勞もの
赤心報国私たしの念がとゞけば自由になるからだ
かわるゐるとは露白菊のたてたみさをも秋のなぜ
かねがふるとはこの白雪さほんに見ことな銀世界
あさいころの私しや白露にぬれにきたぞへ浮気蝶
つゆの情けにしつぼりぬれて赤く咲たるさくら草
初手は前からまた後ろから這入る夜打の赤穂義士
積る思ひもあの白雪もとけてうれしいけふのあめ
赤い娼衣についだまされてあかい御仕着せ佃しま
(十八ウ) 来里安閑坊

安

恋の閑路のアノ白梅はしのぶたよりにや四ツ目垣
根岸竹葉舎昌
実を宮城野たれ白いとこゝろうれしく信夫夜半
顔を赤らめはつかしそふに笑ふ海棠のひらきそめ
主はしら紙私しや草紙がみひとの白ない黒ふする
鬼の居処もない皇御代にさすとは野暮なる赤鯛 吾妻橋うさぎ
こいの手管はまだ白梅と思ひし由だんを手折るゝ 赤阪丹後町宝

梅

つらい勤めを引してもらいけふが祝ひの赤のめし
蔵前大太刀の

小僧

白妙の何処が空やら降此雪に帰るなどゝは実が無
白ひ黒ひもしらなへわしをつたがふ主こそ腹黒ぬ
忍んで来たのにぬしや白川のにくや夜船の高軒き
水にこがるゝ身は白魚舟もゆるおもひの遠かゞり
根岸竹葉舎昌

安(十八ウ)

白いか黒いか情けも義理も知てうわ気はさとの癖
赤阪丹後町宝

梅

ぬしの手管と私や白鷺でふかくはまつたどろの中
白くさし込むいし山寺にはれてあふみのあきの月
吉岡極楽亭遊

穴

風がこわいとうわさをすれば黒ひすがたで靴の音
蔵前大太の小

僧

月に逢せの黄と白菊がいろをあらそふ夜るのかけ
浮気さくとは私しや白露のとめておきたい女郎花
親に孝あるあの鳥でさへこいに情なき明けがらす
白糸の染て仇なるあの小紫き今は目黒のひよく塚
赤いこゝろを矢立の墨で御所のさくらに書たひと
やがて花さく自由な風に赤きこゝろで実をむすぶ
玉津島磨く人丸世は住吉と面白そふだよ和歌の道
(十九ウ) 水原足袋者都

来

かけで解とはつゆしら糸で縫はす男のはか多おび
ポツと赤らみはつかしそふに山へ隠るゝ明のつき
とし増盛りを白齒のまゝで苦勞するのも親のばち
おきの白帆と私しのからだどこの湊につなぐやら
人の詩歌句をぬすんで出して新聞元稿と赤い文字
湯しま東水

堂

赤の他人と思ひはすれど反古にもならない此誓紙
本所稜廼舎美

能留

苦勞駿河の富士をば跡にのぼりや甲斐ある身延山
蠣二是亭余暇

楼

眺め見わたすアノ白帆舟いつかこなたへつくだ沖
墨阪越後家能

無子

主の帰りを布団の須磨で今かとまちばけ夜を明石
信州須阪福楼

可繼

瓦斯や洋燈であかるい廓わも迷ふて黒をする恋路 浪越雪廼舎素

志(十九ウ)

ぬしに近江路積白雪とともに解きたいぬれごろも 香烟情史

川崎遊夢

赤いしるしのあの日のまるは御代を治める国の旗 堀留百花燕升

日本だましは実に勇ましや赤いころの志願兵 堀留百花燕升

ひらけゆく御代罪果のひとも公判白洲に弁護にん 堀留百花燕升

年増ざかりを白歯でおめて鯨づつるたひき眉毛 千住出見助

顔を赤らめはづかしさうにつゆと添寝のふか見草 信松由縁屋紫

空にあき風龍田の川にあかいですがたでちるもみぢ 堀留堂亭芸升

鳥の声さへ私しや白梅の薫りもらさぬむろのうち 同人

赤い心ろの珠にまじわりて真とつらぬけ御代の民 梅柳庵清香

逢ふて赤らむふたりの顔を粹に気てんな灯とり虫 静岡かはせ割

巴 後家で白歯で小意気な住居聞ばそれしやの手取者 鶴の家れい

(二十才)

十五点之部 墨と硯のその好い中もにじみやせぬかと黒うつする 銚子小梅

春のころも未だ白雪のうちにさかせたむろの梅 信松由縁屋紫

赤きころは散りぬるのちも残るさくら田人の花 神田梅の家は

つね 赤い日の丸輝く御代になぜか苦界はやみぢややら 信墨イツヘツ

へト 主しに此身を私しやなげ嶋田とけて結た黒もとえ 堀留堂亭芸升

主とわたしは漆の中よ黒ふ仕とげてはなりやせぬ 来里安閑坊

見れば齒さへも未だ白魚の子持とおもへぬやさ姿 春輝園

無理をかなへた其神様へとも白髪を追ひねがひ 芳山夜梅

赤らむ顔にも嬉しく見ゆる笑ふかいつの夜のあめ 梅柳庵清香

国につくしたその赤心もちりて消えゆくにしの海 蠣一是亭余暇

楼(二十ウ) 赤い心も主しや白雪のつもるはなしもきくもせで 五軒町村瀬

妻子ある身と私しや白露のぬれて今さら口おしい 堀留百花燕升

便りなき身を誰白ら藤の結ぶ縁糸があればよひ 芳山夜梅

白魚のよふな指にてかいたる文で嘘を佃も水臭い 千住自回亭男

俄 赤い着物を着て目がさめて今じやころも佃しま 上槇福地岩次

郎 不二のやまほど苦勞を駿河たのみ甲斐ある地藏嶽 水原月雪亭花

楽 白山の露と消ても其名は降く残る枝葉の盛る御代 川崎桜友

白人じみても私や赤ぬけた人と黒ふがして見たい 柳町金の家

楼 義理にせかれたあの鶴ヶ岡とふころを白拍子 蠣一是亭余暇

竹 顔を赤めてうつむく百合にそつと手をだす誓の蔓 れんがのくれ

堂(二十一才) ぬしの赴した越歴気を感じ黒くなつたよ乳のさき 信陽墨坂山泉

開けて語るもこの鉄がねの門が黒ふのペンキぬり 芳山夜梅

君に忠孝赤穂の義士はのこるまつ世の香名手ほん 水原小町奈齋

同道 白雪のつもる恨みも逢夜は晴て今は朝日に解る胸 千住秀峨

文明開化のあかるい御代に私しや日影の身が気楽 深川小辰

赤す中にも苦をかけまひと思やすこしは嘘もつく 新富町松金家

霜にたゆまず雪にもおれぬ梅は百花のなかのあに よし町小奴

売られくるはの血に交りて赤いしかけのうき勤め 銚子文字作

白雪の積るおもひが又癩の種泣て今よひも明石橋 魁連柳陰小更

柳 添ひ寝に乱るゝこの黒髪がみゝにかゝりし明の鐘 信松春雨亭三

眠 花に心をわしやおくやまよぬしは白雲うはのそら 水原鴨川亭浮

沈 主は白髪わしや梅若と義理にやならべるまくら橋 菊廼家まがき

(二十一ウ) 親はかくとしらはの娘いつか覚へしこいの文字 信松春雨亭三眠

月のよこぐし黒髪やまもゆきに今よひはうす化粧 恋し川ひと筆
誉れたかなる気も大石がこゝろ赤穂のゆめのあと 神田梅の家は
つね

鬚もよし町色白々とたれもすきやのはですがた よし此
しのぶつきかけ誰白梅のかほりこぼした深夜嵐 神田文の家しを
り

白い黒いをあらそふ席は赤くなるほどかどがたつ 藤廼家南子
いろは紅葉も時さへくれば赤い顔してちりぬるを 近江屋ヤスシ
ほかの色にはそまらぬわたしやみも隈なき白牡丹 喜三南空者
うそを佃とわしや白魚舟もゆるおもひの遠かゞり 徒三典知人三

杉田蒲田のしら梅よりもぬしと小向井あかくさく 藤廼家南子
今年しや豊年このおゝゆきよ白くいちえん銀世界 横山一正泉堂
(二十二才)

色をはなれて気をおく山に咲て気だかき白つゝじ 信松本芋洗連
狂人

萩と添寝のこの白つゆをにくや朝日にこぼされる 甲子
君は開化の大黒ばしらきつたひこねにはながさく カキニふもと

庵 黒髪の乱心をつたなき筆に書ておもひをつげの櫛 魁連扇要舎開
扇 末に添ふのを私しや松島よ思ふ心ろをあかしがた 上総成東町枝

雪 おもふおかたにわたしの心赤くうつりしくちの紅 山口軒巴城
春のこゝろもまだ白梅のかたいつぼみのうちが花 信州松本山笑
こゝろも弥生に水あげされてとこで赤らむ桃のはな 小舟待ち虎眼

赤いといふのを白ら地に見せてとかく黒みし人心 満堂一致
赤いこゝろの丈をば主にわつて見せたいむねの中 木崎徳林楼内
しづ

いろのいろはも未だ白梅の恋路にや蒼のはな娘 根岸竹葉舎昌安
(二十二ウ)
二十点之部

つもる白雪苦説もとけて朝日かゞやくねやのまど 本郷南香誉史
初手はくるふでながたびあかく末に白着る榎木炭 浦賀まさよし
堅くむすびし黒縹子帯もさわりや解そなむねの内 銚子満丸
一夜しつぽり濡たる雨にほんのり赤らむ朝ざくら 浪越雪廼舎素

赤いこゝろをぬしや白菊で来る度黄菊な事ばかり 銚子梅の家薫
赤い襦袢を羽織にかへてくろくそたいこの白歯 浪花洒落齊一笑
わたしや黒縹子主しや白博多帯も解けあふ腹合せ 千住家宝茶
ふけて松風身にしむ千鳥またもや淡路になき明石 水原小町奈齊

同道 赤く染たるいはひの国旗まるく治まるきみが御代 イセ貫女
赤い着物は元よりかくこ二人りつながらるくさり縁 桃月庵継三郎
(二十三才)

人 白妙の雪と咄しは積るが常世時よりや緩りと語合 千住秀鷲
「著作道人曰ク。つもるが常だが。下紐の解るといふ反対があるか
ら妙サネ。又曰ク。白雪之調。自有一唱三嘆之妙

地 白い肌をばちらりと見せて笑ひかけた床のむめ 魁連扇要舎
開扇

「著作道人曰ク。をすのひまもる花の香にも増りて。いとえんにな
まめかし。又曰ク余音鏗鏘

天 赤穂名産気もはり磨灘義士とつめこむここのもの 蠣二是亭余
暇楼

「著作道人曰ク。ヨカロウ処力塩加減。美味充溢感服シマスゾ。又
曰ク。音調清亮。呼応亦自緻密。

軸 半分いふては赤らむ顔を酒にまぎらすこひのなぞ 沖の家春帆
(二十三ウ)
御届明治十七年四月十二日
? 版出版

定価金拾五銭
編輯兼出版人

深川区安宅町九番地 宮島徳兵衛

発売元

中橋東仲通下槇町十一番地 商弘所

大売捌

日本橋区通四丁目 金桜堂

大売捌

日本橋区通三丁目 秩山堂

大売捌

日本橋区若松町廿番地 文盛堂

大売捌

日本橋区通四丁目六番地 松坂屋

大売捌

日本橋区馬喰町三丁目十四番地 自由堂

大売捌

信州松本南深志町吉番町 窪田重平(二十五才)

四十八 『新選登、以津大津絵ぶし』

明治十七年四月二十二日御届。長谷川忠兵衛編。請求番号：特 60-17。

待どこぬ夜は写真を出して愚痴な様だがき人り言(一才)

音信(たより)じゃないかと戸を明て見れば新聞配りの鈴の音(一ウ)

新聞投書でそしられながら思ひ切られぬ恋とよく(二才)

堅い漢語を遣ふも道理橋や家(うち)まで石になる(二ウ)

おまゑに逢ふたび我俣いふもつらひ勤のうめあわせ(三才)

つかれくるはのあの里雀すくな竹にはとまりがち(三ウ)

支那や朝鮮はおろかなことよ世界に輝やく日のひかり(四才)

二人りが浮名を大きな声で新聞売子のつらにくさ(四ウ)
直な御代にも横文字ヨ学びや無理も徹らぬ事はない(五才)

留て置たいは山々なれど無理に帰すもぬしのため(五ウ)

文の便りを待雁よりもかへる乙鳥のつら憎ヤ(六才)

美しくづくならおよしなはいナこわれがちなる色硝子(六ウ)

遠くて近きは男女の間と知つて居ながら深くなる(七才)

近江八景じゃ私しやなけれどせゞのないのでことたりぬ(七ウ)

君を見送る岸辺をはなれ走る蒸気もなきわかれ(八才)

ぶくぶくして居てもあのガマぐちはきちんとメリが附てある(八ウ)

権妻が馬車の別当に慕(ほれ)ては見たが主と家来で俣ならぬ(九才)

道は一ト筋三筋の街を照らす瓦斯燈軒らんぶ(九ウ)

住馴し古郷を離れて波濤を越て遠い異国で供かせぎ(十才)

馬車や蒸気じゃ便りが遅い電信線(はりがねたより)にしておくれ(十ウ)

《以下十丁は大津絵節につき省略》
(広告)

御届明治十七年四月廿二日

価三銭五厘

編輯兼出版人 神田鍛冶町六番地

長谷川忠兵衛(裏見返し)

本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

四十九 『月並発句都々一集』

第一回明治十七年四月一日出版御届。第二回明治十七年五月廿日出版御届。第三回明治十七年八月廿五日出版御届。宮沢宗吉著。請求番号：特 59-864。

本書は一八八四年の出版である。今から百二十八年前である。著作権は消滅していると考えるのが常識的判断である。

月並発句都々一集 第一回(表紙)

月並(発句。都々逸。)贈序

昔者孔子詩を修めて鄭衛を削らざりしは當其風を觀俗を察するに足るを以てのみならず蓋し亦世教に裨補する鮮からざるものなればなるべし貫之嘗て古今集に題して歌の能く力を入れずして天地を動かす目に見えぬ鬼神をも哀れに思はするを言へり去れば詩と云ひ歌と云ひ皆是平天下の一大器械にして覆載間の欠くべからざるもの也然ども詩は四角にして堅く歌は丸けれど粘く俱に小兒婦女子の口に適はざるを奈何せん只都々一能く丸くして和かに安くして甘し故に上王公大人高位貴族より下は車夫馬丁蟹戸鯨奴に至るまで謡はざるの痴漢なく作らざるの阿房なし唯に小兒婦女子の氣に入り心に適ふのみならざるなり而して其時勢を諷ひ人(吉才)情を穿つに至つては百鍊の顕微鏡を以て万象を覗ふよりも著く億萬の探偵掛を派して秘密を探るよりも確く口得て言ふべからざるの妙あり況や織手絃を弄して紅唇媚び唱ふるに及では其勇三軍に將たり百萬の勁敵を掌上に弄するの武夫も時に或は肝魂を挫がれ泥然として海參の如きあり其智籌を帷幄に運し勝を千里に決するの謀士も亦為に鼻毛を讀れ有頂天まで登り詰るものあり然は則其風を觀俗を察するは遠く詩に超乘して鬼神をも泣しむるは遙に歌を凌駕すといふべし此頃粹土通客達相集り娛樂社といへるを設け月並都々逸会を起し以て之を印行に付せんとするに際し余の無粹を以てせず巻首に一言を題せよと乞はる其実迷惑なりと雖も強て辞退もせずして是等の請に応じ敢て通客を氣取る是(吉ウ)亦當世の風か抑々吾地都々一の会ある明治十年に初まりたりしが當時之が首唱を為せしは實に松本新聞の社員たりき爾來此道漸々四方に蔓延し今復た娛樂社の起るに逢へり去れども其起る實は今日に起るに非ず皆是新聞社内にして遠く明治十年に胚胎せりとせば此娛樂社なるもの實に吾地都々逸会の開山にして粹教の鼻祖なり孔聖紀賢其れ亦後に瞠若あらん嗚呼亦盛矣哉ト四角張て云爾

蜂狂蝶戲堂主人誌

蜂狂蝶戲堂主人前の序文を放出し置何れへか飛去りし跡にて熟々之を見れば唯々月並都々逸会と謂

ひしのみにて更に発句のことに言及ばず是れでは本会の趣意に違ふと怒て見ても跡の祭りサア序文を直せ削れと騒ぎ出(吉才)せしがイヤ待て暫し是れも主人の名に背かず定めて狂ひ戯れつゝ綴りし故のことなるべし先づ堪忍をして置んと爰に前序の補ひまで一寸口上書くのごとし

異妙道人(式ウ)

月並(発句都々逸)第一回

都々逸

点者 春雨亭三眠

題

初恋 帰雁 藤

三点之部

色を含みてほゝ笑む梅の娘心はいぢらしや 藪原佳山

思に沈みし恋しき君とうかんで嬉しき今日の首尾 南深言夢通

(十一ウ)

蕾のおまへに下紐とかせ末は実をもつ事はしめ 北栗林愚雄

不斗したことから初恋風をひめていわれぬ結び髪 北深志一舛

初の恋路に氣を紅葉ばよ鹿と契りがして見たい 下諏訪美すゞ

袖を引かれて赤らむ顔は間夫があるとは思はれぬ 藪原月夜

長く育た常盤の松も藤にからまれ色替り 北深志一舛

延ながら咲てからみしアノ藤の花手掛り貸たが仇となる 西高遠

片山

初恋のどきやう定めまだ其内は嬉はづかし顔に袖 鳶木好静

高い処とて苦にさんすなよ藤も盛りにや手がとゞく 鳶木吾齋

色氣づくまで待遠なれど情の長きは藤の花 高家歳洲

朧月夜はかげだに見へずたしか一声帰る雁 南深一(のそ女)(十

二才)

ふつと見そめてはづかしそうにちよいと袖引初恋路 中川手竹水

操正しきあの松が枝にからんで誉れな藤の花 島ノ内川島

おつにからんだ情がもとで長く咲たる藤の花 北深七如柳
老たながらも身振りはじめん月を洩さぬ藤の花 豊科賀城
つらいわかれも浮世のならい花を残して帰る雁 南深言笑
花をたらして操の松にからみ附たる藤のつる 北深七玉光
一寸逢初遂深迷ひ馴れぬ恋路のうき苦勞 大妻闇雲

雁を見てさへ故郷恋し花も霞も旅の空 今町梅露
君を見初て恋せしことは心にはぢては語られぬ 西高遠松旭
主が松ならわしや藤のつる真と思ふて身をまかす 笹部積「十
二ウ」

世捨人さへ花さく春を待にひきかへ帰る雁 南深吉のそ女
枯木のわたしに実あるものは藤よりまさりし花はない 遊廓小
き

主が松なら私しや藤の花深くからんで千歳まで 南深吉燕之
花を見にくる燕にかへて帰る雁がぬ気がしれぬ 贅川一服吸升
言伝してやるあの雁金の文も塀田のかた便り 麻積喃士
恋の苔みのあの藤の花届かぬ手先のやるせなや 麻績巴舌
帰る雁がね見送る空にふり来る今宵の涙雨 諏訪永明湖駒
からみ付ほど咲でもないが人の立よる藤の棚 贅川桃紅
恋の重荷を初めて背負ていつか出雲でおろしたや 奈良井枕流
春と夏との中垣て花の後殿するはふじ 贅川羽月「十二才」
束縛されても浮気はやまぬ余所の籬へ藤の華 奈良井義方
恋じや二人で落れどもよ下りながらも藤は咲 北深志朝寝防
あきの来る頃また顔見せて恋し最中に帰る雁 北深志自由生
からみついて油断がならぬ主は白藤ちりやすい 奈良井春喜
日頃の思ひを只一と夜さに心落つく新まくら 入山部花廼舎
口にそれとも言ひ出しかねて風が気転の新枕 北深志自由生
誰も花には思ひを残すそれを見捨て帰る雁 上田ちどり
松の情に此身をまかせ深山住居の藤のつる 梓村東山夢花
ちらと見初めし花見の戻りそれが縁にて今日的首尾 福島蘇山
風にさそはれ谷間の藤も水に写して見る姿 北深志夢助「十三
ウ」
是はと白眼でもつ三年目やつとこらさでおつゝいた 北深志自由

生 佐保姫のかたみに残せし鏡の池を振袖姿で写す藤 南深文の舎晚
塘 私しの眉毛とあの帰る雁落るあてどは何処だやら 藪原佳山
はなを見捨てぬしや帰る雁又の逢瀬は秋の空 大町風月
しつぱりと濡て山越あの雁金は華の雫にあふたやら 下諏訪美す

千年までもとあの藤が枝は松にまことをからみ咲 北栗林愚雄
広ひ世間も束縛されて自由に咲ない棚の藤 藪原佳山
泥田離れてもうよい頃と心濁さず帰る雁 鳥木正風
来れば帰りが有とは知れど雁の名残もおしくなる 北栗林愚雄
やばなお客とあの棚の藤ふられながらも華が咲 鳥木好静「十
四才」
夜の昼懸ても海山越へて深ひ思ひぞ帰る雁 島ノ内川鳥
雁は何国へかえろと俣よ主は一生かへしやせぬ 西高遠松旭
紫わさめやすいとて譏りもしよふが私や枯木で藤をすく 塩尻竹

女 人の心もうき立春を空に鳴き鳴き帰る雁 贅川一服吸升
松の千年を我物顔にからみしめたる藤の華 贅川和漢蘭
顔を赤らめ恥かしそうに娘心のとやさき 贅川転々社
笑はしやんすな枯木じやとても藤が巻つきや華が咲 北深志朝寝
防 鎌足さんより葉に葉が茂り仰れまするよ藤のはな 贅川羽月
見ても涼しき女鳥羽の滝に小首のばして藤の華 入山辺弘
恋と云ふ字を初めて覚へどうすりや忘るゝ此一字 贅川羽月「十
四ウ」

初の逢瀬に幾千代掛て嬉しき妹背のともしらが 南深吉庭女
白藤の小首のばしてあの泉水に写す姿の水鏡 文の家たより
くちじやいはれず心で惚て曇る琴の音落る爪 北深志夢助
五点之部
それと岩根に身をよりそへて水を鏡の藤のはな 長野一笑子
かうも心は相生松に八重にからまる藤のはな 下諏訪美すゞ

胸の浮橋互にかけて渡り初めにし恋の道 鳶木正風
名残おしみて帰りしかりに蘆は芽をふく難波渦 豊科吟丈
桃や桜にや浮気をやめて盛りゆかしき藤のはな 南深言一笑
高い心を蔓ひと筋に思ひからみし松のふじ 鳶木正風「(十五才)」
細き思ひを幾千代かけて松に色さう藤のはな 大妻闇雲
初の恋路を行生娘は筆と紙とが道しるべ 贅川一服吸升
浅い深いも白歯の娘渡り初たる恋の淵 贅川和漢蘭
主が帰りてあの藤見ればからんではなれぬ憎らしさ 諏訪永明大

川
帰る時さへ鳴雁がねは嘸やつらかる旅の空 贅川桃紅
春は行ても最う来る夏をふぢは笑顔で松の枝 贅川鶯語
日毎日毎に笑ひし山のはなを見捨て帰る雁 大妻梅の舎
色けづかないあの白藤は誰になじんで色を持 北深志自由生
ふぢも此頃開化をまねて電信柱にからみ咲 入山辺花の舎
顔も見せずし声のみきかせ高く気取て帰る雁 贅川鶯語「(十五才)」

ウ
義理と情を心に掛て渡り初たが縁のはし 大妻梅の舎
痴話や口舌も月夜の床に夢を覚して帰る雁 安原清旭
深き思ひを墨くろくると染て恋路の文初め 上田清風
華を越路の白雪と見てしばしとまれ春の雁 梓村東山夢花
近江といふても栗津の此身便りや堅田で帰るかり 福島蘇山
華は散りても思ひの種を残す梢のかゝりふぢ 大妻闇雲
七点之部
おぼ子心にまだ言ひ兼て筆に恋路の文初める 豊科吟丈
堅ひ心で取附らかは千代も離れぬ岩のふじ 鳶木正風「(十六才)」
渡り初めたが恋しい底の深さしらぬ恋の淵 西高遠仙遊
つきぬ思ひを堅田に残し鳴て越路に帰るかり 大妻闇雲
それと岩根に咲たる華は心糸路とかゝる藤 今町梅露
恋といふ字をいつしか覚へ誰に試験をよさせるやら 南深一燕之
届かぬ恋路に底意地立てもつれかゝつた藤の花 贅川桃紅
恋の初瀬を互に踏でふかくなる程ぬらす袖 大妻問答
廿三でもまだ初恋の思ふことさへ言ひかねる 南深一文の舎「(十

六ウ)
人
思ひかけはしこはこはながら踏も習はぬあとやさき 和田無眼堂
地
身をば投かけ岩根の水にふかき色香を写すふぢ 豊科吟丈
天
色も由縁の藤紫にや赤き心も奪はるゝ 大妻楳のや
軸
帰るとていそぐゆへにやく字配りもあとやさきなる雁の文 春
雨亭三眠「(十七才)」
明治十七年四月廿一日出版御届
同 年五月 出版
〔定価金十銭〕
著者兼出版人 長野県平民
宮沢宗吉
信濃国東筑摩郡松本
南深志町百三番地
発売所 知新堂「(十八ウ)」

月並発句百々一集 第「(表紙)」
月並発句百々一集贈序
言詞の音調は花なり学問の識力は実なり音調に富めども識力に貧なれば譬へば猶茶?のごとし其花美麗と雖ども野矣誤力余りあれども音調足ざれば縦令ば猶映日果の如し其実茹ふべしと雖ども陋矣其識力余りありて音調に富む者僅に以て桃李梨梅に喩ふべし夫の百々一発句の若き皆然らざるなしと是余の嘗て発句兼百々一博士に得る所の説なり而して余未だ此集の百々一発句果して花なき映日果の如きか或は実なき茶?の如きか抑々亦花実を具ふる桃李梨梅の如きかを知らざりしなり?る嘗みに花街に遊び一老妓の儕輩に語るを聞く曰く此集の百々一を採り之を三絃に上せば坐客の纏頭常に一倍を加ふと又一日田家を過る一老農余の為に語つて「(巻才)」曰く今年若早りせば此集の発句に撰み以て上帝に祈らん必ず心に感応あるべしと依

て漸く謂らく嗚呼此集の功驗較著なる既に此に至るか則ち其発句なり百々一なり能花実を具ふる桃李梨梅の如くなるや知るべし今より以後培養懈らざれば其華益々？に其実益々美に其功驗感応亦今日に数倍するもの有ん諸子其れ勉？など屁理屈をいふもの亦例の蜂狂蝶戲堂主人にて候

申の六月「(吉ウ)

序

流行に後れぬとの言葉は。流行を追ふ勢ひなり。追ふ勢ひの後れぬと云ですら。なかなか難ものなるに。況て是に魁せんとは。最ト最ト難わざなるべし。近時発句都々一会の流行するや。此所に広告の種蒔あれば。彼所に？？の花実ありて。投吟諸君が心を接する。暇もあらぬ旺盛は。文化進歩の余沢と云んか。然るに会の斯くまで世に流行なすにも拘らず。其秀吟玉句を蒐集。是を？子に編なして。江湖の同好諸君に頒布の。拳をなす者非るを。憾となして居し折柄。娯楽舎は早くも爰に着眼なし。商家のならひ進取の氣象。是を月並に発行なし。世の流行に魁して。蔵人実入の多数を願ふと。題も其俚月並発句百々一集と名け。第一回を発売せしに。「(式才)」当り外さぬ目途の弓張。つき並集とつきせぬ評判。其第二回の端書は。吾儕の筆にもせよと。出版人が屢々請ど。未さき青き操觚の伎くれ。出過てあた白紙に。羞をかくのも知恵なきことと。引込思按の逃口上。辞めど肯ぬ義理づくめ。追々迫りし二回の刊行。詮方なげ首机に凭れ。頭上かきかき筆とれど。物に畏怖たる盲目蛇。ぶるぶるもので押強も。諸君の美玉を後にして。瓦礫に？して吾儕が填詞を。表紙の裏にぬたくらせしは。清女の辞に身の程しらで物書こと悪しと云しが。是等のことにてあるなるべし

明治十七年水無月上浣

囀々舎竹里誌「(式ウ)

月並発句百々一集 第二回

都々逸

点者 春雨亭三眠

題

扇

廓

夕立

納涼

蚊や

夏氷

しのぶ

有明月

短夜

不逢恋「(九才)

三点之部

主のしんせつ私しはあつくうけて解ます夏氷 木曾藪原白雲
主は水性わしや納涼舟暑くなる程浮かさるゝ 諏訪永明大川
浮気だしても心が要いつか未広主のこし 南深一意気也
風のまにまに靡いてぬれど根じめ慥かな釣しのぶ 南深一酒嫌
今日や消なん我が玉の緒は露の情けをつりしのぶ 諏訪落台竹女
大事に育てた箱入ものを誰か解かるゝ夏氷 花月社うかれ猫
暑い情に堅固な私しも心からとけたよ夏氷 北深志由縁屋紫
逢を松浦の身は浮舟としらぬおまへはかくれ岩 木曾贄川桃紅
気促に鳴海の絞りの浴衣履歴咄しも蚊やの内 南深志阿宝丹子「
(九ウ)

川

遠いむかうの夕立雨にふらぬ里まで涼しさや 木曾贄川龜齡
おなし深山で焼けたる炭と椽につられてある葱 今町梅露
あかぬ遊びも廓のおきて鐘をかぞへる行燈部屋 北深志愚痴丸
あつい情けに遂ほだされて解けるきになる夏氷 木曾贄川三茶
君を待夜に軒吹く風はしのぶにさわるも気にかゝる 木曾贄川羽
逢はぬ中さへ思ひはつもる風でのろけの増恋路 大妻闇雲
丸い咄しも四角な蚊屋の中でするのは夫婦連 木曾福島蘇山
秋が来なら仕方もないがいつまで妾しを釣しのぶ 北深六清月庵
どうでおまへは夕立心照るやら降やら時々かわる 麻績徳一
骨を磨いていく末広く供に嬉しき扇折 芋洗連自笑「(十才)」
逢ぬ苦勞が身に重なりておもき枕の恋の床 芋洗連辻風舎
消てならぬといはれたランブ終夜つられて蚊屋の外 美寿々庵可

笑

短夜を恨む私の心もしらず憎やおまへは酒の酔 南深志意気也
産れは函館水性なれど人にすかれる夏氷 大町一六
雷なりかづけに遂二人りして蚊屋の内より雲や雨 木曾平沢枕流
廓歸りの気も細道の足も心もおもくなる 豊科満鳥
夕立に逢ても慥なお前の体始終かさけがあるわいな 南深志庭女
思ひ出せしも月頃日頃見づにあふまい峰の花 麻績藤一
霜枯れ果たる蘆間の小舟今は世に出る納涼時 呵々一笑

逢ことをないて幾夜を過行床にかわく間もなき袖時雨 梅雨亭一
酌(十ウ)

急に夕立降たが縁で今日が嬉しき濡初め 阿宝丹子
手持ぶさたに私しを主はよくもおもちやにする扇 各国堂一香
名残おしげに明こす今朝の月に思ひをますわかれ 御天氣宜敷
心有明曇らぬ胸の主にまことを見せる月 瓢々堂

好た中なる添寝の蚊屋に入れて嬉しき夜半の風 南深志其跡
開きかゝりし此捨扇拾ひ上しが一思案 読人知れず

有明の月に口説のときれし窓に粹な一声時鳥 木曾敷原佳山

月に村雲納涼も場合他人行儀のおもしろさ 諏訪永明喜月

鳶のかつらの木曾かけ橋は夏の氷も解かぬる 木曾福島松声

更て廓に首尾する間夫が忍ぶ人目の裏伝ひ 南深雁々堂(十一
オ)

はねはおれても末広々と心要めの福扇 南深志下戸

それと夕日に赤らむ顔をかくす扇は御影堂 今町梅露

解たやうでもまだ肌さむい心に隔てのある氷室 北深志夢助

廓の狐や猫めのゑじき通ふおきな白鼠 南深志酒嫌

逢ぬ思ひがなほ増鏡曇りがちだよわしが胸 費川鷲詰

名残りおしみて空眺むれば月も朧に明け残る 大妻闇雲

晰しのこりがまだ有明の月にぼんやり送る影 清月庵

堅き誓ひの恋路を踏で薄い心にからもどり 費川南枝

思ひ恨を有明月に照して見たさよ恋の間 福島松声

逢ぬつらさに濡せし袖を絞る鳴海の恋浴衣 雀舎轉(十一ウ)

互の思ひを要でくびり風の便りで未広く 北深自由生

短夜は忍び忍びに逢のはつらさ咄す間もなく明の鐘 北深志一艸

主に扇の便りの風も神の恵のひきあわせ 芋洗連福は内

短夜ながらも待身にや長き忍ぶ相図の時の鐘 北深志中宗

夕立の雨をとのぐとよる辻堂で遂に濡しか差向ひ 花雲堂

私しや傘主しや夕立よ晴て逢ふ日はさらさない 麻績柳夫

たまに首尾して逢ふ短夜は夢も結ばで朝ぼらけ 七厘尊者

人目しのぶの軒端にそつと風の便りをまつばかり 万楽堂居眠

有明の月は小窓に影かたむきて待もつれない朝ぼらけ 千束生

さして行衛も夕立雨に傘も破れて身をぬらす 幅上小梅(十二
オ)

重い鯨が身がるに化て浮た同士の涼み舟 万楽堂居眠
無理な首尾して逢短夜は察し心もない鳥 新氣亭

ながめ吉原廓の気色時も桜の宵月夜 瓢々亭

??アガアマ目はしのぶとも主にやあかはらたればせぬ 満水庵

深志

当座の眺めと私を釣て秋が来たのか捨しのぶ 各国堂一香

雪の肌への扇を見初めそつとしみたる恋の風 麻績喃士

逢れぬ恋路も世に憚りの関の戸ざしの堅ひゆへ 四海庵

添寝してさへアノ難波江に蘆の短夜つらむ鴛鴦 北深志竹

解てはなしも出来ない此身日陰に焦るゝ夏氷 四海庵

的と那須野の気は強弓の扇に其名も立矢先 雁々堂(十一ウ)

逢ぬつらさに身はおとろへて向ふはづかし十寸鏡 費川飄々然

までと逢ぬをじれては主のかどの格子に八ツ当り 長野道楽

月の桂男あの蚊屋中へ入れて遠慮も夏の閨 北深志竹

過し昔しも開化の御代もにほん治る扇箱 幅上小梅

思ふ心を皆有明て云ふにいわれず残す月 珍頓舎

風がなかだちする椽先であふて嬉しき夕納涼 四海庵

雪の肌へに白地の浴衣主をすきやの夕納涼 長尾信芝

琴の調べもやつれし姿逢ぬ恋路に身をつくし 南深志四海の家

五点之部

主は水性わしやすゞみ舟暑くなるほど浮かさるゝ 南深三雁々堂

(十三オ)

蚊屋の中から蚊ほどのな声も洩た浮名がやかましい 中町其跡

流れ尽して今この廓によるべ涙のうかれふね 諏訪宮川しづか

又のあふせはおちかないなれど名残おしさよ明の月 南深志茶好

得心ずくにて扇の帯をとけば自由の風がふく 南深志意気也

とけて添寝のまだ間もないに心ないぞへあけの鐘 北深由縁?紫

心せきたつ気も短夜の明けてほんやり残る月 大妻うかれ猫

曇りなき空に隠るゝ有明月も忍こゝろに身のほろり 諏訪落合竹

女

人の軒端へ私しやしのぶ身で主のなさけの水をまつ 麻績宮川晴雲

曇りがちなる心のうちをはやく夕立晴したい 中川手語多々々
あつい思ひを三味線系にかけてひかせるすゞみ舟 福島上田松声
(十三才)

釣れながらもなほ青々と軒に通宵しのぶ草 荒井四海庵
手柄なすのは扇のかなめ弓矢で九郎は敵味方 贅川鶯語
おくり出てもまだ気が残るはかない廓のきつねかじ 長尾信芝
針金の細い情に遂からまれて軒にうきめをしのぶ草 大妻闇雲
神の恵みの夕立雨に濡て色ます民の草 贅川大贅々

腹の立よに降る夕立はあともさつぱりするはやさ 北深志清月庵
仇な二上り夕月影も浮た調子の納涼ふね 南深志狂人
縁と鳴神二人りが中のすいをきかせし俄か雨 南深志辻風舎
あつくなりやこそ人目を忍びぬしと二人で納涼舟 贅川摘翠園
悪縁か因果同士か仇きの末か逢れぬ人程きられぬ 諏訪篤木好静
(十四才)

風の便りも音なし川の水にこがるゝすずみぶね 北深志竹
短夜の胸に響きし時計の数は思ひがけなき明六時 豊科満鳥
花はなくても青木の下に扇づかいの夏景色 南深志瓢金
巻れからまれ釣れて居れどいつか芽のふくしのぶ草 北深志竹
操たつれば扇の文字もいつかめぐりて大井川 南深一?女
まちにまつたるあの夕立がくればあわてる雨もふり 上田町清風
蘆の節なる此短夜を啼て明石の浦千鳥 荒井四海庵
国も所も名もしらぬ火のもゆる思ひのこの写真 六九居眠
ぬしに釣れて浮世を独りあかしかねたる蚊屋の中 北粟田遊
まだよいと思ひながらも遂転寝の夢を残して明の鐘 梅雨亭一酌
(十四才)

短夜に長い苦説が聞からまれて心小窓に残る月 各国堂一呑
逢ぬ恋路は沢辺の蛍水に思ひの身をこがす 北深志瓢々亭
母衣蚊屋の中に愛らし浮世のよくをしらぬ姿の子の寝顔 北深志瓢々亭

短夜のおしむ別れに気を奥庭のそつと枝折を明の鐘 南深三雁々

堂

思ひこんだる私やあの扇あつくなる程はなしやせぬ 南深志静我
鮎海月しや鱈ない廓鯨さんまよ鯛ぞ鯉 贅川鶯語
思ひ相生嬉しくむすぶかみの糸にしかついで扇 中町五志庵
けふの夕立結ぶ神となりて嬉しき新枕 諏訪篤木好静
おもひ恋路をかるがるそうにうかれ廓へ急ぎ足 豊科吟丈
七点之部 (十五才)

それと岩根に思ひをかけて露をふくめるしのぶ草 麻績雪窓
虚言を夕立来る振り見せて余所へそれたる空模様 豊科吟丈
舞姫のかざす扇に立恋風がそつと身にしみます思ひ 南深志琴丸
丸い中でも人目があると角をつけたるすずみ台 読人知れず
釣れながらにまつ夜は明ていと麻ましはづす蚊屋 中町雁々堂
操たてぬく私しの蚊屋へはいる勝手の窓の月 南深志雅楽
責て入る蚊が寝耳についてふせぐ手当も破蚊屋 今町梅露
干てある瓜の船さへあと白浪とながす夕立庭のうみ 北深志夢助
箱入扇でだいじにすれど生のわるさにむしがつく 贅川南枝
生れし岩間を引はなされて軒にしほるゝしのぶ草 贅川大熱々
(十五才)

よいの口説に遂寝もやらすつゝ枕に明がらす 読人知れず
人のしらない思ひに積り残る谷間のなつ氷 南深一ツカミ
短夜のはなし半にあの明鳥是非も互になきわかれ 伊那木下桃守
植まぜた廓の桜に飛び来る車仇な薫りに気をちらす 南深志道楽
二葉から人にしられしあの若緑今はくるわの松の職 南深一ツカ
三
有明で残るたがいの思ひも深くかけし霞にはいる月 南深志狂人
ほれた同士の浮たる姿人もなんとか夕すずみ 梅雨亭一酌
有明の月に見送るおまへの姿人目しらすに袖の雨 六九万楽堂
あつき心を夕顔棚へあげて風まつ下すずみ 北深志夢助
返す返すと迎ひによこし行けば廓じゃかへしやせぬ 北深七玉光
(十六才)

真実明して逢れぬならば悔しいながらもあきらめる 朝沖賞樹
かたい心のこの夏氷とけて器のまゝとなる 南深志梅の家

十点之部

たがひに顔さへまだしら石のたづね廓の姉妹 北深志竹
内ぞゆかしき隅田の岸にひくてあまたの納涼舟 幅上梅輪
かみに誓ひの末広々と厚い情を仰ぎたや 大妻梅の舎馨
一寸ちらして行とは憎い花の廓の小夜あらし 北深一 竹
暑い情で買はるゝ主の腹をつめたくするこつり 北深志白雨
かゝる濡衣たが夕立の晴てほしたやしめる袖 南深志雁々堂
生れがらとてほねほつそりと色も白地の京扇 豊科吟丈「(十六ウ)

丁度よき首尾嬉しいなどゝおつに調子をゆふすずみ 新橋夢のうき橋
別れても影は空目にまた有明の月をかたみに残す君 北深志竹
ふられて帰りし此ふゆだちを思へばぬかつた恋の道 白井雪窓

春はいつしか尾張の扇夏のおつたを仰ぐ風 荒井四海庵
地 離れ座敷のおくゆかしさを見せて客まつ釣しのぶ 豊科吟丈

天 あいに相生首尾松風を入れてすずしの蚊屋の中 大妻梅の舎馨
(十七才)

辛抱しとげて相縁きゑん乗つて娯楽の納涼舟 三眠「(十七ウ)」
明治十七年五月廿日出版御届

同 年六月 出版

著者兼出版人 長野県平民 宮沢宗吾

信濃国東筑摩郡松本 南深志町百三番地

売捌所 南深志町 知新堂
売捌所 同 内外堂
売捌所 同 水琴堂

売捌所 神道西 慶林堂支店「(十八ウ)」

月並発句の序文
起て見つ寝て見つ蚊帳のそれならで広き世界に夕立や田を視巡りの
神ならぬ人の心のさまさまに酸いか甘いか渋かるか知らねど柿の初
めよりパツと世間に立ちし名は霞か雨かふる池や蛙とびこむ水の音
それならなくに遠近に聞えそめては中々に愛でや果つべき初雪や二
の字ふみだす下駄の痕肆の席に透もなき其賑はひを寿ほぎつ今三回
の序文に一寸一言かけはしや命をからむ薦かづら拙なき筆のすさみ
もて古きを温ね新らしき趣向もがなとお「(序一才)」笑ひの種をい
さゝか蒔おくになん

蜂狂蝶戲堂主人述「(序一ウ)」
月並都々逸集序

僅か二十六文字が。字あまりにして三十字に足ぬ。名も百々の俚
謡と云つば。三筋の糸に音を借りて。意気な宴席の粹達に。愛で囃
れさて調子づき。撥も慮外もなげ島田。琴歌妓鳴す爪しらべ。猫の
喉元舌の先。馴染も深き声たて。頬辺ふくらめ。齒のさきそろへ。
太く細く抑へつ揚つ。謡ひ出せる時しもあれ。仇な文句か無意気か
野暮か。浮かれ心の品評。興がかゝればお臍もよれ。情が深けりや
鉄腸とろけ。粹が通れば嬉しく思ひ。便り聞ねば自裂体。無情不実
は怨の種。可愛恋着心なつかしいと。聴く人ごとに七情が。胸に感
じ肝に応へ。娯楽の道の主要物と。今は昔に弥増して。都会偏鄙の
けじめなく。時も遅しと先を競ひ。流行の風吹き靡き。此所に「(序
二才)」彼所に巻の会のと老若雅俗一般に。仇な文句や粹な口調に。
首を疾まし脳を痛め。天晴れ名吟の誉れを得て。天にも地にも又人
にも。誇つて謡ひようきよくはれつ。後の後まで世の口に。膾炙ぞ
娯楽の極意なると。吟士達の競争に。鞭を一本当て込んで。月並百
々一を企てたる娯楽舎の主人こそ粹興たつぷりの同業者である哩。

松本日々新聞編輯局裡 梅廼舎清香戲述「(序二ウ)」
月並発句百々一集 第三回
百々一

点者 春雨亭三眠
暮雪庵吟丈

題

うれし かなし はずかし あさまし
みじらし おかし ゆかし なつかし
むつまじ あひらし いとし くやし
にくらし ばからし うらめし くるし
こひし めづらし やかまし うつくし(七才)

番外三点の部

いとし可愛と思ひしことも今はむかしにして苦勞 木曾熱川矢策
顔に袖あていひ出し兼るおとめ心のあいらしさ 泉水
きぬぎぬに心あやなす浜辺の風邪はいとしいとしの身にしみる

今町梅露

待侘し夜半の寝耳にヲヤ珍しと粹な初音の時鳥 西洗馬辺ヲコ
悪いよと言のも人目しらぬ振してつめる股 木曾熱川其文
人目あるかと猶更つんとしらぬ顔する憎らしや 木曾敷原佳山
月はみちても悲しいものはお施主のしれない木魚講 初会舎手習
私しやつなぎし心の駒よ主は桜でちるくやし 都々逸亭喜千
傍輩の数多ある中因果な私独りお茶ひくはづかしさ 初会手習

(七ウ)

しらぬ旅路で故郷の人にあふて咄しがなつかしい 芋洗連福八内
秋も待たずにハテしほらしやそよぎ初めたる青芒 蓮光
苦勞で瘦たる私をとらへふといあまとはうらめしい 木鼠
蒼ながらも愛らしそくに色を持たる禿菊 蟻ヶ崎光風
あわ雪ときゆる此身を恋そうに苦勞して居園の竹 泉水
染て紅葉の色よき中をちらして憎らし秋の風 鐘舎
すねて居た間に東がしらむ後で思へばからしい 泉水
一寸おかしとぬくかんざしを心あるみを明石玉 清月

昔し床しき弓矢にかえて今は街に車曳 上田山人
小首かたげていとなつかしく故郷眺める驗査医者 芋洗連一搦
(八才)

浪にせかるゝあの鴛鴦は俱で見めるものいぢらしさ 諏訪蔦木好静

やかましいほどほめたてられて名乗かねたる辻角力 北深志可笑
人も通はぬ安達が原に咲てあさまし鬼薊 猫々堂斑草
洗髪した乙女の姿乱て床しき夕すゞみ 堀米粹子
無心届いてやれ嬉しやと踊り那須野の白狐 ばからしい
いとしいとくに気をもみつくし風にやつるゝ糸柳 梅の舎
風鈴の音色床しき気を奥座敷君にこゝるを掛簾 小性
鬼蜘蛛の張た露の手管の畏に懸つてくやししい黄金虫 可笑
主の来ぬ夜は涙の床に独りかなしく泣き寝入 粹子
共に競て耳やかましく浮た祇園の馬鹿ばやし 猫々堂斑草(八ウ)

露と青葉に暁かけて咲て嬉しき遅桜 醉吏
恋しさに抱て昼寝も世に憚りのなくて涼しや竹婦人 梅の舎
籠で売るゝ身のかなしさに鳴て聞せるきりぎりす 娯粹
雨雲の後に乱し其果髪の中にいぢらし月の櫛 長野町梅雨
神官は猶も神代の床しい風よ頭顱の原に鬻とゞむ 下伊那飯田玉

露

睦まし過ては苦説をおこしがまんくらべの背とせな 南深志銀花
文明の世にも珍らし鯨の種で猫のお服が鯨となる 芋洗連一搦
梅が笑へば恥かしそふにほゝと一と声匂ひ鳥 五葉舎まつ平
積り積りし苦勞もいつか解けて嬉しき雪の梅 結講
憎らしいぞへ新聞記者と明の鴉に人の口 花の舎(九才)
未は女夫に業平橋よ嬉しの森かよ首尾の松 蟻ヶ崎光風
番外五点の部
やつれ垣にもあかない色を見せて愛らし萩の妻 梅輪
思ふ一ト筋届かぬうちにきれてくやししい電信機 四海庵
結ぶ妹背の中吉野川色も床しき花の影 北深志瓢々亭
実ないおまへと夢さらしらず誠あかしてアゝくやし 木曾贅川矢

策

便る力もまだなよ竹にすがる朝顔いぢらしさ 四海庵
橋の下行あの屋根舟の内や床しき三味の音 北深志松の浦
小夜更てたつる屏風も中睦敷浮名もらさぬ蝶番ひ 梅露
更る寒さに気をおく霜の解ぬひと夜が怨敷 東町松旭(九ウ)

琴の調もいとさはやかに遠音床しき奥座敷 四海庵

筐の扇を手にとりあげて床しき風さへ今じや仇 甲州篠尾のし恵

胸に苦勞も信濃の山と高き浮名も浅間しや 白雨

梅が香を慕ふ驚ホウホケ今日は首尾も初音の嬉鳴 沖輪

逢ふて心も晴よとすればまたも憎らし袖の雨のし恵

塞ぐ振すりやかばんを明て機嫌とり出す馬鹿らしさ 四海庵

惚た昔にあかれた今は見るもくやしき此写真 沖輪

モシといふさへまだ恥かしく言葉余りを包む袖 木曾敷原佳山

独りふすまの寝られぬものを夜すがら憎らし松の風 かほる

抱て寝て居て浮名のたゝぬほんに愛らし竹婦人 光酒楽「(十才)

実まで結んだ嬉しい中も元は当座の花は末 東町星月

離座敷の格子を洩て聞こゆる線の音奥床し 諏訪篤木正風

異見するのは真身の人と思ひながらもつらめしい 南風庵

根引したからむつまじかろと思ひの外だよ日々苦説 上田町香風

番外七点の部

秋の風ゆえ気を楓葉の染てくやしき散心 丸山光風

心の曇りがさらりととけて嬉しそふだよ月の顔 伊那松島花月

赤い心を内外なしに見せて美し色硝子 本町意気也

八釜しやつだと追出されて鳴々淵せに飛ぶ蛙 中町喜千

こんな嬉しい言葉がなぜか罪や恨になるだやら 芋洗連福八内「

(十ウ)

思ひ掛たる言葉の綾も解けて嬉しい恋の謎 竹

声は細るし身はやつれるしいとし霜夜のきりぎりす 光村山水

絞る袖さえ藍染し身の糸も恋しく鳴海潟 雁々堂

夕立うらみも恋から曇る晴て嬉しい色の虹 粹狂子

思ひ近江の嬉しい顔を一寸三井寺くれの鐘 各国堂一吞

番外 人

細き流れ奥床しさは堅き心の岩清水 木曾贅川三茶

同 地 見捨らるゝと夢にもしらは染てくやしき恋衣 満鳥

同 天「(十一才)

末は浮名の立巻紙に書も恥かし文の綾 沖

本評

五点の部

結ぶ契りも浅茅が原のちりてかなしき艸の露 巾上梅輪

つもる浮ふし気も呉竹のひと夜切とはうらめしい 荒井四海庵

思ひ細りし身は片糸のよれど逢はぬが麻ましい 北深志瓢々亭

縫れ縫れがさらりと解けて心嬉しいあらひ髪 水交連泉水

あき果られては錦を脱て今はかなしき裸体山 豊科村満鳥

親に阿波路をはるばる越えて可愛らしさの国訛り 今町梅露「(十

一ウ)

緒環のいとし娘を繰返しては結び合せしこの赤縄 荒井四海庵

縁につながれ気も愛らしく世事も涼しの夕簾 三毛猫

削る桜に心の誠残す手跡のうつくしさ 西洗馬辺テコ

一寸葉がくれあからむ顔も何処か愛らし冬椿 結講

主の心のあらだつ浪をやさしく潜た浜千鳥 北深志松旭

結びあはして嬉しや主と深き契りのちまき餅 木曾贅川其文

待に來もせず私やばからしい蚤に帯とく蚊屋のうち 浅間堂亭池

煙艸輪にふき身の行末を考へ見るほど馬鹿らしい 甲州篠尾のし

書

月の姿の邪なしに澄てうつくし水鏡 諏訪篤木正風

恋しひ思ひで深山をこして主の軒端にしのお艸 南深志琴丸「(十

二才)

音にびつくり見て美しい消て跡かたなき火花 南風庵

浮つ沈つ漂ひながら互にむつまじ都鳥 梅雨亭一酌

立派に表は飾つちや居れど裏見りばかりし押絵雜 北深志白雨

深き契りの千尋の文も主を恋しき臈書 秋月庵菊見

妹と妹との立ふる繭はいとししいとしの枿量 長尾信榮

鉄の鎖りに身をつながれて悲しい浮目の舟の橋 向不見

親のしつけも守らぬ娘心あさまし重ね襖 松廼舎

翼揃へて中むつまじくにしきで故郷え帰る雁 芋洗連一摺

過て忘れし悲しひ種を又もとり出す土用干 清月庵

文にあらゆる氣随を書てそして逢夜ははづかしい 芋洗連福八内「

(十二ウ)

表には見せぬ心の其苦しさを胸に置のいとの綾 各国堂一香
口も聞かまし笑顔の床し操崩さぬとこの雛 光村酒楽
見ても愛らしあの母衣蚊屋に寝かしておく子の現笑 女鳥羽連二
君子

今も今来て火を取虫がいとしや又きて身を焦す 四天王連原
鴉鳴さへ気になる文箱明てくやしき上草履 北深志夢助
すいて居るなら嬉しいことを聞せておくれよ合せ釘 内月庵
星の祭りの晴たる夜半に解て嬉しい恋ころも 八八葛木有賀好静
裏を返して畳屋さんが床のよいので嬉しいが 池田保老庵破笠
終夜釣られていぢらしさふに心たゆみし蚊やの隅 雀舎囀々
繭をたゞせばお小袖ぐるみ糸しや器械で裸体虫 吟歌(十二才)
漣の上に浮寝のいと睦しく思ひ入江の鴛鴦とおし 南深志冲輪
思ひ熱田で神掛巻もやがて嬉しく鳴海潟 蟻ヶ崎香風喜
水に終夜居る悲しさに声を古井に鳴蛙 六九竹輪
山姫の色に心を紅葉の錦立田浮名が怨敷 大妻梅の舎馨
七点の部

花よ涼よ月見に雪とつれ四季眺めの二人連 キソ賢川頓田失策
空も隅田に今宵は晴て人目うれしの森の月 しら雨
龍の虎のとあらさふけれど床でむつまじ二幅対 光村酒楽
苦しい異見の葉が毒となりていぢらし重る積 豊科満鳥
酒の機嫌で調子もはづれ打もおかしき舌つゞみ 木曾賢川三茶
(十三ウ)

宵に揉した羽織の皺を火のしでおかしくあてこする 荒井四海庵
嵯峨の嵐に添ふ琴の音も糸も床しき柴が軒 中町冲輪
色は匂へど書く玉章のちりぬる墨さへ怨敷さ 同
長き夜寒を鼠に待て居るもばからし升落し 同
主に釣れて私しや恋しさの心萌黄の蚊屋の内 六九竹
虎と見て石に立矢は恋路の意気地堅い誓も立とふす 芋洗連一摺
泣たそばから又だまされて笑顔愛らし風車 北深志清月庵
思ふ私しのきも白川の夜舟で寝て居憎らしひ 向不見
珍らしや石の地蔵がツイ濡衣の色にからまる雨の鶯 五葉舎真ツ

平

思ひ切戸を又来てそつと叩く水鶏の憎らしや 大妻梅の舎(十
四才)

たてる操に気もはりませの心床しき対屏風 亀鶴
筐の歌さえ書この筆も今はかなしき信田妻 中町冲輪
覚ぬ恋路は濃紫の包むふくさの中の文字 芋洗連一摺
首尾をかさねてうれしい重のふたに浮名の高蒔絵 梅の舎
あついで情に引とめられて結ぶ赤繩の糸清水 しら雨
苦しい工面のかりがね絞り暑い思ひの移り替へ 北深志松の浦
由縁漉出す仇紫の色もなつかし吾妻海苔 中町冲輪
十点の部

歩としたことから角までなつて王手うれしき京の首尾 中町冲輪
年を古手の肌着も破れ故郷なつかし旅衣 無鉄砲(十四ウ)
水も洩さぬ二人が中は切れてくやしき釣瓶 六九竹輪
拍子揃へてきも合槌の音もむつまじ小夜砧 中町冲輪
生れがらとて色艶々と見るも愛らし京唐子 無鉄砲
紫の露にぬれても思ひはさめぬ色もなつかし杜若 冲輪
水も枯野の奥床しさにすく覗きし井戸の月 大妻梅の舎
捨てた浮世の迷ひの雲が晴て床しき庵の月 芋洗連一ツカミ
なんと音沙汰返事が梨の礫でつれなき忍び文 しら雨
それと野辺にはまだ恥かしく筆に思ひを土筆 六九竹輪
人
今宵逢ふのが是桐の葉と落て悲しき秋の風 芋洗連狂人(十五
才)

地
風の便りも今日ふきじみの琴にうれしい妻しらべ 北深志町竹輪
天
引た霞も八重九重の内ぞ床しき御所桜 南深志町冲輪
軸
主を三熊野誓ひにかけてあふ夜は憎らし明からす 三眠(十五
ウ)
明治十七年八月廿五日出版御届

同 年十一月 出版

〔定価金十銭〕

著者兼出版人 長野県平民

宮沢宗吾

信濃国東筑摩郡松本

南深志町百三番地

売捌所 南深志町 知新堂

売捌所 同 内外堂

売捌所 同 水琴堂

売捌所 神道西 慶林堂支店〔十六ウ〕